高清水町文化財調査報告書　第２集

経ヶ崎遺跡
観音沢遺跡

平成12年３月

高清水町教育委員会

序　　文

平成10年３月高清水城跡の調査報告書として第１集を刊行いたしましたが、今回、経ヶ崎遺跡・観音沢遺跡の発掘調査が終了し、第２集として刊行する運びとなりました。

先人の文化遺産を鑑賞する事は、私たちの欣喜すべき宝への出合いであり、これを将来に伝えることも崇高な義務ではなかろうかと思います。

歴史とは生活の歴史であり、同じ郷土に生まれ育った者として先人がどんな生活を営み、どんなことをして暮らしてきたかを理解する手がかりともなります。

ここに報告書を刊行するにあたり、調査に際しましてご協力頂きました宮城県教育庁文化財保護課並びに関係された方々に深く感謝申し上げますとともに、この報告書が郷土史を一層理解する上での資料となりますことを祈りご活用下さることを念じ発刊のことばといたします。

平成１２年３月

高清水町教育委員会

教育長　佐　藤　幸　一

例　　言

1．本書は高清水町が計画した町道改良拡幅工事に伴う経ヶ崎・観音沢遺跡の発掘調査成果をまとめたものである。
2．調査、報告書の作成は高清水町教育委員会が主体となり、宮城県教育委員会が担当した。
3．本書における土色の記述は『新版標準土色帖』(小山・佐竹：1967)に基づく。
4．本書の第1図は国土地理院発行の1/25,000「高清水・築館・真坂・荒谷」を複製して使用した。
5．報告書の作成に際して、発掘調査時に登録した遺構番号に欠番が出たが、原図の番号をそのまま本書に使用した。また、遺構番号は通し番号である。
6．報告書における、遺構、遺物の実測図、写真図版の縮尺は原則として以下の通りである。
　遺構　1/60、1/200　　遺物　1/3
7．遺構の種別については次の略号を使用して区別した。
　竪穴住居跡（ＳＩ）、土壙（ＳＫ）、溝跡（ＳＤ）
8．本書の編集、執筆は宮城県文化財保護課職員の検討を経て、佐藤憲幸、後藤秀一が行った。
9．発掘調査の記録や整理した資料・出土遺物は高清水町教育委員会が保管している。

目　　次

第Ⅰ章　遺跡の位置と環境
　1　遺跡の位置…… 1
　2　周辺の遺跡…… 1
第Ⅱ章　経ヶ崎遺跡
　A　調査に至る経緯と調査の方法…… 4
　B　発見された遺構と遺物
　　1　竪穴住居跡…… 4
　　2　溝跡…… 52
　　3　土壙…… 53
　C　考　　察
　　1　出土遺物について…… 57
　　①　各住居跡毎の遺物出土状況…… 58
　　②　土器の分類…… 58
　　③　土器の組み合わせと年代…… 61
　　④　須恵器のあり方と特徴…… 64
　　⑤　胴部下半を欠く土師器甕について…… 65

2　遺構について…… 65
①　大型住居跡について…… 66
②　集落の構成について…… 66
第Ⅲ章　観音沢遺跡
A　調査に至る経緯と調査の方法…… 69
B　発見された遺構と遺物
1　竪穴住居跡…… 69
2　溝　　跡…… 76
3　土　　壙…… 76
C　考　　察
1　遺物の年代…… 78
第Ⅳ章　まとめ…… 79
引用・参考文献…… 80
写真図版

調　査　要　項

[経ヶ崎遺跡]

遺　跡　名　：経ヶ崎遺跡（宮城県遺跡地名表登載番号：44003）
所　在　地　：宮城県栗原郡高清水町字上経ヶ崎水押他
調査原因　：町道鳴子線の改良拡幅工事
調査対象面積　：約20000㎡
調査面積　：約6200㎡
調査期間　：1998年（平成10年）４月８日～６月29日
調査主体　：高清水町教育委員会
調査担当　：宮城県教育庁文化財保護課

[観音沢遺跡]

遺　跡　名　：観音沢遺跡（宮城県遺跡地名表登載番号：44019）
所　在　地　：宮城県栗原郡高清水町字台町
調査原因　：町道経ヶ崎－台町線の改良拡幅工事
調査面積　：約830㎡
調査期間　：1998年（平成10年）７月１日～７月21日
調査主体　：高清水町教育委員会
調査担当　：宮城県教育庁文化財保護課

第Ⅰ章　遺跡の位置と環境

1　遺跡の位置

経ヶ崎遺跡は栗原郡高清水町字上経ヶ崎に所在する。本遺跡は高清水町役場の約1㎞西にあり、現在は宅地、畑、水田などに利用されている。

高清水町は宮城県北西部に位置しており、栗原郡の最南端部にあたる。地形をみると、栗原郡付近には奥羽山脈から東に派生する陸前丘陵の一部である築館丘陵が発達しており、高清水町はその末端部に位置する。築館丘陵は高度を減じながら高清水町の北部・西部・南部に展開しており、町内を東流する善光寺川・小山田川・透川によって複雑に開析され、いくつかの樹枝状の地形を形成している。これらの中に、町の中心部の西側にあり、小山田川と透川に挟まれた北西から南東に延びる低丘陵がある。本遺跡はこの丘陵の南東端部にあり、丘陵頂部のほぼ平坦面ないしは緩やかな南斜面に立地している。標高は約25～35mである。また、丘陵地帯を画している各河川の流域には扇状地性低地が発達しており、現在は主として水田として利用されている。

観音沢遺跡は高清水町字台町に所在する。本遺跡は高清水町役場の約1㎞南にあり、現在は宅地、畑、水田などに利用されている。経ヶ崎遺跡からみると透川を挟んで南東側の丘陵北端部に位置し、遺跡のやや西側を奥州街道(旧国道4号線)、東側を東北新幹線が縦断している。標高は今回の調査区で約28mである。尚、本遺跡は昭和51・52・54年にも宮城県文化財保護課によって調査されており、竪穴住居跡13軒や奈良時代前半頃の土師器の良好な資料が発見されている。

2　周辺の遺跡

高清水町には縄文時代以来、多くの遺跡が残されており、現在36ヶ所の遺跡が確認されている。これらの殆どは、標高25～50mの緩やかな丘陵上や段丘上に立地している。

縄文時代の遺跡としては、本遺跡の約2㎞北東に大寺遺跡がある。昭和30年、東北大学により調査が行われており、その際出土した沈線文・貝殻腹縁文を持つ尖底土器は、遺跡の名をとって大寺式土器と命名され、現在縄文時代早期の指標となっている。他には縄文時代前期の宿ノ沢遺跡、晩期の萩田遺跡などがある。大寺遺跡や萩田遺跡はまた弥生時代の遺跡でもある。大寺遺跡では弥生時代末期の土器が、萩田遺跡からは弥生時代中期の土器とともに大型棒状太口蛤羽磨製石斧が出土している。古墳時代の遺跡では東館遺跡がある。ここでは方形周溝墓が検出され、そこから供献用の土師器壺が出土している。奈良・平安時代になると遺跡数は増加する。今回調査した両遺跡の他に五輪C遺跡、手取・西手取遺跡、下折木遺跡などがあり、各遺跡では竪穴住居跡が検出され、集落跡の存在が確認されている。この他にも松ノ木沢遺跡、下用遺跡等の包含地とされている遺跡があり、これらの中にも数多くの集落跡が含まれている可能性が考えられる。中・近世の遺跡としては、高清水城跡、新庄館(新城館)跡、陣館跡、運雛館跡などがある。高清水城跡は昨年、高清水中学校体育館移転新築に伴う発掘調査が行われ、堀跡、井戸跡、土壙が検出された。

第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡

No.	遺跡名	立地	種別	時代
高清水町				
1	経ヶ崎遺跡	段丘	集落	縄文・古墳・古代
2	照音沢遺跡	段丘	集落	縄文・古墳・奈良～中世
3	大寺遺跡	段丘	散布地	縄文草・古墳・古代
4	向梁八遺跡	段丘	集落	縄文・古代・中世
5	座辺ク地奥遺跡	段丘	散布地	古代
6	新本山遺跡	丘陵	寺院跡	縄舎
7	森田遺跡	段丘	散布地	縄文晩・弥生・古代
8	外沢田遺跡	段丘	散布地	古代
9	明宮遺跡	段丘	散布地	古代
10	五輪A遺跡	段丘	散布地	縄文・古墳

No.	遺跡名	立地	種別	時代
11	西手取遺跡	段丘	集落	縄文草・前・平安
12	松ノ木沢田C遺跡	段丘	散布地	古代
13	台町西遺跡	段丘	集落	平安
14	下折木遺跡	丘陵麓	集落	平安
15	下花野遺跡	段丘	散布地	古代
16	豊の浜遺跡	段丘	散布地	古代
17	東館遺跡	段丘	集落	弥生～平安
18	ロノ茶遺跡	段丘	集落	縄文・古代・中世
19	新庄保跡	丘陵	城館・散布地	平安・中世
20	油山遺跡	段丘	散布地	古代
21	五輪C遺跡	段丘	集落	古代

No.	遺跡名	立地	種別	時代
高清水町				
22	五輪B遺跡	段丘	散布地	古代
23	覚緑寺跡	段丘	寺跡	中世・近世
24	高清水城跡	段丘	城館	中世・近世
25	道川遺跡	段丘	散布地	古代
26	向野B遺跡	段丘	散布地	古代
27	松ノ木沢田A遺跡	段丘	集落	縄文・古代・中世
28	勝負ヶ町遺跡	丘陵	散布地	古代
古川市				
29	大森遺跡	丘陵	散布地	縄文前・中
30	亀島遺跡	丘陵斜面	散布地	縄文晩・古代
31	長者原A遺跡	丘陵	散布地	旧石器・縄文晩・奈良
32	下蝦沢遺跡	丘陵斜面	散布地	弥生
33	下沢田遺跡	丘陵斜面	散布地	弥生
34	桜森遺跡	丘陵	散布地	奈良
35	小森遺跡	丘陵斜面	窯跡	古代
36	藤島敷遺跡	丘陵	集落	平安
37	上山	丘陵	散布地・円墳	古墳・古代
38	生保町遺跡	丘陵斜面	散布地	縄文
39	塚女遺跡	丘陵斜面	散布地	縄文・古代
40	塩崎遺跡	丘陵斜面	散布地	古代
41	一の沢遺跡	丘陵斜面	散布地	古代
42	外沢窯跡	丘陵斜面	窯跡	平安
43	新寺館跡	丘陵斜面	城館	近世
44	新田古墳群	丘陵	古墳	古墳後・奈良
45	鴻ノ巣館跡	丘陵	城館	近世
46	市ヶ坂館跡	丘陵	城館	中世
47	桜沢遺跡	丘陵	散布地	奈良・平安
48	嵐山遺跡	丘陵	散布地	縄文
49	上塚沢遺跡	丘陵斜面	散布地	縄文
50	馬場遺跡	丘陵	散布地	縄文・古代
51	北見遺跡	丘陵麓	散布地	古代
52	長根遺跡	丘陵麓	散布地	古代
53	堀場遺跡	丘陵	散布地	古代
54	小野横穴墓群	丘陵斜面	円墳・横穴	古墳・古代
55	横沢窯跡	丘陵	窯跡	近代
56	追播窯跡	丘陵斜面	窯跡	近世
57	下鴻沢B遺跡	丘陵斜面	散布地	弥生
58	十八引沢遺跡	丘陵麓	散布地	縄文晩・古代
59	小野横穴墓群（馬龍支群）	丘陵斜面	横穴墓	古墳後
60	小野横穴墓群（小高支群）	丘陵麓	横穴墓	古墳後・奈良
61	小野横穴墓群（朽木橋支群）	丘陵斜面	横穴墓	古墳後・奈良
62	朽木橋遺跡	沖積平野	散布地	古代
63	新中山遺跡	沖積平野	塚	不明
64	小野横穴墓群（岩崎支群）	丘陵麓	横穴墓	古墳後・奈良
65	岩崎古墳	丘陵尾根	円墳	古墳後
66	いもり塚周辺遺跡	丘陵麓	散布地	縄文晩
67	小野横穴墓群（白山支群）	丘陵斜面	横穴墓	古墳後・奈良
68	小野横穴墓群（米窯支群）	丘陵斜面	横穴墓	古墳後・奈良
69	羽黒遺跡	丘陵	散布地	古墳
70	貫寺遺跡	丘陵	散布地	奈良
71	須賀遺跡	丘陵尾根	散布地	縄文晩・古代
72	権現山遺跡	丘陵	集落	古代
73	稲荷山遺跡	分離丘陵	円墳	奈良・平安
74	沢田城跡	自然堤防	城館	中世
75	稲荷遺跡	自然堤防	散布地	古代
76	休塚館跡	自然堤防	城館	中世
77	城館跡	自然堤防	城館	近世
78	馬放B遺跡	自然堤防	散布地	古代
79	馬放館跡	自然堤防	城館・散布地	古代・中世
瀬峰町				
80	王壇遺跡	丘陵	塚・散布地	古墳？古代
81	空堀遺跡	丘陵斜面	散布地	縄文前
82	若石遺跡	丘陵	集落	縄文前・中・古墳・古代
83	二代遺跡	丘陵	散布地	古代
84	荒町遺跡	丘陵	散布地	縄文・古墳・古代・中世
85	四ツ壇原遺跡	丘陵	散布地	縄文・古代
86	杉ノ沢塚	丘陵	塚	古墳？
87	町田遺跡	丘陵	散布地	古代
88	藤沢東遺跡	丘陵	集落	縄文・古代
89	中二代遺跡	丘陵	集落	古代
90	長塚遺跡	丘陵	散布地	古代
91	諏訪神社遺跡	丘陵	散布地	縄文・古代
92	野沢遺跡	丘陵	散布地	古代
93	袋沢遺跡	丘陵	散布地	縄文・古代
94	北ノ沢遺跡	丘陵	散布地	古代
95	神田遺跡	丘陵	集落	古代
96	岩石Ⅱ遺跡	丘陵	散布地	縄文中
97	寺沢遺跡	丘陵	集落・古墳群	
98	藤巻遺跡	丘陵	窯	古代
99	寺前遺跡	丘陵	散布地	縄文
田尻町				
100	天狗堂遺跡	丘陵斜面	集落	縄文・奈良・平安
101	大森遺跡	丘陵	散布地	平安
102	新田柵跡	丘陵	城柵	古代
103	北小松・岩田西遺跡	丘陵・沖積平野	散布地（低湿地）	縄文晩
104	愛宕山遺跡	丘陵	散布地	古代
105	天神山遺跡	丘陵	散布地	古代
106	祈木館跡	丘陵	城館	中世
107	山前横穴墓群	丘陵麓	横穴墓	古墳・平安
108	諏訪遺跡	丘陵	散布地	古代
109	青木横穴墓群	丘陵	横穴墓	古墳
110	大貫館跡	丘陵	城館	中世
111	忠全寺跡	自然堤防	寺院	
112	神南遺跡	自然堤防	散布地	古代
113	団子山西遺跡	自然堤防	散布地	縄文晩
114	田尻小学校西遺跡	自然堤防	散布地	縄文晩
115	通木田中前遺跡	沖積平野	散布地	古代
116	通木山崎遺跡	自然堤防	散布地	平安
117	通木館跡	自然堤防	城館	中世
118	お嶋子山遺跡	自然堤防	散布地	縄文晩・古墳前・古代
119	国史跡木戸瓦窯跡	丘陵	窯跡	奈良
120	木戸館跡	丘陵	城館・散布地	平安・中世
121	金鶏神遺跡	丘陵	集落	奈良・平安・中世
122	泉谷崎畑遺跡	丘陵斜面	散布地	縄文・古代
123	北久保遺跡	丘陵斜面	散布地	古代
124	六月坂遺跡	丘陵	散布地	古代
125	御堂遺跡	丘陵	散布地	縄文・古代
126	上高野遺跡	丘陵	散布地・経塚	縄文中・後・中世
127	百根原東遺跡	自然堤防	散布地	古代
128	新堀東遺跡	自然堤防	散布地	縄文・古代

第Ⅱ章　経ヶ崎遺跡

A　調査に至る経緯と調査の方法

今回の調査は町道鳴子線の改良拡幅工事に伴うものである。

工事は平成８年に計画された。町道鳴子線は計画路線区域が周知の遺跡である経ヶ崎遺跡の範囲内であることや、勝負ヶ町遺跡等に隣接することから、高清水町と宮城県教育庁文化財保護課とが対応について協議を行い、平成９年９月に遺構の存在の有無や遺跡の広がりを把握する為、確認調査を行った。確認調査は工事計画全域を対象に任意にトレンチを設定し、重機による表土の除去後、遺構の確認を行った。その結果、工事対象範囲の全域において竪穴住居跡、土壙、溝跡などの存在が確認され、従来、丘陵の東端にのみ確認されていた遺跡の範囲が西に大きく広がることが判明した。そこで、再度各事業者と取り扱いの協議を行ったが現状保存は難しく、工事に先立ち、現道と拡幅部分合わせて約20000㎡を対象に発掘調査を実施することとなった。

発掘調査は平成10年４月８日～６月29日にかけて実施した。その方法と経過は以下の通りである。

まず道路拡幅部分の調査を先行して行い、重機による表土除去後、地山面で遺構確認を行った。遺構精査は調査区西側から開始し、終了した箇所は順次埋め戻し、現道調査のための付け替え道路を設置した。拡幅部分の調査は６月１日に終了し、現道部分の表土除去作業を６月２日より開始し、遺構確認作業を行った。それらの結果、竪穴住居跡、溝跡、土壙などが検出された。遺構精査に際しては、工事基準杭№５を原点とし、南北軸を座標北に合わせて組んだ直角座標をもとに３m単位のグリットを設定し、調査の状況に応じて、20分の１の平面図・断面図を作成した。工事基準杭№５の国家座標はＸ＝－149275.794　Ｙ＝14195.025である。また、35㎜カラースライド・白黒および60㎜のカラー・白黒写真による記録も合わせて行った。６月29日にすべての調査を終了した。

B　発見された遺構と遺物

今回の調査では竪穴住居跡12軒の他、溝跡８条、土壙18基が検出された。遺物は土師器を中心に須恵器や砥石、近世の銭貨などが出土している。

1　竪穴住居跡

【ＳＩ50住居跡】

［重複］重複は認められなかった。

［規模・平面形］一辺約5.2mの隅丸方形である。

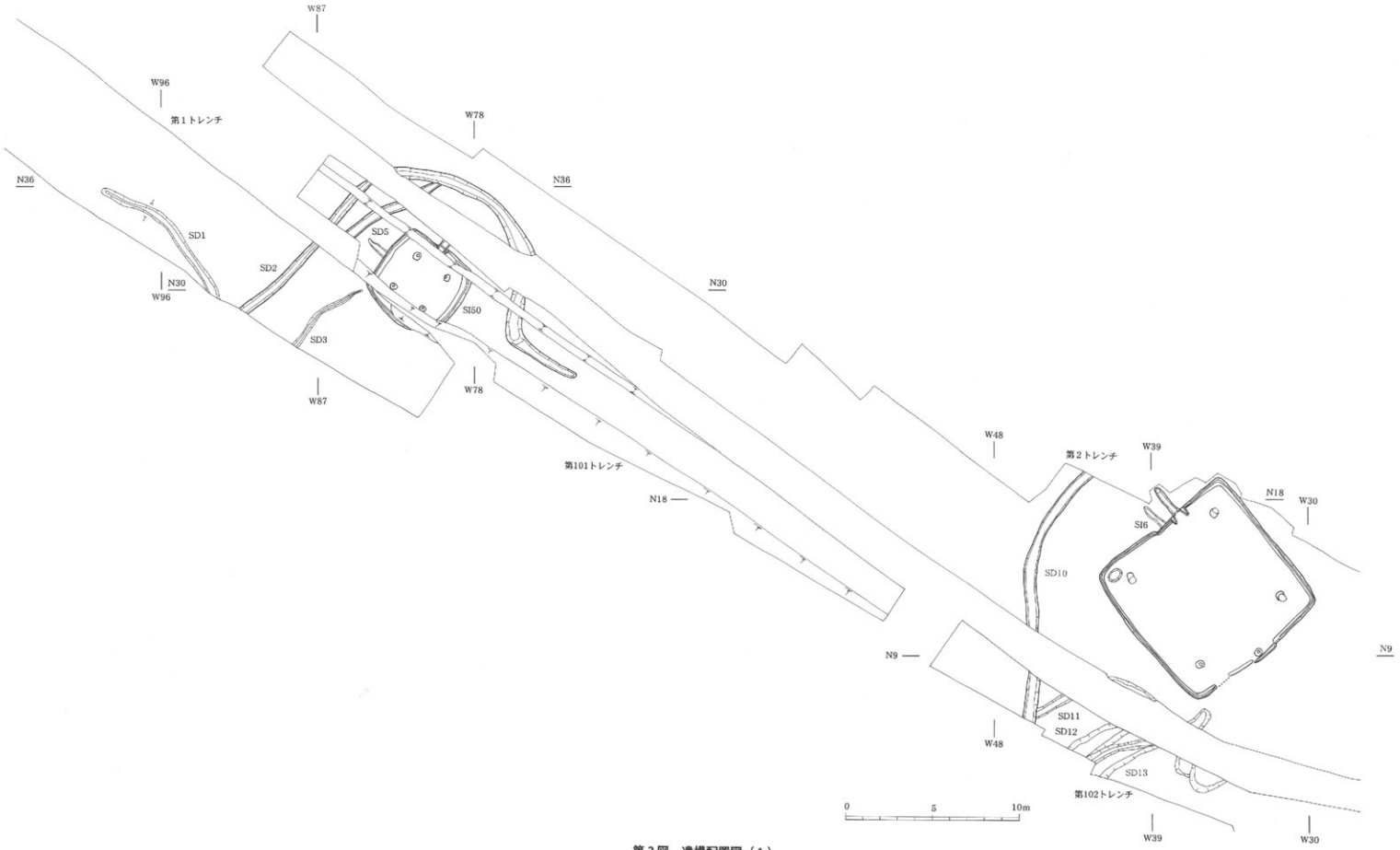
［堆積土］地山粒や黒色シルトブロックを少量含む、自然堆積の暗褐色シルトである。

［床面］中央部は地山ブロックを多く含む黒褐色シルトを貼って床面とし、周辺部は地山ブロックを多く含む黒色シルトの掘り方埋土を床面としている。ほぼ平坦で中央部は堅くしまっている。

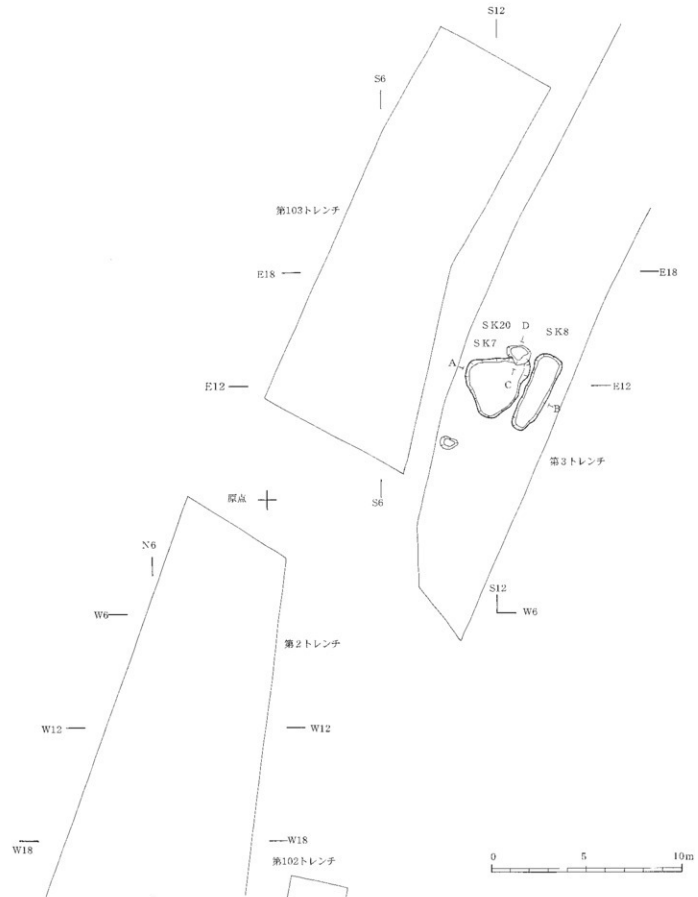
［壁］最も残りの良い部分で高さ約20cm程が残存し、やや斜めに立ち上がっている。

［主柱穴］４個あり、全ての柱穴で柱を抜き取った痕跡が認められた。掘り方は一辺38cm前後の隅丸方形

第2図　調査区位置図


W87
W96
第1トレンチ
W78
N36
N36
SD1
SD2
SD5
N30
W96
N30
SI50
SD3
W87
W78
第101トレンチ
N18
W48
第2トレンチ
W39
N18
W30
SI6
SD10
N9
N9
SD11
SD12
W48
SD13
第102トレンチ
0
5
10m
W39
W30

第３図　遺構配置図（１）


S12
S6
第103トレンチ
E18
E18
SK20
D
SK8
SK7
A
7
C
B
E12
E12
第3トレンチ
原点
S6
N6
S12
W6
W6
第2トレンチ
W12
W12
W18
W18
第102トレンチ
0
5
10m
N6

第４図　遺構配置図（２）

で、深さは36～38cmである。柱痕跡は直径約14cmの円形である。柱間寸法は約2.1m前後である。

［カマド］北辺の中央部に付設され、その後東辺中央部に移設されている。東辺カマド本体は浅黄色粘土を積み上げて構築されている。側壁の長さは水道管埋設の際に壊されており不明である。煙道は幅48cm、深さは約22cmで、堆積土は炭や焼土粒を含む、自然堆積の暗褐色シルトや、天井崩落土である明黄褐色粘質シルトである。また、北辺カマドは煙道のみが残存し、長さ131cm、幅27～50cm、深さ約26cmで、地山や焼土ブロックを含む、黒褐色やにぶい黄褐色シルトで埋め戻されている。

［周溝］全辺で確認された。幅22～37cm、深さ18～24cmで、溝は埋め戻されており、壁側に沿って壁材の痕跡と思われる幅５～７cm、深さ約18～24cmの黒色シルトの堆積土が認められる。

［貯蔵穴］検出されなかった。

［外周溝］住居跡の北側を囲うように巡っており、住居跡との距離約3.5m、幅40～98cm、深さ12～42cmである。黒・黒褐色シルトが堆積している。

［出土遺物］非ロクロ調整の土師器坏・椀・甕、須恵器坏が出土している。床面やカマド焚口付近から出土したものには土師器坏(１・２)、甕(８)があり、１・２には器面全体に焼けハジケがみられ、カマド内で二次加熱を受けた状況が伺われる。また、外周溝からは無底式の土師器甑の小破片が出土している。

土師器坏には扁平な丸底のもの(１～４・10～13)と平底のもの(５)があり、前者は外面に段や沈線が付くものと、付かないものがある。その他に丸底で段を２段有するものも小破片であるが出土している(７)。椀は平底で底部から口縁部にかけて内湾して立ち上がっている(６・15)。甕は長胴形を呈するもので頸部に軽い段を有する(８・９)。器面調整は坏や椀の外面は１～４・６・７・10～12が口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリで、１・２・４・６・12は更にヘラミガキされている。５・15はヘラケズリ後、口縁部を中心にヘラミガキされている。内面はヘラミガキ後、黒色処理されており、13は外面にも黒色処理がなされている。甕の外面は口縁部ヨコナデの後、胴部はヘラケズリされている。内面は胴部ヘラナデの後、口縁部ヨコナデである。

須恵器坏は小破片が数片出土したのみであるが、底部から体部下端にかけて回転ヘラケズリされているものがみられる。

【ＳＩ６住居跡】

［重複］重複は認められない。

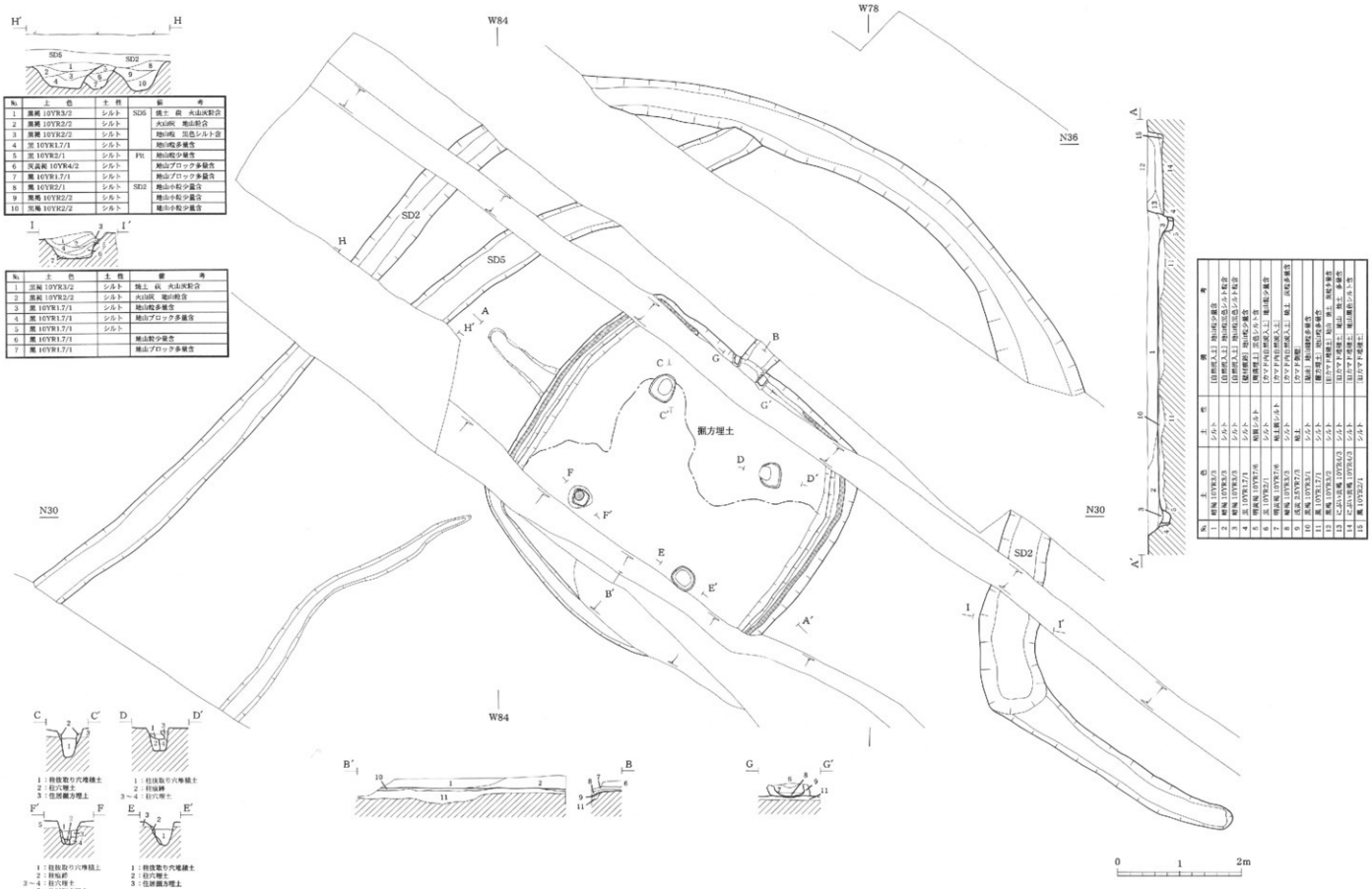
［規模・平面形］一辺約9.6mの隅丸方形を基調とし、南辺中央部で若干の張り出しが認められる。

［堆積土］黒・黒褐色の白然堆積のシルト層等で、第２層には灰白色火山灰の堆積が認められる。

［床面］地山ブロックを多く含む黒褐色シルトの掘り方埋土を床面としている。ほぼ平坦で中央部は堅くしまっている。

［壁］最も残りの良い部分で高さ24cm程が残存し、ほぼ直立する。

［主柱穴］４個あり、全ての柱穴で柱を抜き取った痕跡が認められた。掘り方は長辺約50cm、短辺35～40cmの隅丸長方形で、深さは38～59cmである。柱痕跡は直径12～18cmの円形である。柱間寸法は6.2m前後である。



No.	土色	土性		備考
1	黒褐 10YR3/2	シルト	SD5	焼土 炭 火山灰粒含
2	黒褐 10YR2/2	シルト		火山灰 地山粒含
3	黒褐 10YR2/2	シルト		地山粒 黒色シルト含
4	黒 10YR1.7/1	シルト		地山粒多量含
5	黒 10YR2/1	シルト	Pit	地山粒少量含
6	灰黄褐 10YR4/2	シルト		地山ブロック多量含
7	黒 10YR1.7/1	シルト		地山ブロック多量含
8	黒 10YR2/1	シルト	SD2	地山小粒少量含
9	黒褐 10YR2/2	シルト		地山小粒少量含
10	黒褐 10YR2/2	シルト		地山小粒少量含

No.	土色	土性	備考
1	黒褐 10YR3/2	シルト	焼土 炭 火山灰粒含
2	黒褐 10YR2/2	シルト	火山灰 地山粒含
3	黒 10YR1.7/1	シルト	地山粒多量含
4	黒 10YR1.7/1	シルト	地山ブロック多量含
5	黒 10YR1.7/1	シルト	
6	黒 10YR1.7/1		地山粒少量含
7	黒 10YR1.7/1		地山ブロック多量含

No.	土色	土性	備考
1	暗褐 10YR3/3	シルト	(自然流入土) 地山粒少量含
2	暗褐 10YR3/3	シルト	(自然流入土) 地山粒黒色シルト粒含
3	暗褐 10YR3/3	シルト	(自然流入土) 地山粒黒色シルト粒含
4	黒 10YR1.7/1	シルト	(堀柱横跡) 地山粒少量含
5	暗黒褐 10YR7/6	粘質シルト	(堀柱横跡) 黒色シルト含
6	黒 10YR2/1	シルト	(ケマド内自然流入土) 地山粒少量含
7	明黄褐 10YR7/6	粘土質シルト	(ケマド内自然流入土) 粘土 炭粒多量含
8	暗褐 10YR3/3	シルト	(ケマド内自然流入土) 粘土 炭粒多量含
9	灰黄 2.5YR7/3	粘土	(ケマド粘土) 粘土 炭粒多量含
10	黒褐 10YR3/1	シルト	(粘土) 地山粒多量含
11	黒 10YR1.7/1	シルト	(掘方埋土) 地山粒多量含
12	黒褐 10YR3/2	シルト	(柱ケマド内掘土) 地山 炭土 炭粒多量含
13	灰黄褐 10YR4/3	シルト	(柱ケマド内掘土) 地山 炭土 多量含
14	灰黄褐 10YR4/3	シルト	(柱ケマド内掘土) 地山黒色シルト含
15	黒 10YR2/1	シルト	(柱ケマド内掘土)

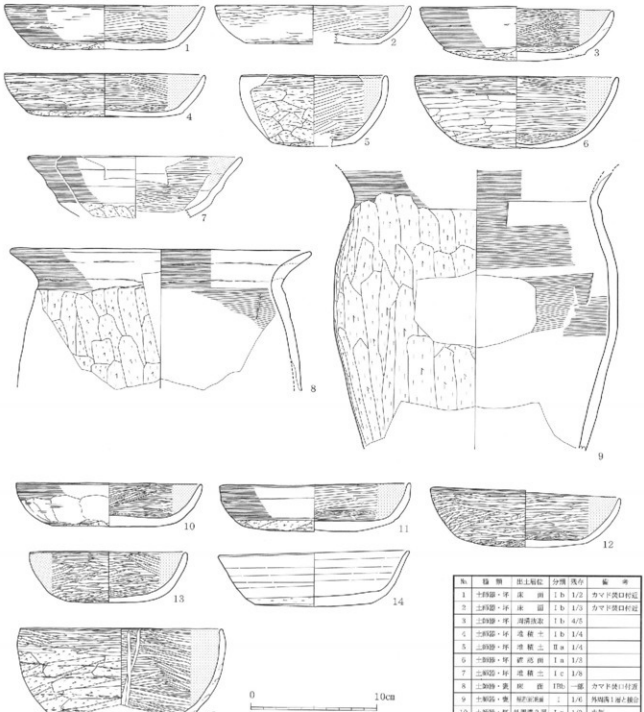
1：柱抜取り穴埋積土
2：柱穴埋土
3：住居掘方埋土

1：柱抜取り穴埋積土
2：柱痕跡
3～4：柱穴埋土

1：柱抜取り穴埋積土
2：柱痕跡
3～4：柱穴埋土
5：住居掘方埋土

1：柱抜取り穴埋積土
2：柱穴埋土
3：住居掘方埋土

第5図 SI50 住居跡



No.	種類	出土層位	分類	残存	編考
1	土師器・坏	床面	Ⅰb	1/2	カマド焼口付近
2	土師器・坏	床面	Ⅰb	1/3	カマド焼口付近
3	土師器・坏	周溝底部	Ⅰb	4/5	
4	土師器・坏	堆積土	Ⅰb	1/4	
5	土師器・坏	堆積土	Ⅱa	1/4	
6	土師器・坏	礫底面	Ⅰa	1/3	
7	土師器・坏	堆積土	Ⅰc	1/8	
8	土師器・甕	床面	ⅡBb	一部	カマド焼口付近
9	土師器・甕	堆積面直線	Ⅰ	1/6	外周溝1層と接合
10	土師器・坏	外周溝2層	Ⅰa	1/3	東側
11	土師器・坏	外周溝2層	Ⅰb	ω完形	東側
12	土師器・坏	外周溝2層	Ⅰa	3/4	東側
13	土師器・坏	外周溝2層	Ⅰa	1/2	西側
14	須恵器・坏	外周溝2層	—	ω完形	北側
15	土師器・鉢	外周溝2層	—	1/6	東側

第6図　ＳＩ50住居跡および外周溝出土遺物

［その他の柱穴］南辺の張り出し部分で１個検出した。掘り方は周溝と接しており、形状は一辺約30cmの隅丸方形で、深さは約10cmと浅い。柱痕跡は直径約12cmの円形である。

［カマド］北辺の中央部に付設され、その後やや東よりに移設されている。新しいカマドの本体はにぶい黄色粘土によって構築され、幅約70cm、側壁は長さ約70cmである。内側には燃焼室の焼面が残存する。煙道は先端部に向かって傾斜しており、長さ178cm、幅37cm前後、深さは先端部で約25cmである。堆積

土は自然堆積の黒色シルトである。また、古いカマドの煙道も先端部に向かって若干傾斜しており、長さ157cm、幅35cm前後、深さ約21cmで、堆積土は地山や焼土ブロックを含む、黒・黄褐色シルト等で埋め戻されている。

[周溝] 全辺で確認された。幅12～26cm、深さ約10～16cmで、溝は埋め戻されており、壁側に沿って壁材の痕跡と思われる幅5～14cm、深さ10～14cmの黒色シルトの堆積土が認められる。

[貯蔵穴] 北西隅に1カ所検出した。長径88cm、短径62cmの楕円形で、深さは約10cmである。

[外周溝(SD10)] 住居跡の北側を囲うように巡っており、住居跡との距離約4.5m、幅50～74cm、深さ10～22cmである。暗褐色粘質シルトや黒褐色シルト等が堆積している。

[出土遺物] 非ロクロ調整の土師器坏・椀・高坏・甕、須恵器坏・坏蓋・椀・甕、砥石が出土しており、特に床面からは住居廃絶直前の遺物がそのまま残されたような状態で多数出土している。

土師器坏は平底で外面に軽い段が付くもの(18)と付かないもの(1～10)、丸底で外面に段や稜、沈線が付くもの(12・13・16・20～23)と付かないもの(17・19)があり、いずれも体部から口縁部にかけて内湾して立ち上がっている。椀は平底で体部から口縁部にかけて内湾して立ち上がっている。高坏は低い脚部のみが残存しており、全体の器形は不明である。甕は鉢形を呈するもの(26～30)、長胴形を呈するもの(31～35)、球胴形を呈するもの(36～38)とがある。器面調整は、坏や椀の外面は口縁部ヨコナデ、体・底部ヘラケズリのものが多く、その後、更にヘラミガキされるものがある(2・3・5～7・9・10・12・13・15・17・23)。2・5・7～10・15・17についてはヘラミガキ調整や磨滅により、口縁部のヨコナデの有無は不明である。内面はすべてヘラミガキ後、黒色処理されている。高坏は脚部外面がヘラミガキ、内面はヘラケズリ後、ヘラミガキされており、坏部内面はヘラミガキ後、黒色処理されている。甕は口縁部ヨコナデ、胴部は外面ヘラケズリ、内面はヘラナデである。

須恵器蓋は端部が下方に短く折れ曲がるものであり、天井部はやや高く丸みをもっている。つまみはリング状である。

【SI14住居跡】

[重複] 重複は認められなかった。

[規模・平面形] 一辺7.0mの隅丸方形である。南西側は調査区外に延びる。

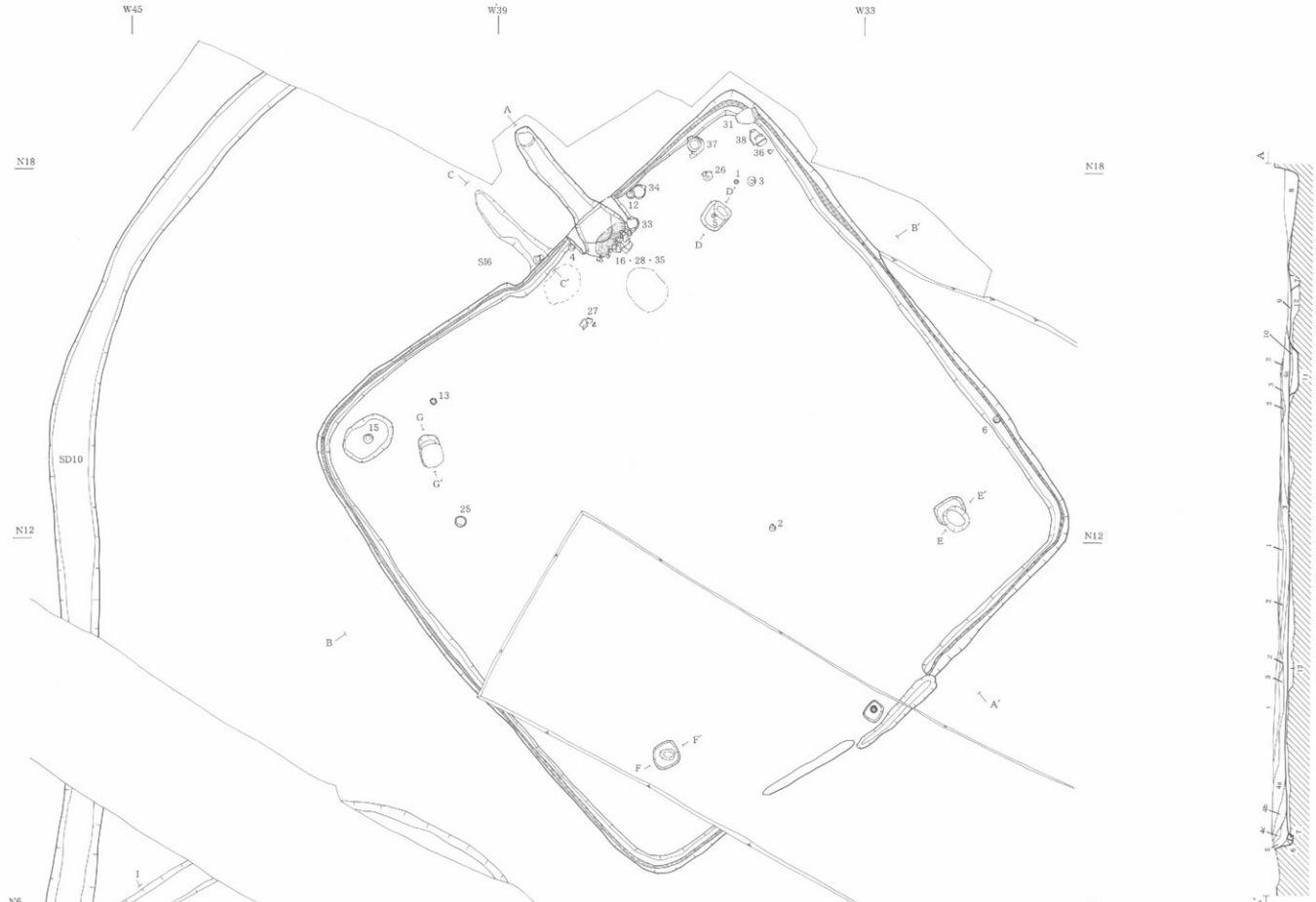
[堆積土] 黒・黒褐色やにぶい黄褐色の自然堆積のシルト層等で、第2層には灰白色火山灰の堆積が認められる。

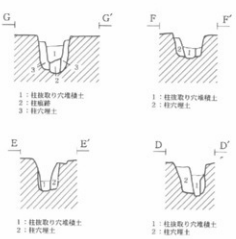
[床面] 暗褐色シルトを含む明褐色粘土の掘り方埋土を床面としている。ほぼ平坦で堅くしまっている。

[壁] 最も残りの良い部分で高さ20cm程が残存し、ほぼ直立する。

[主柱穴] 2ヶ所検出し、どちらにも柱を抜き取った痕跡が認められた。掘り方は一辺40cm前後の不整形で、深さは50cm前後である。柱痕跡は直径約10cmの円形である。柱間寸法は約4.1mである。

[カマド] 北辺のほぼ中央部に付設されている。カマド本体は地山を高さ15cm程削りだして基部とし、その上に白色粘土を積み上げて構築されている。幅は約40cm、側壁は長さ約65cmである。内側には焼窯の焼面が残存する。煙道は長さ145cm、幅32～45cm、深さ約20cmで、先端部は更に5cm程深くなっている。堆積土は炭や焼土ブロックを多く含む、自然堆積の暗オリーブ褐色シルト等である。

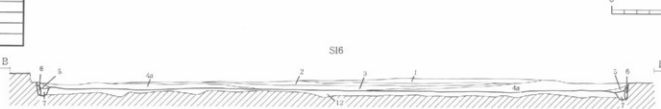




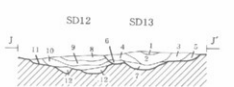
SD10	№	土　色	土　性	備　　考
	1	にぶい黄褐 10YR5/3	シルト	地山粒含
	2	黒褐 10YR3/2	シルト	

SD10	№	土　色	土　性	備　　考
	1	にぶい黄褐 10YR5/3	シルト	焼土粒　炭含
	2	灰黄褐 10YR4/2	シルト	地山ブロック
	3	にぶい黄褐 10YR5/3	シルト（粗質）	地山粒少含
	4	黒褐 10YR2/2	シルト	
	5	黒褐 10YR3/2	シルト	
	6	暗褐 10YR3/3	粘質シルト	地山粒　炭粒含

旧畑道	№	土　色	土　性	備　　考
	1	黄褐 2.5Y5/3	シルト	【旧畑道堆積土】
	2	黒 2.5Y2/1	シルト	【旧畑道堆積土】焼土、地山粒少量含
	3	明黄褐 2.5Y7/6	砂土	【旧畑道堆積土】焼土　黒色シルト含

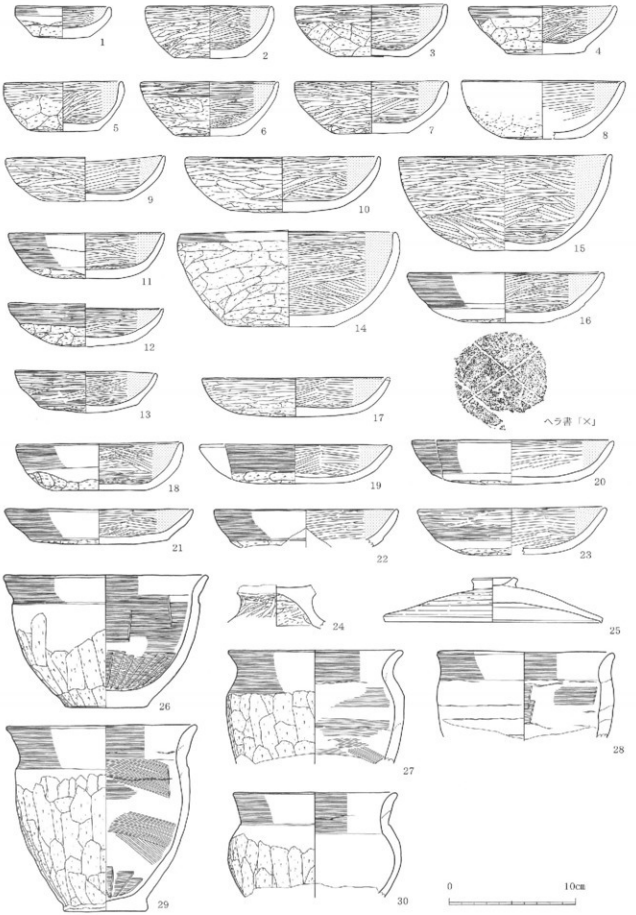


SI6	№	土　色	土　性	備　　考
	1	黒 2.5Y2/1	シルト	【自然流入土】
	2	灰黄 2.5Y7/2		【自然流入土】 灰白色火山灰
	3	黒褐 2.5Y3/1	シルト	【自然流入土】 4a層のシルトブロック少量含
	4a	黒褐 2.5Y3/2	シルト	【自然流入土】 地山粒少量含
	4b	黒褐 2.5Y3/2	シルト	【自然流入土】
	4c	黒褐 2.5Y3/2	シルト	【自然流入土】 地山粒ブロック混含
	5	黒褐 2.5Y3/2	シルト	【自然流入土】 地山粒少量含
	6	黒 2.5Y2/1	シルト	【壁材倒れ】 地山粒少量含
	7	黒 2.5Y2/1	シルト	【掲載埋土】 地山粒多含
	8	黒 2.5Y2/1	シルト	【カマド・煙道内堆積土】
	9	明灰黄 2.5Y7/2	シルト	【カマド・煙道内堆積土】 焼土　炭多含
	10	浅黄 2.5Y7/4	粘土	【旧貯蔵穴埋土】 黒褐シルトブロック少量含
	11	黒褐10YR2/2	シルト	【旧貯蔵穴埋土】 暗土ブロック　炭ブロック含
	12	黒褐 2.5Y3/1	シルト	【置り方埋土】 地山ブロック多量含

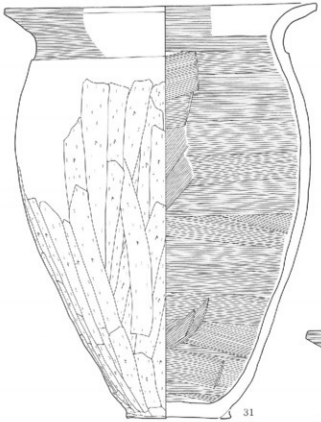


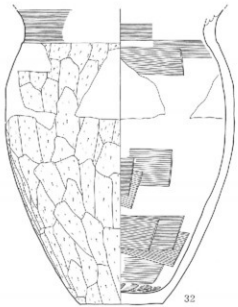
SD12 13	№	土　色	土　性	備　　考
	1	黒褐 2.5YR3/2	シルト	
	2	赤褐 10YR3/3	シルト	地山粒少量含
	3	灰黄褐 10YR4/2	砂質シルト	地山ブロック　木炭含
	4	灰黄褐 10YR4/2	砂質シルト	地山ブロック少量
	5	黒褐 10YR3/2	シルト	
	6	にぶい黄褐 10YR5/3	シルト質粘土	地山ブロック含
	7	にぶい黄褐 10YR4/3	シルト質粘土	地山ブロック多含
	8	黒褐 10YR3/2	シルト	地山粒多含
	9	にぶい黄褐 10YR5/3	シルト質粘土	地山ブロック多量含
	10	黒褐 10YR3/1	シルト質粘土	
	11	黒褐 10YR3/2	シルト	
	12	にぶい黄褐 10YR4/3	シルト質粘土	地山ブロック多含

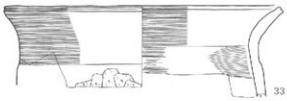
第7図　SI6　住居跡

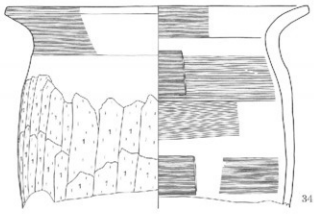


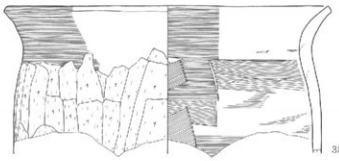
第8図　ＳＩ６住居跡出土遺物（１）











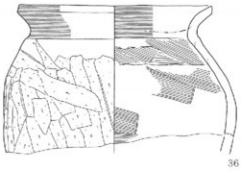
0 10cm

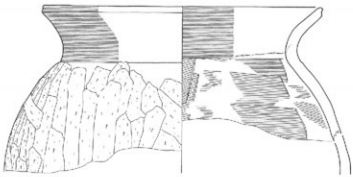
No.	種類	出土層位	分類	残存
1	土師器・杯	床面	Ⅱa	完形
2	土師器・杯	床面	Ⅱa	4/5
3	土師器・杯	床面	Ⅱa	完形
4	土師器・杯	床面	Ⅱa	4/5
5	土師器・杯	床面	Ⅱa	4/5
6	土師器・杯	床面	Ⅱa	完形
7	土師器・杯	東床	Ⅱa	2/3
8	土師器・杯	東壁	Ⅱa	¼完形
9	土師器・杯	東壁	Ⅱa	¼完形
10	土師器・杯	東床	Ⅱa	4/5
11	土師器・杯	床面	Ⅰb	¼完形
12	土師器・杯	東床	肩	Ⅰb ¼完形
13	土師器・杯	東壁	Ⅰb	完形
14	土師器・椀	床面	—	¼完形

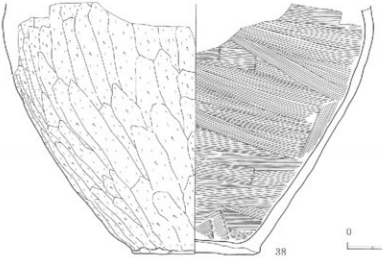
No.	種類	出土層位	分類	残存
15	土師器・椀	床面	—	¼完形
16	土師器・甕	竈マド底面	Ⅰb	1/2
17	土師器・甕	堆積土3層	Ⅰa	¼完形
18	土師器・甕	堆積土3層	Ⅰb	4/5
19	土師器・甕	竈 覆土	Ⅰa	1/4
20	土師器・甕	堆積土3層	Ⅰb	1/4
21	土師器・甕	堆積土3層	Ⅰb	1/4
22	土師器・甕	堆積土3層	Ⅰb	1/4
23	土師器・甕	堆積土3層	Ⅰb	1/2
24	土師器・高杯	堆積土3層	—	一部
25	須恵器・壺	床面	—	¼完形
26	土師器・甕	床面	底	3/4

No.	種類	出土層位	分類	残存
27	土師器・甕	床面	底	1/4
28	土師器・甕	カマド底面	底	一部
29	土師器・甕	堆積土3層	底	3/5
30	土師器・甕	堆積土3層	底	一部
31	土師器・甕	床面	底	1/4 ¼完形
32	土師器・甕	床面	底	1/4 2/5

第9図　S16住居跡出土遺物（2）







No.	種　類	出土層位	分類	残存	備　考
33	土師器・甕	カマド燃焼	I Ba	一部	土師器特殊
34	土師器・甕	床　面	I Ba	1/2	器台ヲ二転用
35	土師器・甕	カマド底面	I Ba	一部	
36	土師器・甕	床　面	II A	1/2	器台ヲ二転用
37	土師器・甕	床　面	II A	1/3	器台ヲ二転用
38	土師器・甕	床　面	II	2/5	

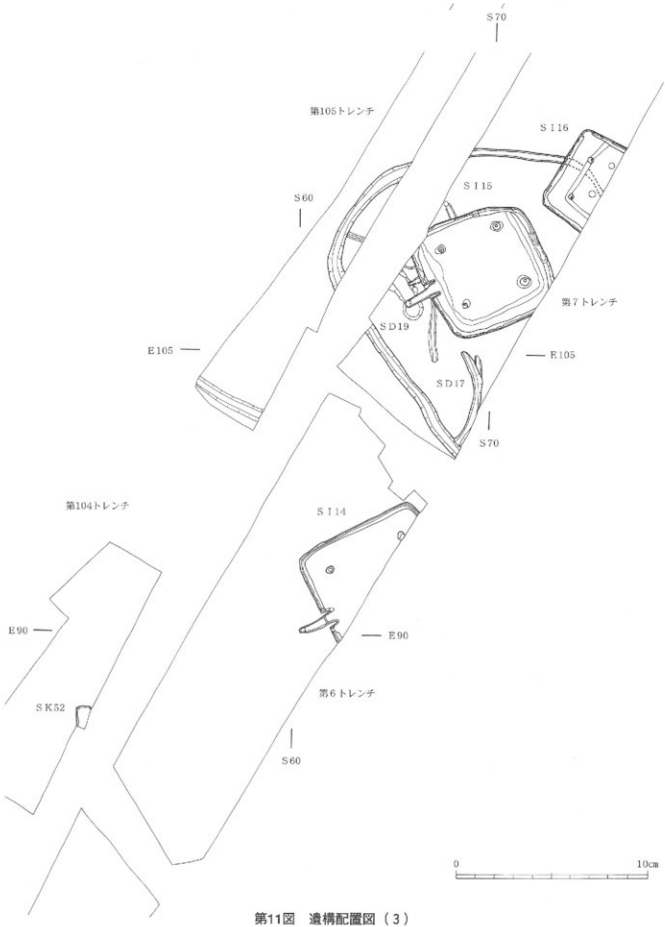
第10図　ＳＩ６住居跡出土遺物（３）

［周溝］調査範囲内の全辺で確認された。幅15～29cm、深さ約12cmで、溝は埋め戻されており、壁側に沿って壁材の痕跡と思われる幅約７cm、深さ約12cmの暗褐色シルトの堆積土が認められる。カマド下についても地山削り出しの側壁基部の外側から溝の掘り込みがなされ、同様に埋め戻されている。

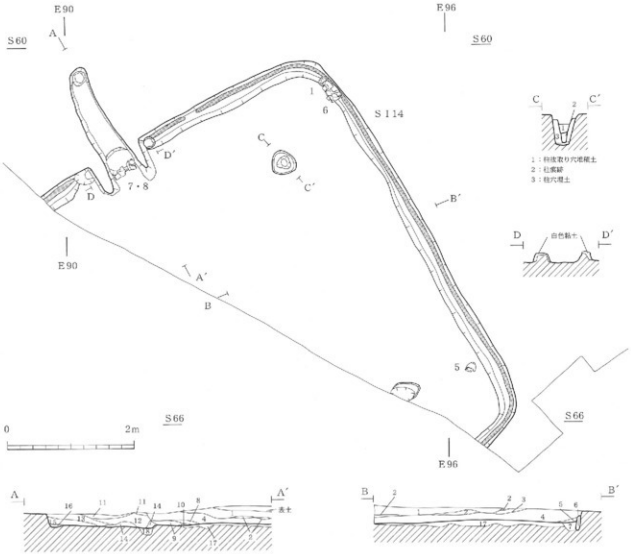
［貯蔵穴］検出されなかった。

［出土遺物］非ロクロ調整の土師器坏・椀・甕が出土している。図示したものは床面やその直上、またカマド燃焼部底面から出土したもので、甕の底部にはすべて木葉痕が認められる。

土師器坏は丸底、椀は平底で底部から口縁部にかけて内湾して立ち上がっている(１～４)。甕は鉢形を呈するもの(５)と、長胴形を呈するもの(６・７)がある。後者には大小あり、どちらも胴部と口縁部との境に明瞭な段や稜は持たない。胴部の張りは大形のものは弱く円筒形に近い形のもの(６)で、小形のものは胴部中央にやや張りを有するものである(７)。器面調整は、坏・椀の外面はヘラケズリで、１・４の口縁部にはヨコナデの痕跡も認められる。また、１～３は口縁部を中心に更にヘラミガキされている。内面はすべてヘラミガキ後、黒色処理されている。甕は口縁部ヨコナデ、胴部は外面ヘラケズリ、内面はヘラナデである。また、底部にはすべて木葉痕が認められる。


S70
第105トレンチ
S I16
S I15
S60
第7トレンチ
SD19
E105
E105
SD17
S70
第104トレンチ
S I14
E90
E90
第6トレンチ
SK52
S60
0
10cm

第11図　遺構配置図（3）



No.	土色	土性	備考	No.	土色	土性	備考
1	黒 2.5Y2/1	シルト	【自然流入土】	10	黒褐 2.5Y3/2	シルト	【カマド内埋積土】 炭多含
2	灰黄 2.5Y7/2		【自然流入土】 灰白色火山灰	11	暗オリーブ褐 2.5Y3/3	シルト	【硬面内埋積土】
3	黒褐 2.5Y3/1	シルト	【自然流入土】 地山粒少量含	12	浅黄橙 10YR8/4	シルト	【硬面内埋積土】 浅黄橙色シルト 暗オリーブ褐色シルト含
4	にぶい黄褐 10YR4/3	シルト	【自然流入土】 焼土 炭粒少量含	13	暗オリーブ褐 2.5Y3/3	シルト	【硬面内埋積土】 焼山粒 炭少量含
5	にぶい黄褐 10YR4/3	シルト	【自然流入土】 地山粒少量含	14	暗オリーブ褐 2.5Y3/3	シルト	【硬面内埋積土】 焼土 焼山ブロック多含
6	暗褐 10YR3/3	シルト	【壁材崩落】 地山粒含	15	暗オリーブ褐 2.5Y3/3	シルト	【硬面内埋積土】 炭多含
7	黒褐 10YR2/2	シルト	【周溝埋土】 地山ブロック多含	16	浅黄橙 10YR8/4	シルト	【硬面内埋積土】
8	浅黄橙 10YR8/4	シルト	【カマド内埋積土】 下面赤変一天井崩落土	17	明褐 7.5YR5/8	粘土	【貼り方埋土】 暗褐シルト含
9	にぶい黄褐 10YR4/3	シルト	【カマド内埋積土】 焼土 炭多含一赤鉄質内流入土	18	黒褐 10YR2/2	シルト	【周溝埋土】 地山粒多含

第12図　ＳＩ14住居跡

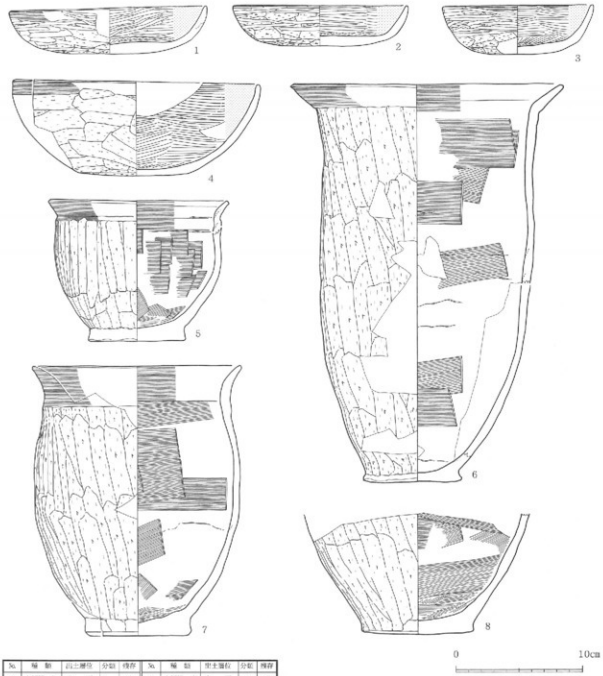
【ＳＩ15住居跡】

［重複］外周溝がＳＩ16と重複し、これよりも古い。また、本住居跡は一度建て替えられており、東辺を除く３辺の壁が60～80cm程拡張されている。以下、改築前のものをＳＩ15ａ、改築後のものをＳＩ15ｂとする。

〈ＳＩ15ａ〉

［規模・平面形］南北約5.1m、東西約5.7mの隅丸方形である。

［床面］地山ブロックを多く含む黒色シルトの掘り方埋土を床面としている。ほぼ平坦で中央部は堅くしまっている。



No.	種　類	高土層位	分類	残存	No.	種　類	室土層位	分類	残存
1	土師器・坏	床　面	1 a	4/5	5	土師器・壁	床　面	目	4/5
2	土師器・坏	床面直上	1 a	4/5	6	土師器・壁	床　面	1 Bb	4/5
3	土師器・坏	床面直上	1 a	～完形	7	土師器・壁	カマド底面	1 Bb	2/5
4	土師器・壁	床面直上	—	3/4	8	土師器・壁	カマド底面	1	～縁

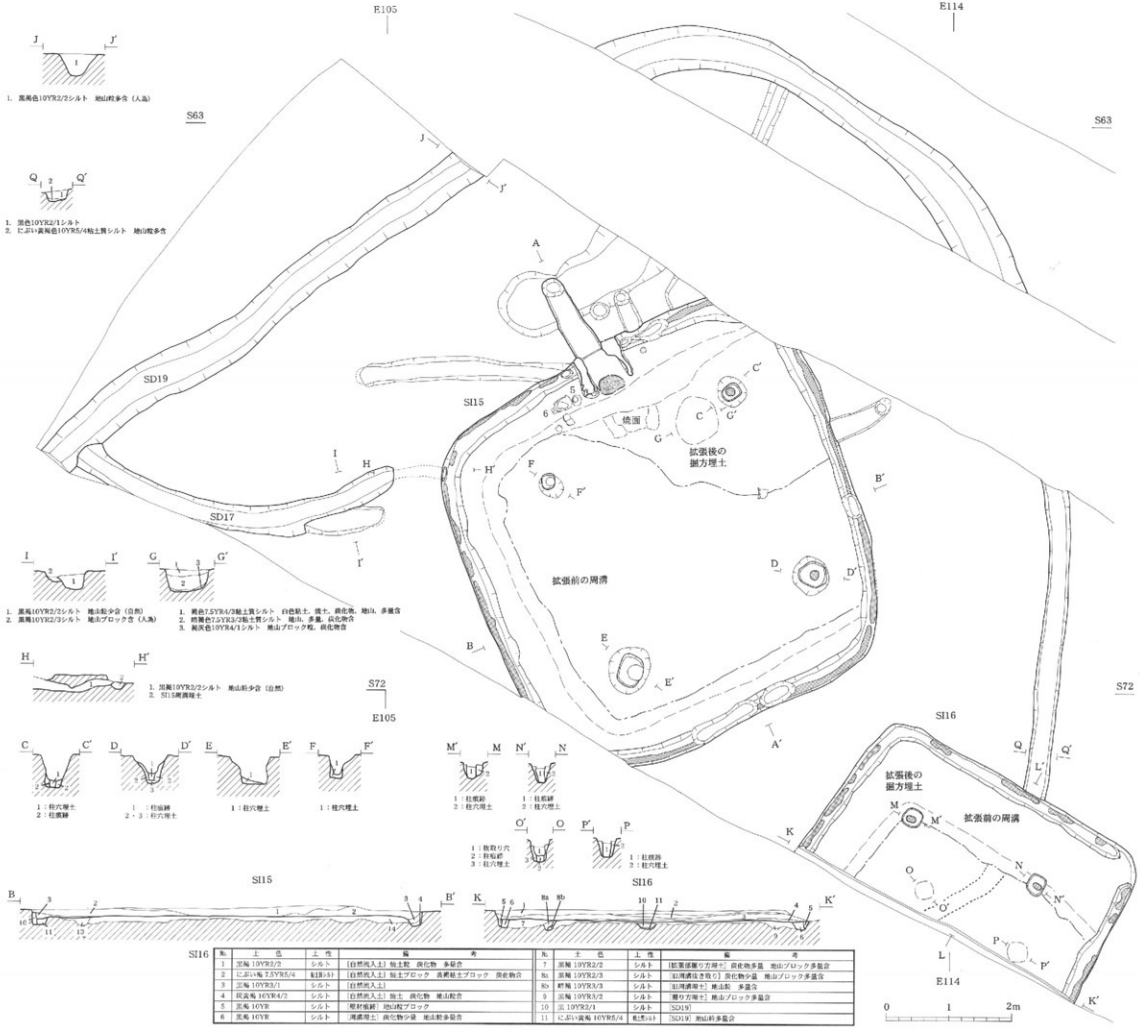
第13図　ＳＩ14住居跡出土遺物

［壁］東辺で高さ10cm程が残存し、ほぼ直立する。

［主柱穴］ＳＩ15ｂの柱穴に壊されており、残存していない。

［カマド］焼け面のみが残存する北辺の中央部と、煙道が残存する北辺やや東よりの２ヶ所が検出された。両者の新旧関係は不明であり、カマド本体は残存していない。煙道は長さ約135cm、幅約30cm、深さは８～18cmで、先端に向かって次第に浅くなっており、先端部は直径25cm程の円形のピット状を呈し、煙道底面よりも12cm程深くなっている。地山ブロックを含む暗褐色シルトで埋め戻されている。

［周溝］全辺で確認された。幅23～30cm、深さは15cm程で、溝は埋め戻されており、東辺では壁側に沿



No.	土色	土性	備考
1	黒褐 10YR2/2	シルト	[自然流入土] 粘土粒 炭化物 多量含
2	にぶい褐 7.5YR5/4	粘土質シルト	[自然流入土] 粘土ブロック 黄褐粘土ブロック 炭化物含
3	黒褐 10YR3/1	シルト	[自然流入土]
4	灰黄褐 10YR4/2	シルト	[自然流入土] 粘土 炭化物 地山粒含
5	黒褐 10YR	シルト	[壁材痕跡] 地山粒ブロック
6	黒褐 10YR	シルト	[周溝埋土] 炭化物少量 地山粒多量含
7	黒褐 10YR2/2	シルト	[自然流入土] 粘土粒少量含
8	黒褐 10YR2/2	シルト	[周溝内埋土] 粘土 地山粒少量含
9	黒 10YR2/1	シルト	[カマド内埋土]
10	黒 10YR2/1	シルト	[壁材痕跡] 地山粒多量含
11	黒 2.5Y2/1	シルト	[周溝埋土] 地山ブロック多量含
12	黒褐 10YR5/8	粘土	[壁材] 地山粒多量 黒シルト含
13	黒褐 2.5Y3/1	シルト	[壁材] 地山ブロック粒多量含
14	黒 2.5Y2/1	シルト	[壁材] 地山ブロック多量含

No.	土色	土性	備考
1	黒褐 10YR2/2	シルト	[自然流入土] 粘土粒少量含
2	黒褐 10YR2/2	シルト	[自然流入土] 地山ブロック 白色粘土含
3	黒褐 10YR2/2	シルト	[自然流入土] 地山ブロック多量含
4	黒褐 10YR2/2	シルト	[自然流入土] 地山粒少量含
5	黒褐 10YR2/2	シルト	[自然流入土] 地山粒少量含
6	黒褐 10YR2/2	シルト	[自然流入土] 地山ブロック多量含
7	黒褐 10YR2/2	シルト	[地道内埋土] 焼土 地山粒多量含

第14図　SI15・16　住居跡

って壁材の痕跡と思われる幅6～8cm、深さ15cm前後の黒色シルトの堆積土が認められる。その他の部分は拡張の際、抜き取られたと考えられ、同様の痕跡は認められなかった。

[貯蔵穴] 焼け面東脇に1ヶ所検出した。直径約70cm前後、深さ約35cmのやや不整円形である。地山や焼土ブロックを多く含む暗褐色シルトで人為的に埋め戻されている。

[出土遺物] 出土していない。

〈SI15b〉

[規模・平面形] 一辺約6.4mの隅丸方形である。

[堆積土] 黒褐色の自然堆積のシルト層である。

[床面] 中央部はSI15aと同一の床面を使用しており、拡張部分は地山ブロックを多く含む黒褐色シルトの掘り方埋土や地山を床面としている。

[壁] 最も残りの良い部分で高さ12cm程が残存し、ほぼ直立する。

[主柱穴] 4個あり、全ての柱穴で柱を抜き取った痕跡が認められた。掘り方は一辺約25～50cmの隅丸方形で、深さは38～52cmである。柱痕跡は直径約15cmの円形である。柱間寸法は約3.2mである。

[カマド] 東辺のやや北よりに付設され、その後、北辺のほぼ中央部に移設されている。北辺カマド本体は幅約45cm、側壁は長さ約70cmで内側には燃焼室の焼面が残存する。煙道は長さ約138cm、幅約40cm、深さ18cm程で、先端部は更に8cm程深くなっている。堆積土は焼土や地山粒を含む、自然堆積の黒褐色シルトである。

[周溝] 全辺で確認された。幅23～34cm、深さは15cm程で、溝は埋め戻されており、壁側に沿って壁材の痕跡と思われる幅6～8cm、深さ15cm前後の黒色シルトの堆積土が認められる。

[貯蔵穴] 検出されなかった。

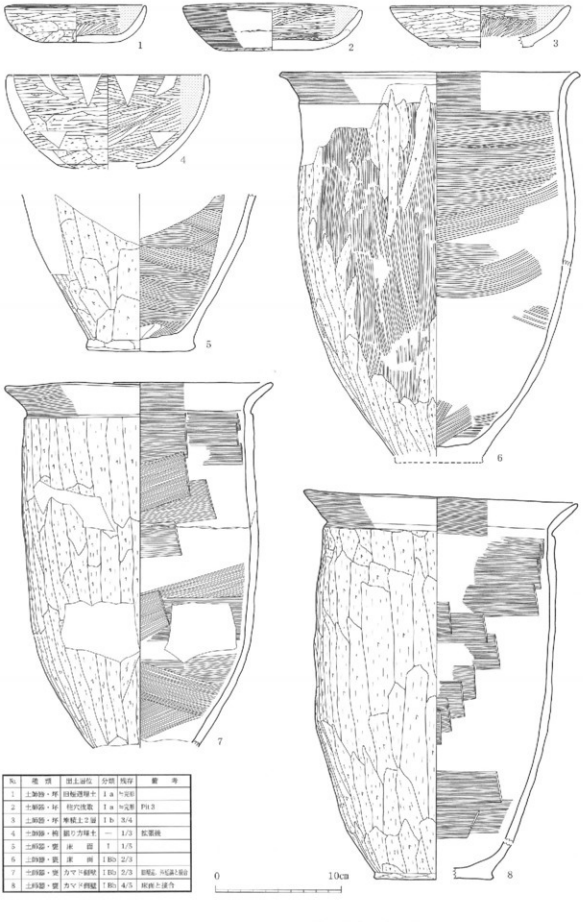
[外延溝] 北西隅から住居外へ延びる溝跡で、外周溝に接続している。幅38～54cm、深さ約30cmで断面「U」字状を呈する。底面は住居外へ緩やかに傾斜しており、住居跡との接続部分では天井が残存している。

[外周溝(SD19)] 住居跡の北側を囲うように巡っており、住居跡との距離は3m前後で、幅34～68cm、深さは最も深い部分で約56cmである。地山粒を多く含む黒褐色シルトが堆積している。

[出土遺物] 非ロクロ調整の土師器坏・椀・甕・短頸壺、須恵器甕が出土している。

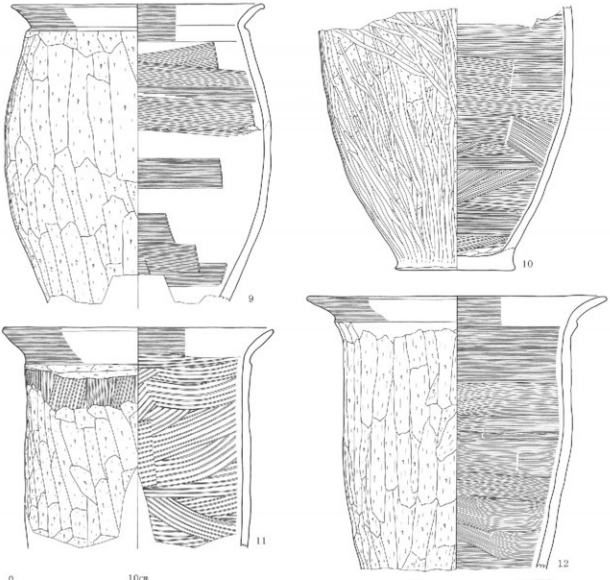
床面やカマド側壁からは土師器甕が出土しており(5～10)、旧煙道埋土や主柱穴抜き取り穴からもほぼ完形に近い状態で土師器坏が出土している(1・2)。カマド側壁に使用された甕には胴部外面に煤が付着しており、住居拡張前に使用されていたものが拡張の際に転用されたものと考えられる。

土師器坏は底部が平底に近い扁平な丸底で、底部から口縁部にかけて内湾して立ち上がっており、体部外面に段が付くもの(3・13)と付かないもの(1・2・16～18)がある。椀は平底で体部から口縁部にかけて内湾して立ち上がっている(4)。甕は長胴形を呈しており、9を除き、胴部の張りが弱く円筒形に近い形のものである。9は胴部上半に張りを有する。また、6・14以外には頸部に明瞭な段が付く。短頸壺は肩部に張りを有し、底部には低い高台がつくが、底部が高台下端より下方にやや張り出している。器面調整は、坏や椀の外面は1・4がヘラケズリ後、口縁部を中心にヘラミガキ、2・3・13・16～18



No.	種類	出土遺物	分類	残存	備考
1	土師器・坏	回転透明土	1 a	½完形	
2	土師器・坏	柱穴流散	1 a	½完形	Pit 3
3	土師器・坏	乗積土２層	1 b	3/4	
4	土師器・椀	張り方隆土	—	1/3	拡張後
5	土師器・甕	床　面	1	1/5	
6	土師器・甕	床　面	1 Bb	2/3	
7	土師器・甕	カマド側壁	1 Bb	2/3	胴尾に外伝上部分
8	土師器・甕	カマド側壁	1 Bb	4/5	床面と接合

第15図　ＳＩ15住居跡出土遺物（１）



No.	器種	出土層位	分類	残存	備考
9	土師器・甕	カマド掘形	1C	1/2	底部と接合
10	土師器・甕	カマド掘形	1B	3/5	
11	土師器・甕	埋積土2層	1Bb	1/6	
12	土師器・甕	埋積土2層	1Bb	1/2	

第16図　ＳＩ15住居跡出土遺物（2）

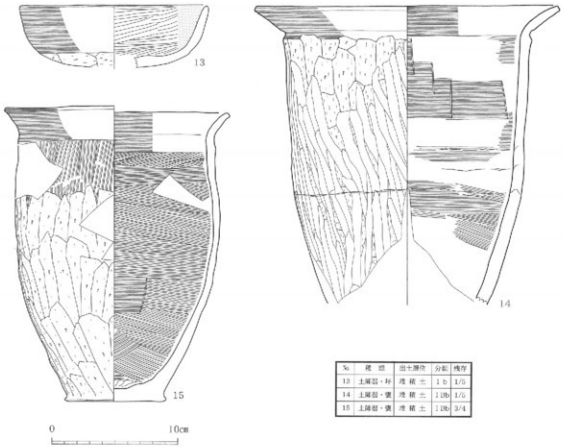
はヨコナデ後、ヘラケズリで、3・18は更にヘラミガキされている。内面はすべてヘラミガキ後、黒色処理されている。甕は口縁部ヨコナデで、胴部は外面がヘラケズリされており、6・11・15にはハケメ、10・14にはヘラミガキの痕跡も認められる。内面は5・6・10・11がハケメ、7～9・12・14・15・20～23がヘラナデである。また、底面には木葉痕が認められる。

須恵器甕は確認面から小破片が数片出土したのみである。

【ＳＩ16住居跡】

［重複］ＳＩ15の外周溝と重複し、これより新しい。また、本住居跡は北辺・西辺を拡張するかたちで一度建て替えられており、改修前をＳＩ16ａ、改修後をＳＩ16ｂとする。

〈ＳＩ16ａ〉



No.	種	出土層位	分類	残存
13	土師器・坏	堆 積 土	1 b	1/5
14	土師器・甕	堆 積 土	1 Bb	1/5
15	土師器・甕	堆 積 土	1 Bb	3/4

第17図　ＳＩ15住居跡外延構出土遺物

［規模・平面形］一辺4.1mの隅丸方形と考えられるが、南半部分は調査区外である。

［床面］地山ブロックを多く含む黒褐色シルトの掘り方埋土を床面としている。ほぼ平坦で中央部は堅くしまっている。

［壁］残存していない。

［主柱穴］２個検出した。掘り方は直経約30cmの隅丸方形で、深さは約35cmである。柱痕跡は長辺15cm、短辺10cmの隅丸方形である。柱間寸法は約1.8mである。

［カマド・貯蔵穴］検出されなかった。

［周溝］調査範囲内の全辺で確認された。幅20cm前後、深さ６～11cmで、溝は埋め戻されている。

［出土遺物］出土していない。

〈ＳＩ16ｂ〉

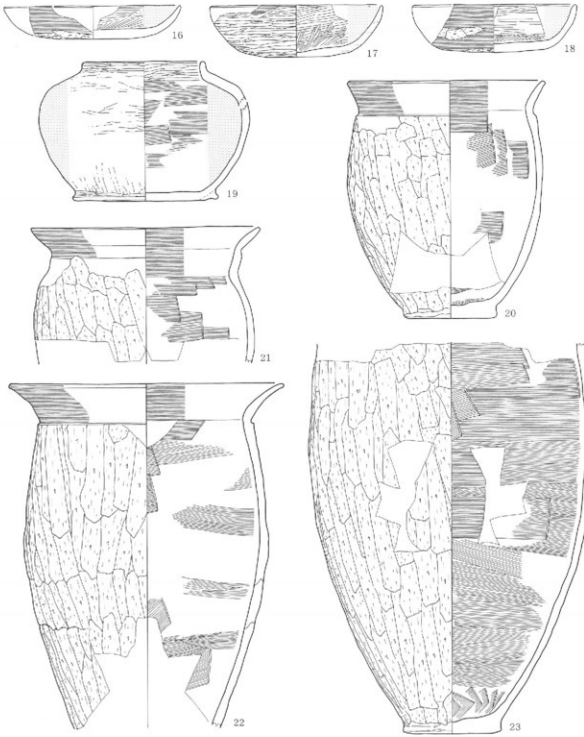
［規模・平面形］一辺4.9mの隅丸方形と考えられるが、南半部分は調査区外である。

［堆積土］黒褐色シルトの自然堆積層の上に、人為的埋土と考えられる地山や焼土ブロックや炭化材等を多く含む黒褐色シルトが認められる。

［床面］拡張部以外はＩ16ａと同一の床面を使用しており、拡張部分は大きめの地山ブロックを多く含む黒褐色シルトを埋め戻して床面としている。ほぼ平坦で中央部は堅くしまっている。

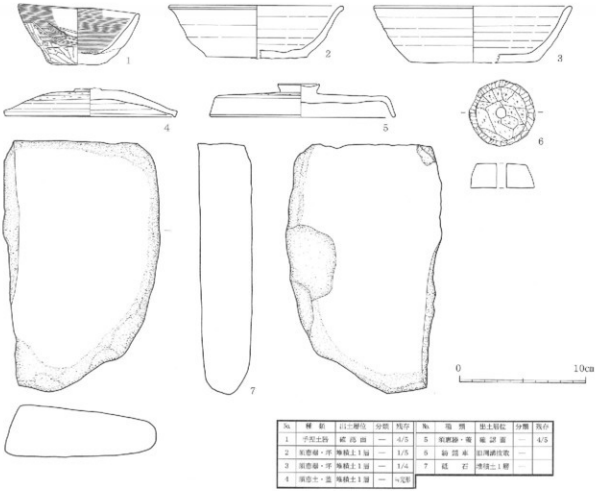
［壁］最も残りの良い部分で高さ15cm程が残存し、ほぼ直立する。

［主柱穴］２個検出した。掘り方は一辺約30cmの隅丸方形で、深さは約30cmである。柱痕跡は長径15cm、



No.	種　類	出土層位	分類	残存	No.	種　類	出土層位	分類	残存
16	土師器・坏	堆積土	I a	1/2	20	土師器・甕	堆積土	I Bb	1/2
17	土師器・坏	堆積土	I a	1/2	21	土師器・甕	堆積土	I Bb	1/2
18	土師器・坏	堆積土	I a	1/2	22	土師器・甕	堆積土	I Bb	2/3
19	土師器・壺	堆積土	—	3/5	23	土師器・甕	堆積土	I B	1/2

第18図　ＳＩ15住居跡外周溝出土遺物



No.	種 別	出土層位	分類	残存	No.	地 類	出土層位	分類	残存
1	手捏土器	底 部 面	—	4/5	5	須恵器・壺	竜 認 面	—	4/5
2	須恵器・坏	堆積土1層	—	1/5	6	紡 錘 車	旧周溝流散	—	
3	須恵器・坏	堆積土1層	—	1/4	7	砥 石	堆積土1層	—	
4	須恵土・蓋	堆積土1層	—	~1/2形					

第19図　ＳＩ16住居跡出土遺物

短径10cmの楕円形である。柱間寸法は約2.3mである。

［カマド・貯蔵穴］検出されなかった。

［周溝］北東隅で一度途切れるものの、調査範囲内の全辺で確認された。幅16～30cm、深さ15cm前後で、溝は埋め戻されており、部分的にではあるが、壁側に沿って壁材の痕跡と思われる幅５～12cm、深さ12～15cmの黒褐色の堆積土が認められる。

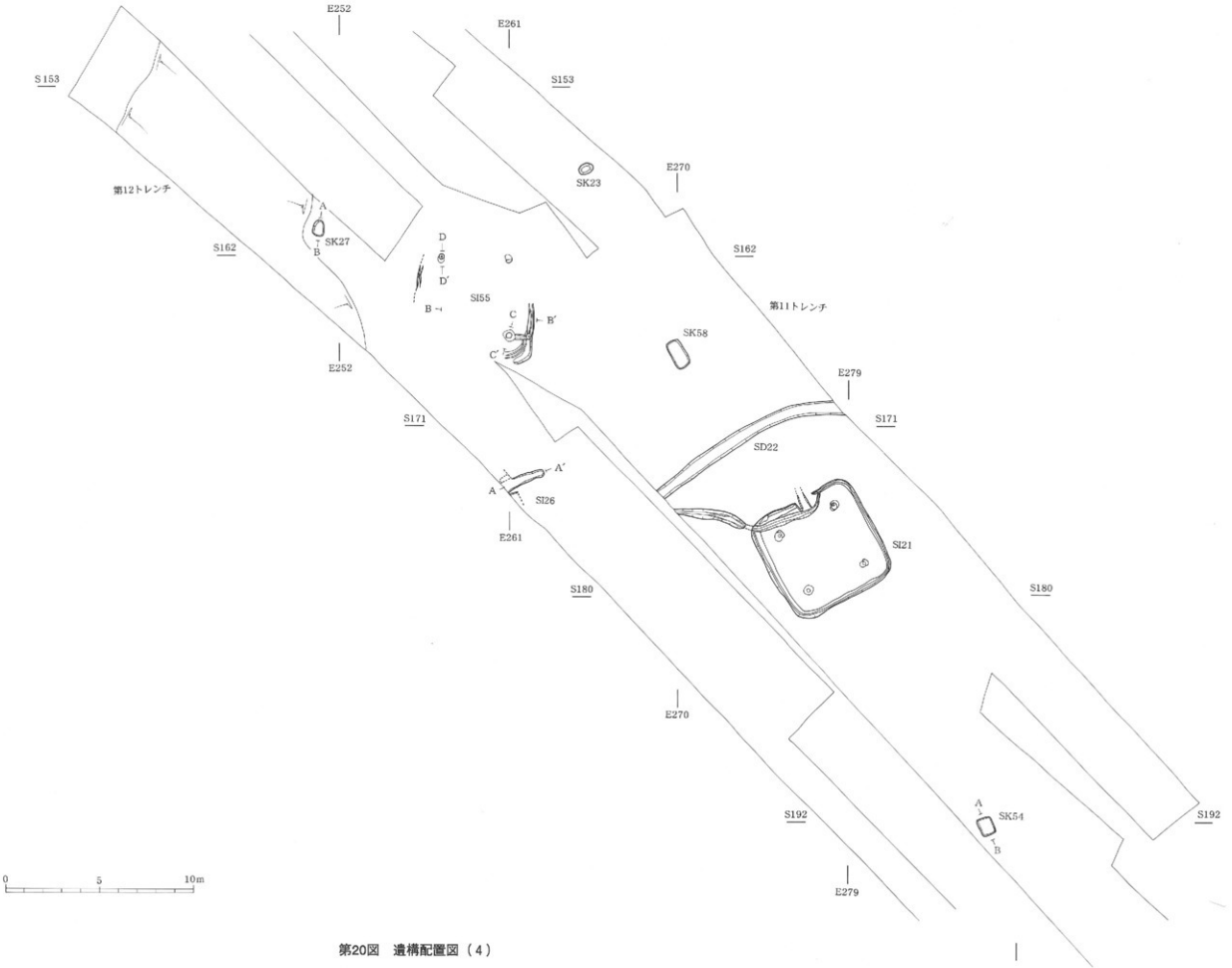
［出土遺物］非ロクロ調整の土師器坏・甕、手捏土器、須恵器坏・蓋・甕、紡錘車、砥石が出土している。

土師器は殆ど小破片のため図示できたものは１の手捏土器のみである。器面調整は外面がヨコナデ後、ヘラミガキ、内面はヘラナデである。

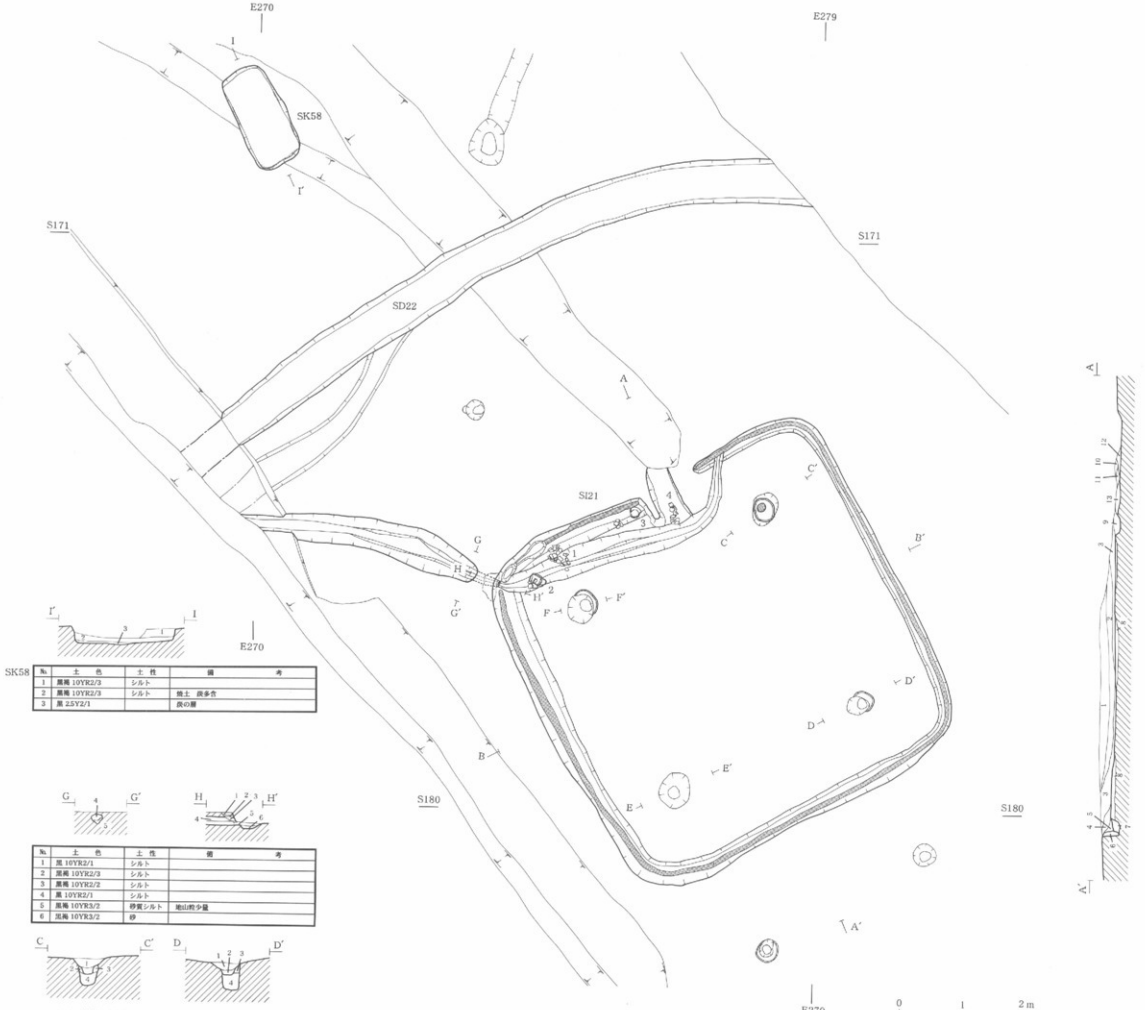
須恵器坏は２・３ともに底部ヘラ切り無調整のものである。４の坏蓋は端部が下方に短く折れ曲がるものであり、天井部はやや高く丸みをもっている。つまみは欠損している。５の壷蓋は平らな天井部から口縁部が下方に折れ曲がっている。つまみは扁平な宝珠形である。

【ＳＩ55住居跡】

南西部分は調査区外であり、その他についても攪乱や削平により、主柱穴と南東隅や西辺の周溝等の一部が残存するのみである。


E252
E261
S153
S153
SK23
E270
第12トレンチ
A
SK27
B
S162
S162
D
D'
SI55
B
B'
C
C'
第11トレンチ
SK58
E252
E279
S171
S171
SD22
A'
A
SI26
SI21
E261
S180
S180
E270
S192
S192
A
SK54
B
E279
0
5
10m

第20図　遺構配置図（4）



SK58

No.	土色	土性	備考
1	黒褐 10YR2/3	シルト	
2	黒褐 10YR2/3	シルト	焼土 炭多含
3	黒 2.5Y2/1		炭の層

No.	土色	土性	備考
1	黒 10YR2/1	シルト	
2	黒褐 10YR2/3	シルト	
3	黒褐 10YR2/2	シルト	
4	黒 10YR2/1	シルト	
5	黒褐 10YR3/2	砂質シルト	地山粒少量
6	黒褐 10YR3/2	砂	

1・2：柱抜取り穴堆積土
3・4：柱穴埋土

1・2：柱抜取り穴堆積土
3・4：柱穴埋土

1・2：柱抜取り穴堆積土
3：柱穴埋土

1・2：柱抜取り穴堆積土
3・4：柱穴埋土

SI21

No.	土色	土性	備考
1	黒褐 10YR2/2	シルト	【自然流入土】
2	にぶい黄 2.5Y6/3		【自然流入土】 80白色火山灰
3	黒褐 10YR2/3	シルト	【自然流入土】 地山粒少量含
4	灰黄褐 10YR4/2	シルト	【自然流入土】 地山ブロック多量含
5	灰黄褐 10YR4/2	シルト	【自然流入土】 地山粒・炭少量含
6	黒褐 2.5Y3/1	シルト	【壁材崩落】 地山粒少量含
7	黄橙 10YR7/8	シルト	【周溝埋土】 黒褐色シルト少量含
8	黒褐 10YR3/2	シルト	【貼り床埋土】 地山ブロック多量含
9	にぶい黄褐 10YR4/3	シルト	【外柱痕埋土】 焼土粒 遺物多量含
10	にぶい黄褐 10YR4/3	シルト	【カマド内堆積土】 焼土粒 多量含
11	黒褐 10YR3/2	シルト	【カマド内堆積土】 地山ブロック多量含
12	明黄褐 10YR6/8	粘土	【カマド内堆積土】 黒褐シルト少量含
13	暗褐 7.5YR3/3	シルト	【カマド内堆積土】 焼土粒 炭粒 遺物多量含

第21図　SI21　住居跡SK58土壙

［重複］重複は認められなかった。

［規模・平面形］一辺約6.3mの隅丸方形と考えられる。

［堆積土］黒褐色の自然堆積のシルト層である。

［床面］地山ブロックを多く含む黒褐色シルトを埋め戻して床面としている。ほぼ平坦で中央部は堅くしまっている。

［主柱穴］３個検出した。全ての柱穴で柱を抜き取った痕跡が認められた。掘り方は長径約40cm、短径約30cmの楕円形で、深さは60cmである。柱痕跡は直径14cmの円形である。柱間寸法は3.5m前後である。

［カマド・貯蔵穴］検出されなかった。

［周溝］南東隅では一度掘り直しがなされており、古い方の周溝は幅約35cm、深さ約８cmである。この溝は埋め戻されており、壁側に沿って壁材を抜き取った痕跡と思われる幅約25cm、深さ約８cmの地山ブロックを含む黒褐色の堆積土が認められ、この部分も周溝改修の際に埋め戻されている。新しい方の周溝は幅30～44cm、深さ約10cmである。溝は埋め戻されており、壁側に沿って壁材を抜き取った痕跡と思われる幅10～24cm、深さ約10cmの黒褐色の堆積土が認められる。

［その他の溝］南東部の主柱穴から東辺にほぼ直角に延びる溝跡を１条検出した。幅約25cm、深さ約10cmである。

［出土遺物］非ロクロ調整の土師器坏・甕が少量出土したのみで図示できるものはない。

【ＳＩ21住居跡】

［重複］重複は認められなかった。

［規模・平面形］一辺約6.0mの隅丸方形である。

［堆積土］黒褐色の自然堆積のシルト層等で、第２層には灰白色火山灰の堆積が認められる。

［床面］地山ブロックを多く含む黒褐色シルトを埋め戻して床面としている。ほぼ平坦で中央部は堅くしまっている。

［壁］最も残りの良い部分で高さ20cm程が残存し、ほぼ直立する。

［主柱穴］４個あり、全ての柱穴で柱を抜き取った痕跡が認められた。掘り方は一辺約35cmの隅丸方形で、深さは42～52cmである。柱痕跡は直径15cmの円形である。柱間寸法は東西約3.3mである。

［カマド］北辺のほぼ中央部に付設されている。カマド本体は地山を削り出してつくられており、幅約40cm、側壁は長さ57cmである。内側には燃焼室の焼面が残存する。煙道は削平により長さ約30cmが残存するのみである。幅は約40cm、深さ約15cmである。

［周溝］全辺で確認された。幅18～38cm、深さ６～20cmで、溝は埋め戻されており、壁側に沿って壁材の痕跡と思われる幅５～10cm、深さ５～20cmの黒褐色の堆積土が認められる。

［貯蔵穴］検出されなかった。

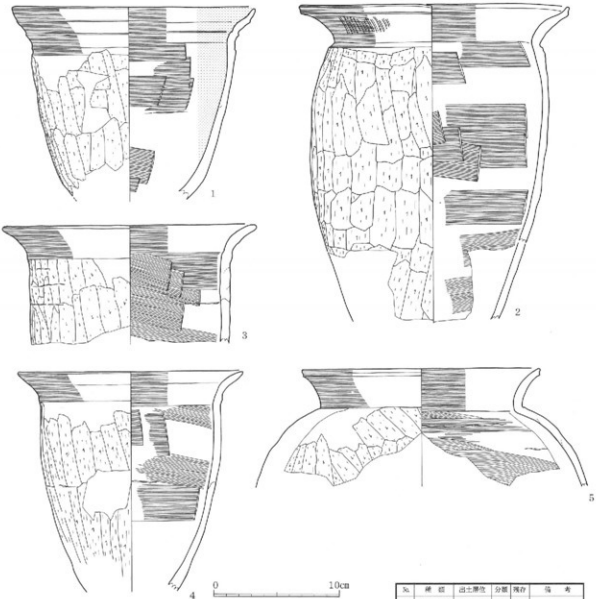
［外延溝］カマドの東脇からカマド前を通り、北西隅から住居外へ延びる溝跡である。外周溝に接続すると考えられる。幅12～62cm、深さ７～27cmで断面「Ｕ」字状を呈し、底面が住居外へ傾斜している。住居跡出口付近には砂が堆積しており、出口はトンネル状になっている。

［外周溝(ＳＤ22)］住居跡の北側を囲うように巡っており、住居跡との距離は約3.5mで、幅60～70cm、

深さ10～16cmである。黒褐色シルトが堆積している。

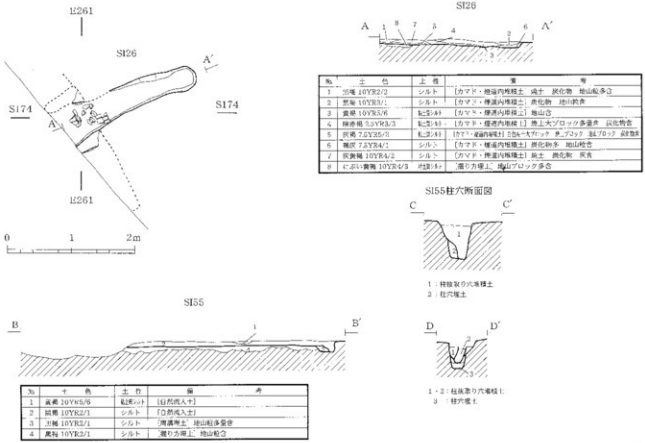
[出土遺物] 非ロクロ調整の土師器坏・椀・甕、須恵器甕が出土している。

図示した土師器甕は床面や住居内の外延溝底面、またカマド燃焼部底面から出土したもので、鉢形を呈するもの(1・4)、長胴形を呈するもの(2・3)、球胴形を呈するもの(5)とがある。長胴形を呈するものには胴部と口縁部の境に段を有し、胴部上半に張りを持つもの(2)と、明瞭な段は持たず、胴部の張りが弱く円筒形に近い形のもの(3)とがある。また、1は頸部から口縁部にかけて段が3段付く。器面調整は、口縁部ヨコナデで、胴部は外面がヘラケズリ、内面はヘラナデである。また、1の内面には黒色処理がなされている。



No.	種	器	出土層位	分類	残存	備 考
1	土師器・甕	床	直	Ⅱ	4/5	
2	土師器・甕	外延溝底面		ⅠA	2/3	倒立して出土
3	土師器・甕	床	直	ⅠBb	1/3	器台下に転用
4	土師器・甕	カマド燃焼		ⅠBb	3/5	
5	土師器・甕	外延溝埋土		ⅡA	一括	カマド前

第22図　ＳＩ21住居跡出土遺物



No.	土色	土性	備考
1	黒褐 10YR2/2	シルト	〔カマド・煙道内堆積土〕 焼土 炭化物 地山粒多含
2	黒褐 10YR3/1	シルト	〔カマド・煙道内堆積土〕 炭化物 地山粒含
3	黒褐 10YR3/6	粘質シルト	〔カマド・煙道内堆積土〕 地山含
4	暗赤褐 5YR3/3	粘質シルト	〔カマド・煙道内堆積土〕 焼土大ブロック多量含 炭化物含
5	灰褐 7.5YR5/2	粘質シルト	〔カマド・煙道内堆積土〕 5YR4/6ブロック 多ブロック 焼土ブロック 炭化物含
6	褐灰 7.5YR4/1	シルト	〔カマド・煙道内堆積土〕 炭化物多 地山粒含
7	灰黄褐 10YR4/2	シルト	〔カマド・煙道内堆積土〕 焼土 炭化物 灰含
8	にぶい黄褐 10YR4/3	粘質シルト	〔壁の崩壊土〕 地山ブロック多含

No.	土色	土性	備考
1	黄褐 10YR5/6	粘質シルト	〔自然流入土〕
2	暗褐 10YR2/3	シルト	〔自然流入土〕
3	灰褐 10YR5/1	シルト	〔掲載埋土 地山粒多量含
4	黒褐 10YR2/3	シルト	〔壁の崩壊〕 地山粒含

第23図　ＳＩ26・55住居跡

須恵器甕は堆積土中より、小破片が数片出土したのみである。

【ＳＩ26住居跡】

削平のためカマドとその煙道部のみが残存しており、南半は調査区外である。カマド本体はにぶい黄褐色粘土によって構築されており、煙道は長さ178cm、幅約40cm、深さ約８cmである。堆積土は炭や焼土ブロックを多く含む、自然堆積の黒褐色シルトや黄褐色粘質シルトの天井崩落土等である。

［出土遺物］非ロクロ調整の土師器坏・甕が出土している。図示できるものはない。

【ＳＩ35住居跡】

［重複］ＳＤ34と重複し、これより古い。

［規模・平面形］東西約2.3m、南北約2.5mの隅丸方形である。

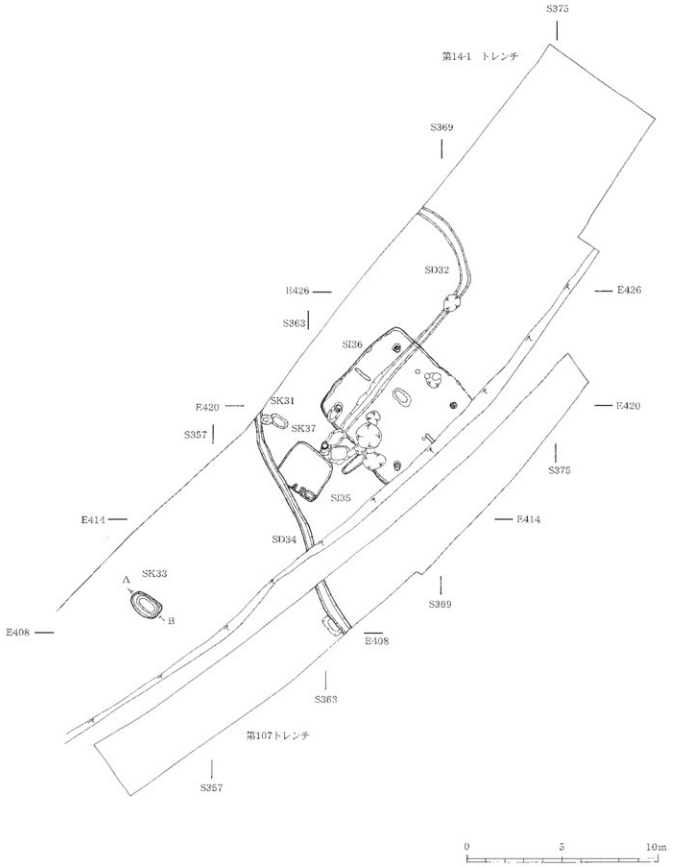
［堆積土］黒褐色や灰黄褐色シルトの自然堆積層である。

［床面］地山ブロックを多く含む黒褐色シルトの掘り方埋土を床面としており、ほぼ平坦で中央部は堅くしまっている。

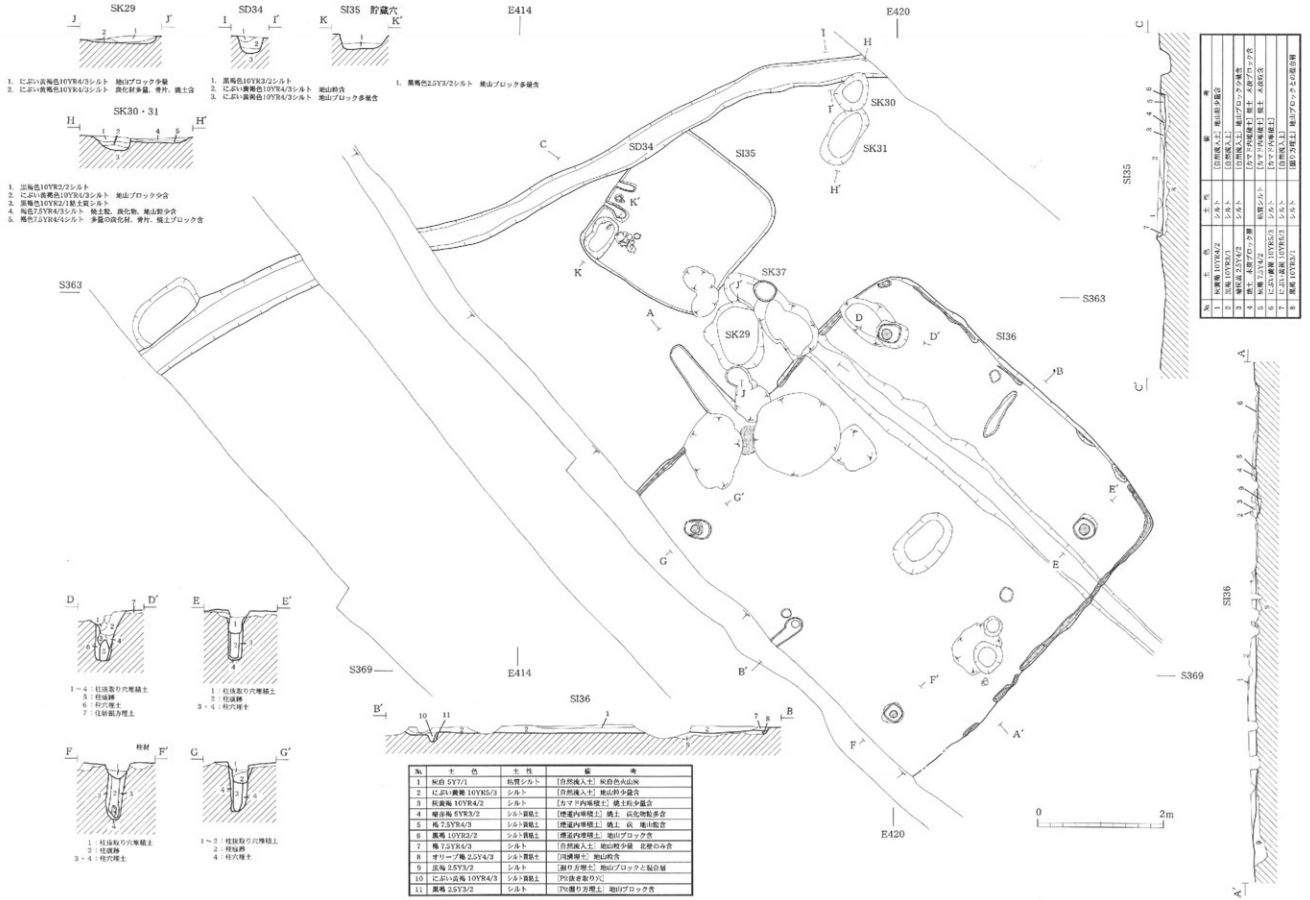
［壁］最も残りの良い部分で高さ10cm程が残存し、ほぼ直立する。

［主柱穴・周溝］検出されなかった。

［カマド］西辺のやや南よりに付設されている。本体は白色粘土を積み上げて構築されており、幅20cm、

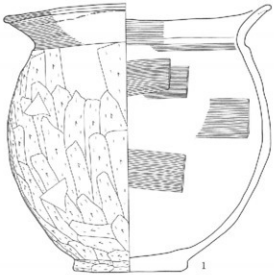

S375
第14-1 トレンチ
S369
SD32
E426
E426
S363
SI36
E420
SK31
E420
S357
SK37
S375
SI35
E414
E414
SD34
A
SK33
B
S369
E408
E408
S363
第107トレンチ
S357
0
5
10m

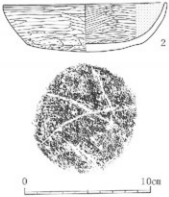
第24図　遺構配置図（５）



No.	土色	土性	備考
1	灰黄褐 10YR4/2	シルト	[自然流入土] 灰白色火山灰
2	黒褐 10YR3/1	シルト	[自然流入土] 地山粉少量含
3	暗灰黄 2.5Y4/2	シルト	[カマド内堆積土] 焼土粒少量含
4	暗赤褐 5YR3/2	シルト質粘土	[煙道内堆積土] 焼土 炭化物粒多含
5	褐 7.5YR4/3	シルト質粘土	[煙道内堆積土] 焼土 炭 地山粒含
6	黒褐 10YR3/2	シルト質粘土	[煙道内堆積土] 地山ブロック含
7	褐 7.5YR4/3	シルト	[自然流入土] 地山粒少量 花粉のみ含
8	オリーブ褐 2.5Y4/3	シルト質粘土	[沼濃堆土] 地山粒含
9	黒褐 2.5Y3/2	シルト	[掘り方埋土] 地山ブロックと混合層
10	にぶい黄褐 10YR4/3	シルト質粘土	[Pu抜き取り穴]
11	黒褐 2.5Y3/2	シルト	[Pu掘り方埋土] 地山ブロック含

第25図 SI35・36 住居跡





No.	種類	出土層位	分類	残存	備考
1	土師器・甕	床面	ⅡB	～完形	S135
2	土師器・杯	床面直上	ⅠB	～完形	S136、ヘラ書「×」

第26図　ＳＩ35・36住居跡出土遺物

側壁は長さ43cmである。内側には燃焼室の焼面が残存する。煙道は検出されなかった。

［貯蔵穴］カマド南脇で１ヶ所検出された。長径約64cm、短径約40cm、深さ約22cmの不整楕円形である。地山ブロックを多く含む黒褐色粘質シルトで人為的に埋め戻されている。

［出土遺物］床面などから非ロクロ調整の土師器甕が３個体出土しているが全体の器形を知り得るものは、図示した１点のみである。球胴形を呈しており、胴部と口縁部との境に明瞭な段を有する。器面調整は口縁部ヨコナデで、胴部は外面がヘラケズリ、内面はヘラナデである。

【ＳＩ36住居跡】

［重複］ＳＤ32、ＳＫ28と重複し、これより古い。

［規模・平面形］一辺6.0mの隅丸方形と考えられるが、南辺は攪乱溝によりこわされている。

［堆積土］第１層が灰白色火山灰、第２層がにぶい黄褐色シルトの自然堆積層である。

［床面］地山ブロックを多く含む黒褐色シルトを埋め戻して床面としており、ほぼ平坦で中央部は堅くしまっている。

［壁］最も残りの良い部分で高さ10cm程が残存し、ほぼ直立する。

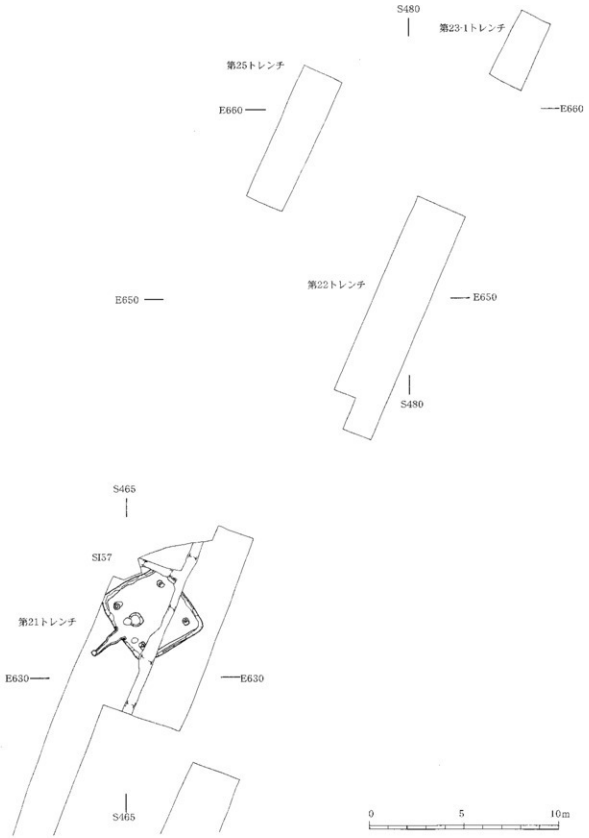
［主柱穴］４個あり、掘り方は長辺約35cm、短辺約25cmの隅丸長方形で、深さは約80cmである。柱痕跡は直径15cmの隅丸方形である。柱間寸法は約4.4mである。

［カマド］西辺のやや南よりに付設されている。カマド本体は攪乱によって壊されており残存しない。煙道は長さ154cm、幅35cm前後、深さは約７cmで、地山や焼土粒を含む黒褐色や褐色のシルト質粘土が堆積している。

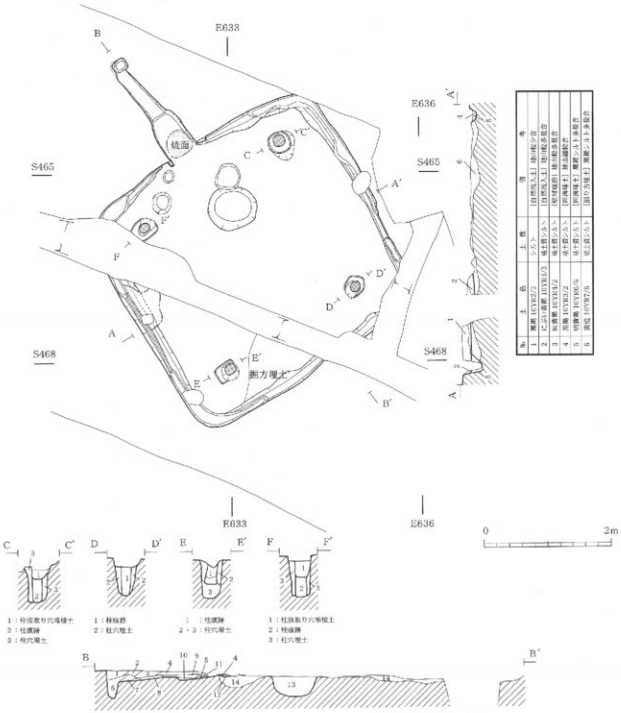
［周溝］所々途切れるものの、南辺を除く全辺で確認された。幅５～13cm、深さ５cm前後で、地山粒を含むオリーブ褐色シルト質粘土が堆積している。

［貯蔵穴］検出されなかった。

［外周溝(ＳＤ34)］住居跡の北側を巡っており、住居跡との距離は約４m前後で、幅32～64cm、深さ115～28cmである。黒褐色やにぶい黄褐色シルトが堆積している。


S480
第23-1トレンチ
第25トレンチ
E660
E660
E650
第22トレンチ
E650
S480
S465
SI57
第21トレンチ
E630
E630
S465
0
5
10m

第27図　遺構配置図（6）



No.	土色	土性	備考
1	黒褐 10YR2/2	シルト	[白焼成人土] 地山粒少含
2	灰黒褐 10YR4/3	砂土質シルト	[白焼成人土] 地山粒多量含
3	灰黒褐 10YR4/2	砂土質シルト	[焼材砂土] 地山粒多量含
4	黒褐 10YR2/2	砂土質シルト	[焼面埋土] 地山粒少含
5	明黒褐 10YR6/6	砂土質シルト	[焼面埋土] 黒褐シルト多量含
6	黄褐 10YR7/6	砂土質シルト	[掘り方埋土] 黒褐シルト多量含

No.	土色	土性	備考
1	褐 7.5YR4/3	シルト	[カマド・煙道内埋土] 焼土粒 炭粒多量含
2	にぶい黄褐 10YR4/3	シルト	[カマド・煙道内埋土] 焼土 炭 地山粒含
3	黒褐 10YR3/2	シルト	[カマド・煙道内埋土] 焼土 炭 地山粒 焼塩片少量含
4	にぶい黄褐 5YR4/3	シルト	[天上崩落土] 焼土 炭 地山粒 焼塩片多量含
5	褐 7.5YR4/4	粘質シルト	[カマド・煙道内埋土] 焼土 地山粒少量含
6	黒褐 10YR2/1	シルト	[カマド・煙道内埋土] 地山粒少量含
7	褐 7.5YR4/3	シルト	[天上崩落土] 焼土 炭 地山粒 焼塩片多量含
8	灰黄褐 10YR4/2	シルト	[カマド・煙道内埋土] 地山ブロック含
9	灰黄褐 10YR4/3	粘質シルト	[カマド・煙道内埋土] 焼土 炭粒含
10	にぶい黄褐 10YR4/3	粘質シルト	[カマド・煙道内埋土] 焼土 木炭多量含
11	にぶい黄褐 7.5YR4/3	粘質シルト	[カマド・煙道内埋土] 焼土 炭粒含
12	にぶい黄褐 5YR5/4	粘質シルト	[カマド・煙道内埋土] 炭 炭粒含
13	黒 10YR2/1	シルト	[内埋土] 地山ブロック含
14	黄褐 10YR7/6	粘質シルト	[掘り方埋土] 黒褐シルト多量含

第28図　SI57住居跡

［その他の溝跡］北辺ほぼ中央部付近から、住居内にほぼ直角に延びる溝跡を１条検出した。長さ約90cm、幅15cm前後、深さは５～９cmである。同様の溝跡は南側にも認められる。

［出土遺物］非ロクロ調整の土師器坏・甕が出土しているが、全体の器形を知り得るものは、図示した坏１点のみである。底部が丸底で、口縁部と体部との境に軽い稜を有し、口縁部が内湾するものである。器面調整は外面がヘラケズリ後、ヘラミガキ、内面はヘラミガキ後、黒色処理されている。

【ＳＩ57住居跡】

［重複］重複は認められなかった。

［規模・平面形］東西約4.2m、南北約4.0mの隅丸方形である。

［堆積土］黒褐色シルトやにぶい黄褐色粘質シルトの自然堆積層である。

［床面］西側の一部を除き、削平により失われている。地山ブロックを多く含む黒褐色シルトの掘り方埋土を床面としている。

［壁］最も残りの良い部分で高さ13cm程が残存し、ほぼ直立する。

［主柱穴］４個あり、全ての柱穴で柱を抜き取った痕跡が認められた。掘り方は長辺34cm、短辺28cmの隅丸方形や、直径約35cmの円形等で、深さは61～66cmである。柱痕跡は直径約18cmの円形である。柱間寸法は2.5m前後である。

［カマド］北辺のほぼ中央部に付設されている。カマド側壁はにぶい黄褐色粘質シルトにより構築されているが、その大部分は削平により失われている。煙道は長さ175cm、幅20～50cmで、先端に向かって傾斜しており、先端部は長辺24cm、短辺20cm、深さ45cmの隅丸方形を呈するピット状になっている。堆積土は地山や焼土粒を含む黒・黒褐色シルト等の自然堆積層である。

［周溝］全辺で確認された。幅10～25cm、深さ17cmで、溝は埋め戻されており、壁側に沿って壁材の痕跡と思われる幅６～９cm、深さ４cm程の黒褐色の堆積土が認められる。

［貯蔵穴］カマド前で１カ所検出された。直径約73cm、深さ約32cmの円形である。地山ブロックを多く含む黒色シルトで人為的に埋め戻されている。

［出土遺物］非ロクロ調整の土師器坏・椀・甕が少量出土したのみで図示できるものはない。床面からは木葉痕を残す土師器甕の底部のみの破片が出土している。

【ＳＩ40住居跡】

本住居跡は一度建て替えられており、北辺を除く３辺の壁が拡張されている。拡張幅は東・西辺で約70cm、南辺は削平により拡張後の壁や周溝が失われており不明である。以下、改築前のものをＳＩ40ａ、改築後のものをＳＩ40ｂとする。

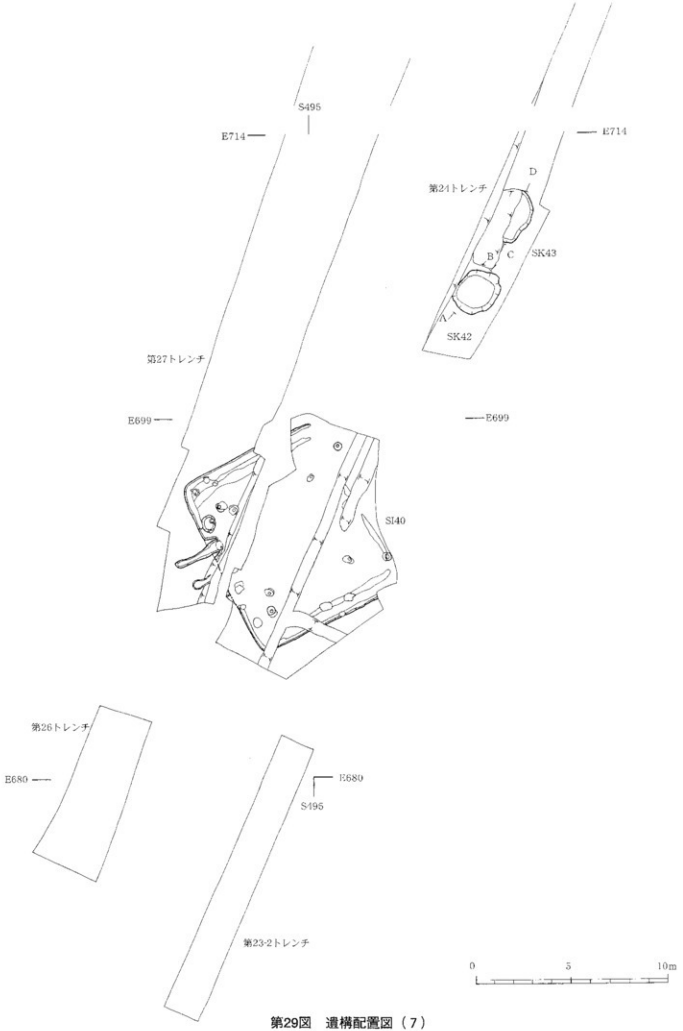
［重複］重複は認められない。

（ＳＩ40ａ）

［規模・平面形］南北約8.2m、東西約8.6mの隅丸方形である。

［床面］地山ブロックを多く含むにぶい黄褐色シルトの掘り方埋土を床面としているが、北東隅を除き、大部分が削平により失われている。

［主柱穴］４個あり、全ての柱穴で柱を抜き取った痕跡が認められた。掘り方は長径44cm、短径34cmの


S495
E714
E714
第24トレンチ
D
B
C
SK43
A
SK42
第27トレンチ
E699
E699
SI40
第26トレンチ
E680
E680
S495
第23-2トレンチ
0
5
10m

第29図　遺構配置図（7）

楕円形や、一辺約40cmの隅丸方形で、深さは51～66cmである。柱痕跡は直径約15～18cmの円形である。柱間寸法は4.4～4.8mである。

［カマド］攪乱溝により壊されており、煙道のみが残存する北辺の中央部と、カマド側壁や煙道の極一部が残存する北辺やや西よりの２ヶ所が検出された。両者の新旧関係は不明である。また、床面や貼り床等が残存していないことから、どちらかがＳＩ40ｂの時期のものである可能性も残している。中央部の煙道は長さ160cm程度と推定され、幅約35cm、深さは22cmで、先端部は直径48cm程の円形のピット状を呈している。炭や焼土、地山ブロック等を含む黒褐色シルトで埋め戻されている。

［周溝］全辺で確認された。幅22cm前後、深さは20cm程で、溝は埋め戻されており、一部には壁に沿って壁材や、あるいはそれを抜き取った痕跡と思われる幅５～16cm、深さ10cm前後の黒褐色シルトの堆積土が認められる。

［貯蔵穴］検出されなかった。

〈ＳＩ40ｂ〉

［規模・平面形］東西約10.0mの隅丸方形と考えられる。南北の長さは不明である。

［堆積土］自然堆積の暗褐色シルトである。

［床面］ＳＩ40ａと同一の床面を使用しており、拡張部分は地山ブロックを多く含む暗褐色シルトの掘り方埋土を床面としている。

［壁］最も残りの良い部分で高さ24cm程が残存し、ほぼ直立する。

［主柱穴］４個あり、全ての柱穴で柱を抜き取った痕跡が認められた。掘り方は長辺約40cm、短辺約30cmの隅丸長方形や、直径約40cmの不整円形で、深さは北東隅の柱穴で74cmである。柱痕跡は直径約18cmの円形である。柱間寸法は東西が北側約6.2m、南側約6.4m、南北が西側約6.7m、東側約7.0mである。

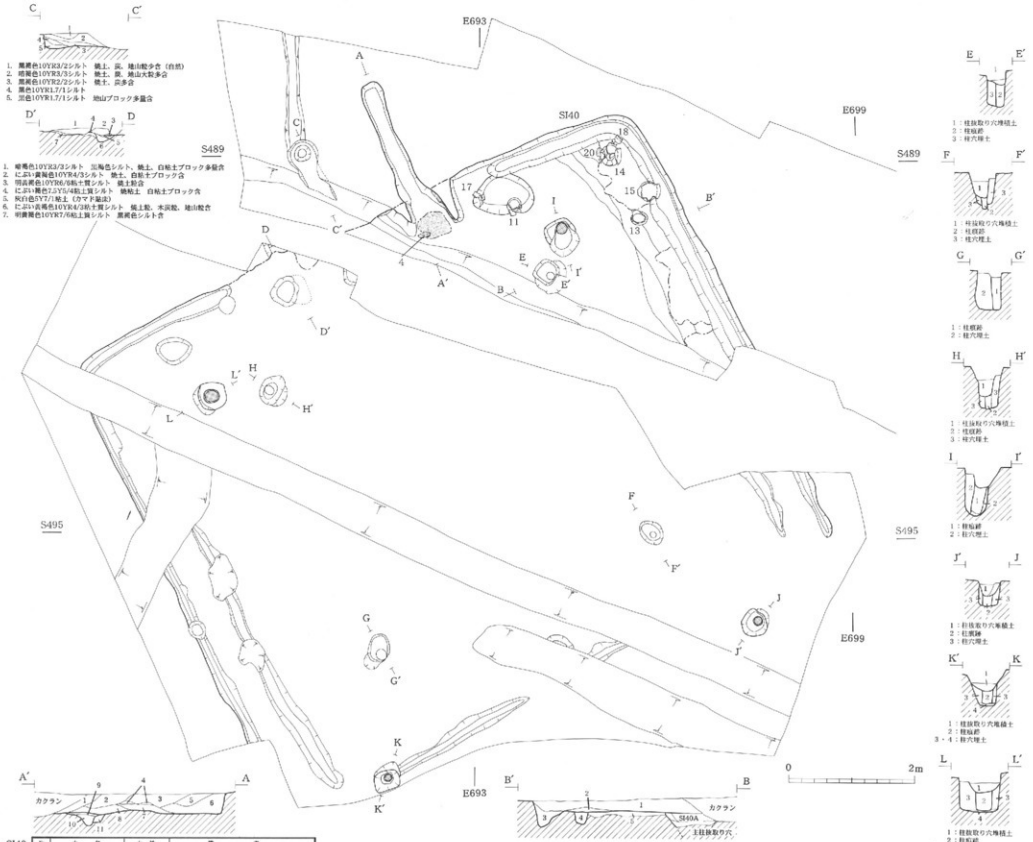
［カマド］北辺のやや東よりに付設されている。カマド本体は明黄褐色の粘土で構築されており、幅約50cm、側壁は長さ72cmである。内側には燃焼室の焼面が残存する。煙道は長さ196cm、幅30cm前後、深さ30cm程である。堆積土は焼土や地山粒を含む、自然堆積の黒・黒褐色シルト等である。

［周溝］南辺を除く全辺で確認された。幅12～40cm、深さは15cm程で、堆積土は地山ブロックを含む、しまりのない暗褐色シルトである。

［貯蔵穴］カマド東脇に１ヶ所検出した。長径約90cm、短径約70cm、深さ約15cmの不整楕円形である。

［出土遺物］非ロクロ調整の土師器坏・椀・甕、須恵器坏・蓋・稜椀・鉢、紡錘車、砥石が出土している。特に床面が残存する住居北東隅からはＳＩ６と同様、住居廃絶直前の遺物がそのまま残されたような状態で多数出土している。この中で11・13の土師器甕はＳＩ６のものと同様、胴部下半を欠き、口縁部を上にした状態で出土している。また、16についても14の土師器甕に潰されるような状態で出土し、胴部下半を欠く。

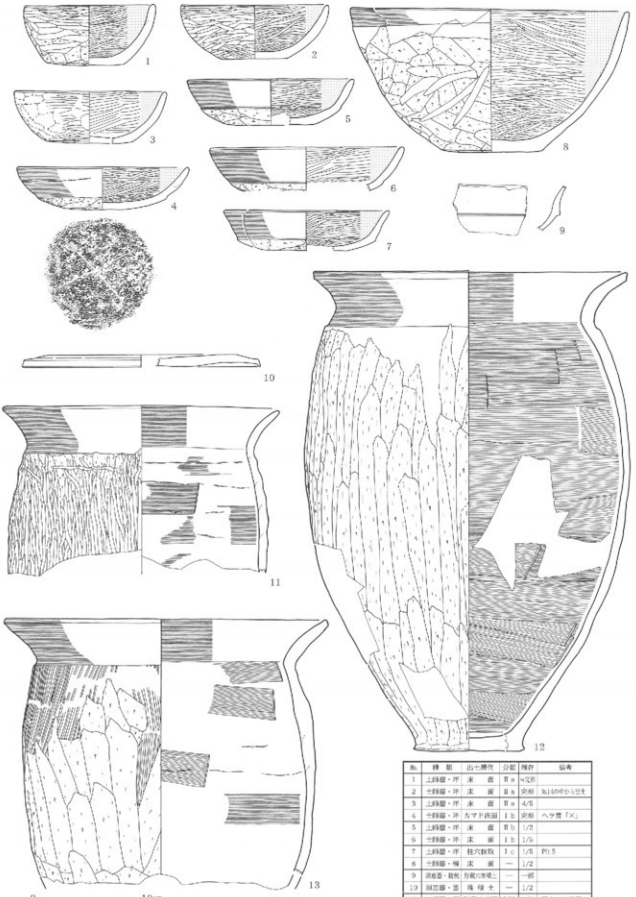
土師器坏には平底で体部外面に軽い段が付くもの(５)と付かないもの(１～３)、丸底で体部外面に段や稜、沈線が付くもの(４・６・７)があり、７を除き、体部から口縁部にかけて内湾して立ち上がっている。椀は平底で体部から口縁部にかけて内湾して立ち上がっている。甕は鉢形を呈するもの（18)、長胴形を呈するもの(11～13)、球胴形を呈するもの(14～17)とがある。器面調整は、坏や椀の外面は１～３が



SI40	No.	土色	土性	備考
	1	暗褐 10YR3/3	シルト	【自然流入土】 焼土粒 地山粒 多含
	2	にぶい黄褐 10YR5/3	粘土	【天井部崩土】 白色粘土 焼土ブロック含
	3	黒褐 10YR2/3	シルト	【壁溝内堆積土】 焼土 炭粒 少含
	4	暗褐 10YR3/4	シルト	【柱穴内堆積土】
	5	暗褐 10YR3/4	シルト	【柱穴内堆積土】 焼土粒 炭粒 地山粒多含
	6	黒 10YR1.7/1	シルト	【柱穴内堆積土】
	7	黒褐 10YR3/2	シルト	【柱穴内堆積土】 焼土粒少含
	8	暗褐 10YR3/4	シルト	【柱穴内堆積土】 焼土粒多含
	9	明黄褐 10YR6/6	粘土	【抜き取り】
	10	黒褐 10YR2/2	シルト	【抜き取り】 焼土粒 炭粒 地山粒多含
	11	にぶい黄褐 10YR4/3	シルト	【周溝埋土】 炭少含 地山粒多含

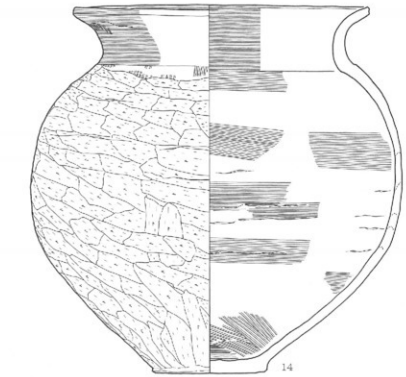
No.	土色	土性	備考
1	暗褐 10YR3/3	シルト	【自然流入土】
2	暗褐 10YR3/3	シルト	【自然流入土】 地山粒多含
3	暗褐 10YR3/3	シルト	【抜き取り】 地山ブロック多含
4	にぶい黄褐 10YR4/3	シルト	【周溝埋土】 地山ブロック多含
5	にぶい黄褐 10YR4/3	シルト	【踏み固め面】 地山ブロック多含

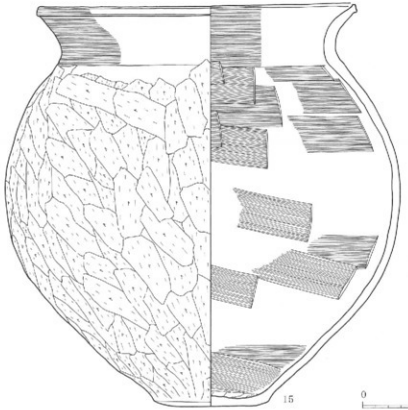
第30図　SI40　住居跡



No.	種類	出土層位	分類	種存	備考
1	土師器・坏	末　面	Ⅱa	4/5	
2	土師器・坏	末　面	Ⅱa	完形	丸140㎜から出土
3	土師器・坏	末　面	Ⅱa	4/5	
4	土師器・坏	カマド底面	Ⅰb	完形	ヘラ書「×」
5	土師器・坏	末　面	Ⅱb	1/2	
6	土師器・坏	末　面	Ⅰb	1/5	
7	土師器・坏	柱穴抜取	Ⅰc	1/5	P0.5
8	土師器・椀	末　面	—	1/2	
9	須恵器・鉄板	方貫穴埋土	—	一部	
10	須恵器・蓋	殊 碌 土	—	1/2	
11	土師器・甕	形貫穴底面	Ⅰ陸	1/2	器台すに転用
12	土師器・甕	柱穴抜取	Ⅰ A	4/5	P0.5
13	土師器・甕	末　面	Ⅰ陸	1/2	器台すに転用

第31図　ＳＩ40住居跡出土遺物（１）

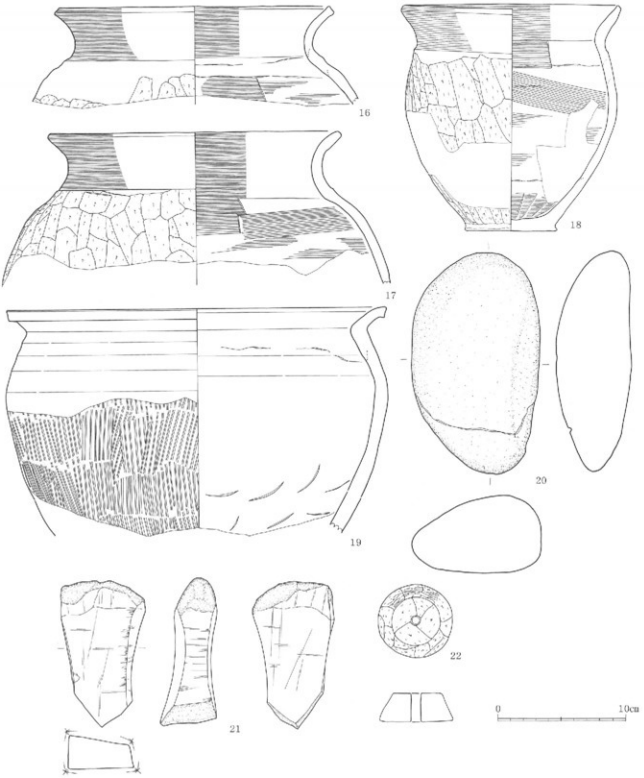




0　　10cm

No.	種　別	出土層位	分類	現存
14	土師器・甕	床　面	ⅡA	㎜完形
15	土師器・甕	床　面	ⅡA	㎜完形

第32図　ＳＩ40住居跡出土遺物（２）



No.	種類	出土層位	分類	残存	備考	No.	種類	出土層位	分類	残存	備考
16	土製品・鍋	灰 茜	Ⅱ A	1/4	知知川谷土器分類	20	自然石	末 頭	—		
17	土製品・鍋	新潟大洪水土	Ⅱ A	一部		21	硬 石	末 頭	—		
18	土製品・鍋	灰 茜	Ⅱ	2/3		22	地 鎮 車	埋 積 土	—		
19	製造品・鉢	新潟大洪水土	—	1/5							

第33図　ＳＩ40住居跡出土遺物（３）

体・底部ヘラケズリ後、ヘラミガキ、4～8は口縁部ヨコナデ、体・底部ヘラケズリである。内面はすべてヘラミガキ後、黒色処理されている。甕は口縁部ヨコナデ、胴部は外面をヘラケズリされており、11にはヘラミガキ、13にはハケメの痕跡も認められる。内面はヘラナデである。

須恵器坏は小破片のため図示できるものはない。坏蓋は端部が下方に短く折れ曲がるものであり、天井部は扁平である。つまみは欠損している(10)。鉢は体部は丸みをもって立ち上がり、頸部が括れて短く外反するものである。口径と体部の最大径はほぼ同一で、口縁端部は若干下方に引き下げられており、口縁帯をつくり出している。器面調整は外面に平行のタタキメ、内面は円弧状のオサエメが認められ、その後体部上半から口縁部にかけてはロクロナデによりそれらの痕跡が消されている。

2　溝跡

溝跡は住居外周溝を除き、8条検出されたが、この中で出土遺物や重複関係から年代の把握がある程度可能なものや、溝跡の性格が推定されるものについては以下のようなものがある。

【ＳＤ１溝跡】

北西から南東に傾斜し、やや北側に膨らみながら延びる溝跡である。長さは約10.0mで、南西側は調査区外に延びている。上幅40～60cm、下幅20～30cm、深さ約20cmである。地山や焼土粒を多く含む暗オリーブ褐色砂質シルトで人為的に埋め戻されている。遺物は出土していない。

【ＳＤ３溝跡】

北東から南西に傾斜し、やや蛇行しながら延びる溝跡である。長さは約5.5mで、南西側は調査区外に延びている。削平により残存状況が悪く直接の関係は不明であるが、ＳＩ50外周溝と堆積土は近似しており、位置や方向からＳＩ50の外延溝の可能性も考えられる。上幅約30cm、下幅約15cm、深さ15cmである。堆積土は焼土や地山粒を少量含む自然堆積の黒褐色砂質シルトである。遺物は出土していない。

【ＳＤ12溝跡】

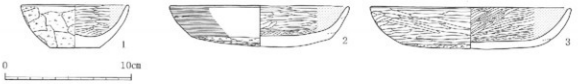
ＳＤ13と重複し、これより古い。北東から南西に傾斜する溝跡である。長さは約3.0mで、南西側は調査区外に延びている。上幅150cm前後、下幅30～80cm、深さ約30cmである。堆積土は自然堆積の黒褐色シルトやにぶい黄褐色シルト質粘土である。

遺物は非ロクロ調整の土師器坏・甕が少量出土しているが図示できたものは、坏１点のみである。平底で底部から口縁部にかけて内湾して立ち上がっており、器面調整は外面がヘラケズリ、内面はヘラミガキ後、黒色処理されている。

【ＳＤ13溝跡】

北東から南西に傾斜し、蛇行しながら延びる溝跡である。長さは約8.0mで、南西側は調査区外に延びている。上幅70～150cm、下幅40～100cm、深さ約25cmである。堆積土は地山ブロックを含む自然堆積の暗褐色シルトや灰黄褐色粘質シルト等である。

遺物は非ロクロ調整の土師器坏・甕が少量出土しているが図示できたものは、坏２点のみである。底部が平底に近い扁平な丸底で、底部から口縁部にかけて内湾して立ち上がっており、外面に稜が付くもの(2)と、付かないものがある(3)。器面調整は、外面が底部ヘラケズリで、口縁部は２はヨコナデ、３



No.	種 類	出土層位	分類	残存	備 考
1	土師器・坏	堆 積 土	Ⅱa	1/2	SD12
2	土師器・坏	堆 積 土	Ⅰb	4/5	SD13
3	土師器・坏	堆 積 土	Ⅰa	4/5	SD13

第34図　ＳＤ12・13出土遺物

はヘラミガキである。内面はヘラミガキ後、黒色処理されている。

【ＳＤ32溝跡】

ＳＩ36やＳＳＫ29・37と重複し、ＳＩ36より新しく、ＳＫ29・37より古い。北東から南西方向に延び、その後ほぼ直角に折れ曲がって北西に延びる溝跡である。長さは約16.0mで北東側は調査区外に延びている。傾斜は殆どない。上幅35～80cm、下幅20～35cm、深さ10cm前後である。堆積土は自然堆積の黒色粘質シルトや灰白色火山灰ブロック等を含む暗灰黄色シルトである。遺物は非ロクロ調整の土師器坏・甕が少量出土したのみで図示できるものはない。

3　土壙

土壙18基検出されたが、これらの中には底面や側壁に焼け面を有するものが６基ある。また、出土遺物から年代の把握がある程度可能なものは７基あり、中でもＳＫ７・８は底面直上から土師器坏・甕を中心に、遺物が数多く出土している。遺物の残存状況は1/2前後のものが多く、破損した土器を廃棄した土壙と考えられる。以下ではこれら13基について説明する。

【ＳＫ７土壙】

ＳＫ20と重複し、これより古い。長軸3.5m、短軸2.8m、深さ10cm前後の不整形の土壙である。底面は比較的平坦で、壁は緩やかに立ち上がっている。堆積土は自然堆積の灰褐色や黒褐色シルト等である。

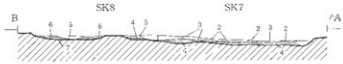
遺物は非ロクロ調整の土師器坏・椀・鉢・甕、須恵器坏・甕が数多く出土している。

土師器坏には底部が平底のもの(１～３)と扁平な丸底のもの(５～10)とがあり、丸底のものには体部外面に段や稜がつくもの(６～10)と、付かないもの(５)がある。鉢は体部は丸みをもって立ち上がり、口縁部が直立するものである(12)。器面調整は、坏の外面は５を除き口縁部ヨコナデ、体・底部ヘラケズリで、１は更に口縁部を中心にヘラミガキされている。５は外面ヘラケズリ後、口縁部を中心にヘラミガキされている。内面はすべてヘラミガキ後、黒色処理されている。鉢の外面は口縁部ヨコナデ、体部はヘラケズリである。内面は体部ヘラナデの後、口縁部ヨコナデである。

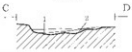
須恵器坏は底部から体部下端にかけて回転ヘラケズリされている。

【ＳＫ８土壙】

ＳＫ７に近接する、長径4.3m、短径1.3m、深さ10cm前後の楕円形の土壙である。底面は比較的平坦

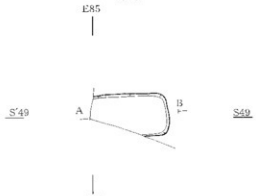


No.	土色	土性	備考	
1	黄褐 7.5YR4/2	シルト	SK7	遺物多量含
2	灰 焼土層			
3	黄褐 2.5Y3/1	シルト		地山多量含
4	黄褐 2.5Y3/3	シルト粘土		焼土 炭 人炭 含 地山ブロック多量含
5	黒褐 2.5YR3/1	シルト	SK8	自白色粘土ブロック含
6	灰褐 7.5YR4/2	シルト		地山多量含
7	にぶい黄 2.5Y6/4	シルト粘土		黒褐シルト多量含

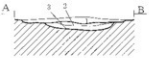


No.	土色	土性	備考
1	灰色褐 10YR4/2	シルト	黄褐色地山ブロック少量含
2	オリーブ褐 2.5Y6/3	砂質シルト	粉 地山ブロック多量含

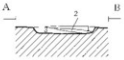
No.	土色	土性	備考
1	黒褐色 7.5YR3/1	シルト	
2	灰色 7.5YR7/1		



No.	土色	土性	備考
1	黒褐 10YR3/2	シルト	底面に炭薄く堆積

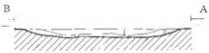


No.	土色	土性	備考
1	にぶい黄褐 10YR4/3	シルト	地山 木炭少量含
2	にぶい黄褐 10YR5/3	砂質シルト	土曲面が多量の灰化材含
3	暗灰黄 2.5YR5/2	砂質シルト	地山粒 炭粒多含



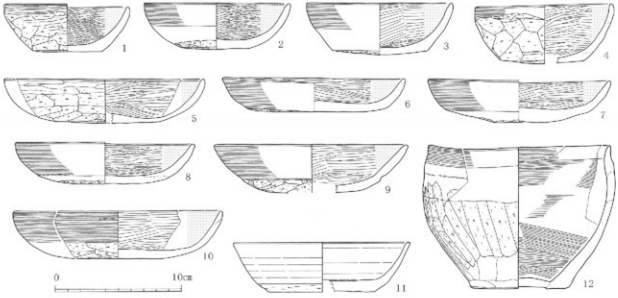
No.	土色	土性	備考
1	黒褐 10YR3/3	シルト	
2	黒褐 10YR2/3	シルト	焼土 炭 多量含
3	黒 2.5Y2/1		炭の層

No.	土色	土性	備考
1	暗褐 10YR3/3	シルト	焼土 炭 土器 多量含



No.	土色	土性	備考
1	黄褐 10YR2/3	シルト	焼土 地山粒多含
2	暗褐 10YR3/3	シルト	焼土 炭 地山ブロック多含

第35図　土壙断面図



No.	種別	堆積土	分類	残存	備考
1	土師器・坏	堆積土	Ⅱa	3/5	SK7・8
2	土師器・坏	堆積土	Ⅱa	3/4	SK7
3	土師器・坏	堆積土	Ⅱa	1/2	SK7
4	土師器・坏	堆積土	Ⅱa	4/5	SK8
5	土師器・坏	堆積土	Ⅰa	1/4	SK7
6	土師器・坏	堆積土	Ⅰa	3/5	SK7
7	土師器・坏	堆積土	Ⅰb	1/8	SK7
8	土師器・坏	堆積土	Ⅰb	3/5	SK7
9	土師器・坏	堆積土	Ⅰb	1/5	SK7
10	土師器・坏	堆積土	Ⅰa	1/5	SK7
11	須恵器・坏	堆積土	—	1/5	SK7
12	土師器・鉢	堆積土	—	3/4	SK7

第36図　ＳＫ７・８土壙出土遺物

で、壁は緩やかに立ち上がっている。堆積土はＳＫ７と同様であり、ＳＫ７・８は同時に掘られたものか、あるいは本来は１つの土壙であった可能性が高いと考えられる。

遺物は非ロクロ調整の土師器坏・甕が出土しているが、図示できたものは、坏１点のみである。平底で底部から口縁部にかけて内湾するもので、器面調整は外面が口縁部ヨコナデの後、体・底部ヘラケズリされている。内面はヘラミガキ後、黒色処理されている。

【ＳＫ20土壙】

ＳＫ７と重複し、これより新しい。長軸約1.4m、短軸約1.1m、深さ15cm程の不整形の土壙である。底面にはやや凹凸があり、壁は緩やかに立ち上がっている。堆積土は自然堆積の灰黄褐色シルトやオリーブ褐色砂質シルトである。遺物は非ロクロ調整の土師器甕が少量出土している。

【ＳＫ52土壙】

長辺1.2m以上、短辺約0.7mの隅丸長方形を呈すると考えられる土壙である。深さは約10cmで、堆積土は自然堆積の黒褐色シルトであり、底面には炭が薄く堆積する。壁はやや急に立ち上がっており、熱を受けて赤変し硬化している。特に東辺の硬化が著しい。底面は平坦で東辺付近が若干赤変している。遺物は出土していない。

【ＳＫ54土壙】

長辺1.0m、短辺約0.8mの隅丸長方形の土壙である。深さは約10cmで、堆積土は自然堆積の黒褐色シルトであり、底面には炭が厚く堆積している。壁は急に立ち上がっており、東・南辺は熱を受けて赤変し硬化している。底面は平坦で赤変や硬化は認められない。遺物は出土していない。

【ＳＫ58土壙】

長辺1.6m、短辺約0.8mの隅丸長方形の土壙である。深さは約30㎝で、堆積土は自然堆積の黒褐色シルトであり、底面には炭が薄く堆積する。壁は急に立ち上がっており、北辺以外は熱を受けて赤変し硬化している。特に南辺の硬化が著しい。底面は平坦で赤変や硬化は認められない。遺物は出土していない。

【ＳＫ27土壙】

長辺約0.8m、短辺約0.5mのほぼ隅丸長方形を基調とする土壙で、北辺はやや丸みを帯びている。深さは13㎝程で、堆積土は自然堆積の黒褐色シルトであり、底面には焼土ブロックを含む炭が１～３㎝の厚さで堆積している。壁は急に立ち上がっており、底面はほぼ平坦である。遺物は出土していない。

【ＳＫ29土壙】

ＳＤ32と重複し、これより新しい、長辺約1.1m、短辺約0.8mの隅丸長方形の土壙である。深さは12㎝程で、堆積土は自然堆積のにぶい黄褐色シルトで底面付近には炭・焼土ブロックが多く含まれている。壁は緩やかに立ち上がっており、底面は平坦で熱を受けて赤変し硬化している。遺物は土師器甕の小破片や小動物の微細な骨片が出土している。

【ＳＫ31土壙】

ＳＫ30と重複し、これより古い、長径約1.0m、短径約0.5mの楕円形の土壙である。深さは８㎝程で、堆積土は自然堆積の褐色シルトで底面付近には炭・焼土ブロックが多く含まれている。壁は緩やかに立ち上がっており、底面は平坦で熱を受けて赤変し硬化している。遺物は小動物の微細な骨片が出土している。

【ＳＫ37土壙】

ＳＫ29やＳＤ32と重複し、これより新しい、直径約0.4mの円形の土壙である。深さは20㎝程で、地山ブロックを多く含む、にぶい黄褐色シルトで人為的に埋め戻されている。遺物は近世の銭貨が出土している。

【ＳＫ41土壙】

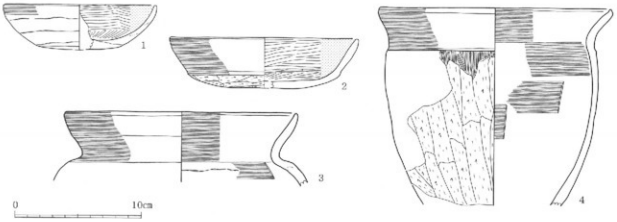
直径約2.5mの円形ないしは楕円形と考えられる土壙で、北半は調査区外である。深さは37㎝程で、堆積土は自然堆積の暗・黒褐色シルトで、地山や炭・焼土粒を含む。底面はほぼ平坦で、壁は部分的にオーバーハングして立ち上がっている。遺物は非ロクロ調整の土師器坏・甕が少量出土している。

【ＳＫ42土壙】

長径約2.6m、短径約2.2mの楕円形の土壙である。深さは５㎝程で、堆積土は自然堆積の暗・黒褐色シルトで、炭や焼土、地山粒を多く含む。壁は緩やかに立ち上がっており、底面はほぼ平坦である。

遺物は非ロクロ調整の土師器坏・椀・甕、須恵器坏蓋・甕が出土している。

土師器坏には平底で底部から口縁部にかけて内湾して立ち上がるもの(１)、底部が平底に近い扁平な丸底で、体部外面に段を有し、口縁部が内湾するもの(２)がある。甕は鉢型を呈するもの(４)と、球胴形を呈すると考えられるもの(３)がある。器面調整は、坏の外面は口縁部ヨコナデ、底部ヘラケズリである。甕は口縁部ヨコナデ、胴部は外面が３は磨滅により不明、４はハケメ後、ヘラケズリである。内面はヘ



No.	種 別	出土層位	分類	残存
1	土師器・坏	埋積土1層	Ⅱa	1/3
2	土師器・坏	底面直上	Ⅰb	1/2
3	土師器・甕	底面直上	ⅡA	一括
4	土師器・甕	底面直上	胴	1/4

第37図　ＳＫ42土壙出土遺物

ラナデである。

【ＳＫ43土壙】

直径約2.8mの円形ないしは楕円形と考えられる土壙で、北半は攪乱により壊されている。深さは12cm程で、堆積土は自然堆積の暗褐色シルトで、炭や焼土粒を多く含む。壁は緩やかに立ち上がっており、底面はほぼ平坦である。遺物は非ロクロ調整の土師器坏・甕が少量出土している。

その他の出土遺物：ＳＩ55を壊す近代の道路側溝と考えられる溝跡から灰釉陶器の段皿が出土している。

第12トレンチ撹乱溝

第38図　その他の出土遺物（灰釉陶器）

Ｃ　考察

1　出土遺物について

今回出土した遺物には、土師器坏・高坏・椀・短頸壺・鉢・甕・甑、須恵器坏・蓋・稜椀・短頸壺・鉢・甕、紡錘車、砥石、灰釉陶器、銭貨などがある。出土遺物の中で主体を占めるものは土師器で、全体の９割以上を占め、他は各々極少量である。図示したものは140点あり、住居跡に伴うものや特徴的な遺物を除き、口径等、法量がある程度正確に把握できるものを対象に図示した。

以下では各住居跡での遺物の出土状況から住居の廃絶状況を整理し、次に土器類の分類・組み合わせを考察して、土器の編年的位置づけを試みることとする。

①各住居跡毎の遺物出土状況

今回調査された竪穴住居跡は12軒あり、それらの住居廃絶時の土器残存状況をみると、次のような3つに分けることができる。

Ⅰ：床面に遺物が完形やほぼそれに近いかたちで多数残されている住居跡。

Ⅱ：床面に遺物は残されているものの数個体にとどまる住居跡。

Ⅲ：床面に遺物は残されていないか、あるいは床面やカマド底面から破片のみが出土する住居跡。

Ⅰは住居廃絶まで使用されていた遺物がそのまま残されたと考えられる住居跡、Ⅱは住居廃絶まで使用されていた遺物はいくつか残されているが、多くは持ち出されたと考えられ、組成上の欠落がみられる住居跡、Ⅲは住居廃絶まで使用されていた土器類はすべて持ち出されたと考えられる住居跡で、床面から小破片で出土したものは破損などにより住居機能途中に使用されなくなった遺物が、住居外に廃棄されず住居廃絶時まで残ったと考えられるものである。ⅠはＳＩ６・40、ⅡはＳＩ14・15・21・35・36、ⅢはＳＩ16・50が各々該当する(註1)。尚、その他の住居跡についてはＳＩ26は煙道部分のみの調査であり、ＳＩ55・57は床面の大部分が削平により失われていることから、これらの状況は不明である。

註１：ＳＩ15は住居に伴う遺物は比較的多いものの、カマド側脇に転用されたものや、住居拡張時の掘り方や旧煙道を埋め戻す際に一緒に廃棄されたものが多く、住居廃絶時まで使用されている遺物は少ないことからⅡに含めた。

②土器の分類

出土遺物の内、出土量が多く分類が可能なものは土師器坏・甕のみであり、以下ではこれら２つについて、形態面を中心に検討を加え分類を行うこととする。その他については主なものの特徴を述べるに留める。

《土師器》 すべて製作に際しロクロを使用しないものである。

【坏】

図示したものは66点有り、底部形態によりⅠ類：丸底、Ⅱ類：平底とに大別され、Ⅰ類は口縁・体部形態によって更に細分される。

Ⅰ類：丸底で、

ａ類　体部に段や沈線、稜が付かず、内湾するもの。(18点)

ｂ類　体部外面に段や沈線、稜を有し、口縁部が内湾するもの。(24点)

ｃ類　体部外面に段を有し、口縁部が直線的に外傾するもの。(２点)

Ⅱ類：平底で

ａ類　体部に段や沈線、稜が付かず、内湾するもの。(20点)

ｂ類　体部外面に軽い段を有し、口縁部が内湾するもの。(２点)

[器面調整] 基本的に外面は口縁部ヨコナデ、体・底部ヘラケズリで、Ⅰａ・Ⅰｂ・Ⅱａ類には最終調整にヘラミガキが施されるものと施されないものが各々ある。内面はヘラミガキ後、黒色処理されている。

【甕】

図示したものは49点有る。胴部形態によって、Ⅰ類：長胴形(30点)、Ⅱ類：球胴形(10点)、Ⅲ類：鉢形(９点)とに大別される。Ⅰ・Ⅱ類は法量によって、大形のものと、小形のものとに分けられるが、大形品が多く、小形のものはⅠ類が５点、Ⅱ類が２点のみである。また、器形により、以下のように細分される。

Ⅰ類：胴部形態によりＡ～Ｃ類にわけられる。

Ａ類：胴部上半に張りを有し砲弾形を呈するものである。頸部はやや長く直立気味となり、口縁部は外反する。口縁端部は面取りや上端を引き出すことによって、平坦に仕上げられている。頸部には段が付くものと付かないものとがあり、段が付くものについても、胴部のヘラケズリ調整が頸部まで及ぶことにより、部分的に段が消失しているものが多い。(４点)

Ｂ類：胴部の張りが弱く、円筒形を呈するものである。口縁・頸部形態によって更にａ・ｂ類に細分される。

ａ類：口縁・頸部の形態がＡ類とほぼ同様のものである。(３点)

ｂ類：頸部が短く「く」の字に屈曲し、口縁部が外反または直線的に外傾する。口縁端部は丸く仕上げられているものと、面取りされ方形に仕上げられているものがあり、後者については、ＩＡ類と比較して、面取りはやや不明瞭で隅丸方形に近いものである。また、頸部には他と同様、段が付くものと付かないものとがあるが、後者についてはＩＡ・ⅡＢａ類と比べて段は明瞭である。(１７点)

Ｃ類：胴部中央に張りを有するもので１点出土している(第16図９)。口縁・頸部の形態はＩＢｂ類と同様である。

Ⅱ類：口縁部の径が胴部径よりも、Ａ類：小さいもの(８点)と、Ｂ類：大きいもの(１点)とがあり、Ａ類には小形のものもみられる(第10図36)。口縁・頸部の形態は小形品を除き、Ａ類はＩＡ類と、Ｂ類はＩＢｂ類とそれぞれほぼ同様の形態を呈している。

[器面調整] 基本的に口縁部ヨコナデ、胴部は外面ヘラケズリ、内面ヘラナデであるがＩＡ類を除き、ヘラケズリの前段階に施されたハケメ調整が胴部内外面に認められるもの(第15図６、第16図10･11、第17図15、第31図13、第32図14)も少量認められる。また、ＩＢ類の胴部外面にはヘラケズリ後、ヘラミガキが施されるものもある(第16図10、第17図14、第31図11)。底部はⅢ類の一部とＩＢｂ類に木葉痕が認められ、その他はヘラケズリやナデ調整されている。

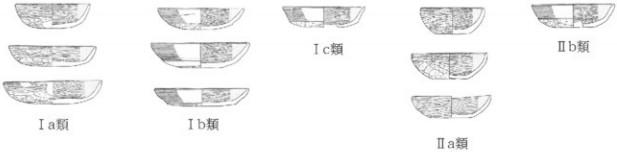
【椀】

６点図示した。平底で底部から内湾して立ち上がっており、口縁端部は内湾するもの(第６図15、第８図14、第13図４、第15図４)とやや外傾するもの(第８図15、第31図８)とがある。調整は外面が口縁部ヨコナデ、体・底部ヘラケズリで、最終調整にヘラミガキが施されるものも３点ある。内面はヘラミガキ後、黒色処理されている。

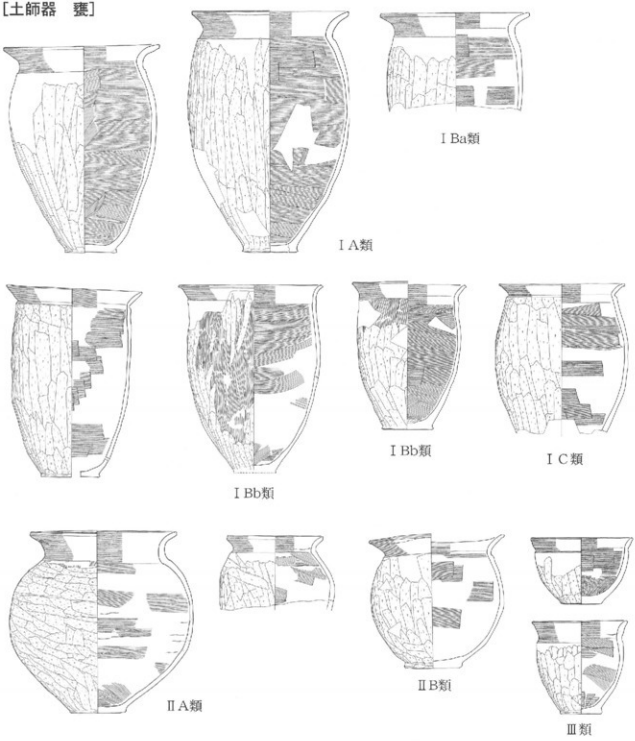
【鉢】

１点図示した。平底で、底部から体部下半にかけて直線的に外傾して立ち上がっており、体部上半で内湾し、口縁部は直立している。調整は口縁部ヨコナデ、体部は外面ヘラケズリで、内面はヘラナデで

[土師器　坏]



[土師器　甕]



第39図　土師器　坏・甕の分類（S=1/6）

ある。底部外面はナデ調整されている（第36図12）。

【短頸壷】

１点図示した。肩部に張りを有し、底部には低い高台が付くが、底部が高台下端より下方にやや張り出している。外面と頸部内面はヘラミガキ調整がなされている。その後、内面は黒色処理されており、外面上半まで黒色処理が及んでいる（第18図19）。

【甑】

無定式の小破片がＳＩ50外周溝から１片出土したのみで図示できるものはない。調整等は磨滅により不明である。この他に明確に甑と断定できるものはなく、ＳＩ６など土器を多量に残す住居跡からも出土していない。

【手捏土器】

１点図示した。平底で、底部から口縁部にかけて直線的に外傾して立ち上がっている。調整は外面ヨコナデ後、ヘラミガキ、内面はヘラナデである(第19図１)。

《須恵器》

【坏】

４点図示した。底部から体部下端にかけて回転ヘラケズリ調整されるもの(第６図14、第36図11)と、底部ヘラ切り後、無調整のもの(第19図２・３)がある。

【坏蓋】

３点図示した。すべて端部が下方に短く折れ曲がるものであり、天井部はやや高く丸みをもつもの(第８図25、第19図４)と、扁平なもの(第31図10)がある。第８図25にはリング状のつまみが付く。

【壷蓋】

１点図示した。平らな天井部から口縁部が下方に折れ曲がっており、つまみは扁平な宝珠形である(第19図５)。

【鉢】

１点図示した。体部は丸みをもって立ち上がり、頸部が括れて短く外反するものである。口径と体部の最大径はほぼ同一で、口縁端部は若干下方に引き下げられており、口縁帯をつくり出している。器面調整は外面に平行のタタキメ、内面は円弧状のオサエメが認められ、その後体部上半から口縁部にかけてはロクロナデによりそれらの痕跡が消されている(第33図19)。

③土器の組み合わせと年代

上師器坏・甕は前項のように分類され、それらは各住居毎に第１表のような共伴関係が認められた。遺物が比較的まとまって出土しているのはＳＩ６・14・15・21・40・50であり、これらの住居に伴う遺物について土師器坏・甕の組み合わせを検討し、土器の編年的位置について考察する。

表1

遺構	坏Ⅰa	坏Ⅰb	坏Ⅰc	坏Ⅱa	坏Ⅱb
SⅠ6	●×	●×		●	●
SⅠ40		●×	×	●	●
SⅠ21					
SⅠ14	●				
SⅠ15	●○	×			
SⅠ50	×	●○	×	×	

甕ⅠA	甕ⅠBa	甕ⅠBb	甕ⅠC	甕ⅡA	甕ⅡB	甕Ⅲ
●	○			○		●○×
●		○		●○×		●
●		○		○		●○
		●○			●	
		●○×	○			
		○				

●住居に伴うと考えられるもので廃絶時まで使用されたもの
○住居に伴うと考えられるもので、機能中に転用または廃棄されたもの
×流入土中から破片で出土し、住居に伴うものか不明のもの

遺構	土師器														須恵器				
	坏Ⅰa	坏Ⅰb	坏Ⅰc	坏Ⅱa	坏Ⅱb	胸	甕ⅠA	甕ⅠBa	甕ⅠBb	甕ⅠC	甕ⅡA	甕ⅡB	甕Ⅲ	壺	平坏	坏・椀	鹿	甕	鉢
SⅠ6	1(1)	3(4)		10	1	2	2	3			3		4(1)				1		
SⅠ21							1		1		1		2						
SⅠ40		1(1)	(1)	3	1	1	1		2		4		1			(1)	(1)		(1)
SⅠ50	(1)	3(1)	(1)	(1)					(1)										
外周溝	(3)	(1)				(1)										(1)			
SⅠ14	3					1			2				1						
SⅠ15	2	(1)				1			3(1)	1									
外周溝		(1)							(1)										
外周溝	(3)								(3)					(1)					
SⅠ16															(1)	(2)	(2)		
SⅠ35												1							
SⅠ36		1																	

（ ）は遺構に伴わない可能性のあるもの。

《土師器坏・甕の組み合わせと編年的位置》

坏ではＳⅠ６においてⅠａ・Ⅰｂ・Ⅱａ・Ⅱｂ類が共伴しており、Ⅰｃ類を除く坏類のすべての共伴関係が成立する。尚、Ⅰｃ類は流入土出土の破片のみであり、遺構に伴うと考えられるものは出土していない。甕はＳⅠ６・21・40においてⅠＡ・ⅡＡ・Ⅲ類が共伴しており、この他にＳⅠ６ではⅠBa類、ＳⅠ21・40ではⅠBb類がそれぞれ伴出していることから甕類についても出土量の少ないⅡＢ類を除き、共伴関係を確認することができる。このように、坏・甕類の殆どの供伴関係が成立するものと考えられ、今回出土した土器については、概ね一つの土器群として捉えることが可能と考えられる。

これらの土器の特徴は志波姫町糠塚遺跡第１群土器(小井川・手塚:1978)、志波姫町御駒堂遺跡第22号住居跡(小井川・小川:1982)など、東北地方南部の土器編年の国分寺下層式(氏家:1957)に比定される土器群に類例が求められ、本遺跡出土の土器についても全体として国分寺下層式の範疇に含まれる土器群であるとすることができよう。

但し、上記のＳⅠ６・21・40以外の住居跡に注目すれば、これら３つの住居跡とその他の住居跡との間に若干の差異が認められる。つまり、平底の坏Ⅱ類や胴部が砲弾形を呈する甕ⅠＡ類はＳⅠ６・40やＳⅠ21(甕ⅠＡ類のみ出土)以外の住居跡には伴出していない。各住居跡の流入土出土のものを含めても、その他でこれらが出土するのはＳⅠ50流入土出土の小破片の他、ＳⅠ６・40に近接するＳＫ７・８・42やＳＤ12のみである(註1)。こうした状況は住居跡における坏Ⅱ類や甕ⅠＡ類の有無が単なる欠落ではなく、これらが上記の住居跡においてのみ使用されていた可能性を示唆するものと考えられる。以上のような検討から、本遺跡出土土器は全体としては概ね各分類毎の共伴関係が把握できるものの、住居跡間では坏Ⅱ類・甕ⅠＡ類が共伴し、これらが主体をなすグループ(ＳⅠ６・21・40)と、それを含まないグループ(ＳⅠ14・15・50)に細分される可能性を有していると言えよう。

両グループの住居跡間の重複関係は認められないが、ＳＩ６・40住居内においては坏Ⅱ類や甕ＩＡ類は住居廃絶時まで使用されていた遺物としてのみ確認できるもので、住居使用途中にカマド内に残されたものや、カマド側壁や器台に転用されたもの、あるいは掘り方埋土出土といった、それらよりも時間的にやや古い出土状況を示すものには認められない。したがって、住居機能期間という短い時間幅で、上器形式も国分寺下層式の範疇に収まるものであるものの、上記のような出土状況から、坏はＩ類(丸底)からⅡ類(平底)、甕はＩＢ類(円筒形)からＩＡ類(砲弾形)へという本遺跡内における土器変化の傾向を窺い知ることができる。

註1:ＳＩ50流入土中からは坏Ⅱａ類の小破片が２片出土しているが、これらはＳＩ50に伴うものかどうかは不明である。ＳＩ６などで使用されたものが流入した可能性もあるものと考えられる。

《ＳＩ６住居跡出土土器について》

前項では住居跡出土土器全体の編年的位置について述べたが、ここでは各住居跡の中でも住居跡全体が調査され、床面等に多量の遺物が残されていたＳＩ６の土器に注目し、国分寺下層式期における位置づけを検討してみたい。

【ＳＩ６出土土器の特徴】

住居に伴うと考えられる遺物は、床面やカマド燃焼部底面から出土した土師器坏14点、椀２点、甕10点、須恵器蓋１点と、カマド焚き口の側壁補強に使われた土師器甕１点(第９図33)、床面直上層から完形に近い状態で出土した土師器坏２点(17・18)、甕１点(29)である。これらの坏類は完形や、それに近い状態のものが殆どであり、住居廃絶直前まで使われていたものがそのまま残されたような状態で出土している。

土師器坏は平底であるⅡ類が主体を占め、Ⅱａ類10点、Ⅱｂ類１点を数える。丸底であるＩ類はＩａ類１点、Ｉｂ類３点と少量でＩｂ類３点の内２点は体部外面に稜が付くもの、１点は弱い沈線が２条巡るものである。甕はＩＡ類２点、ＩＢａ類３点、Ⅱ類３点(内ⅡＡ類２点)、Ⅲ類４点である。これらの内、ＩＡ類はＩＡ類が住居廃絶時まで使用されたもの、ＩＢａ類は住居機能途中にカマド側壁や器台などに転用されたものという分別が可能である。

【年代について】

国分寺下層式は氏家和典氏によって設定され(氏家:1957)、その後、後続する対馬式が国分寺下層式に包括されるものであるという見解が示されている(桑原:1976、小井川・高橋:1977)。該期の土器の類例としては、前述の志波姫町糠塚遺跡第１群土器(小井川・手塚:1978)や同御駒堂遺跡第22号住居跡出土上器(小井川・小川:1982)の他、田尻町天狗堂遺跡第19号住居跡出土土器(佐藤・手塚:1978)、同金鋳神遺跡第17号住居跡出土土器(小村田:1992)、若柳町有賀峰遺跡第１号住居跡出土土器(熊谷:1980)などがある。また、名取市清水遺跡では同式に属する第58号住居跡出土土器を対馬遺跡出土土器(加藤・伊藤:1955)とともに、坏による相違点から糠塚遺跡第１群土器のものより新しく位置づけており(丹羽:1981)、その理由は坏体部外面の段や沈線の消失、平底坏の増加という点に集約されている。

ＳＩ６出土の土師器坏をこれらと比較した場合、丸底と平底の坏Ⅰ・Ⅱ類が共伴するなど糠塚遺跡第

１群土器と同様の共伴関係を示すものの、本土器群においてⅠ類やⅡｂ類は少なく、平底で体部外面に段や沈線が付かない坏Ⅱａ類の組成に占める割合は圧倒的である。こうした特徴は有賀峰遺跡第１号住居跡出土土器とほぼ同様であり、坏が体部外面に段や沈線が付かないもののみで構成され国分寺下層式の中でも終末段階とされる名取市清水遺跡第58号住居跡や迫町対馬遺跡第４号住居跡出土土器にむしろ近い傾向を示している。したがって坏類でみた場合、ＳＩ６出土土器は国分寺下層式の中でも相対的にやや新しい特徴を有する土器群として位置づけられるものと考えられる。

次に土師器甕をみてみると、甕による編年的位置付けは現在のところ明確になっていないが、砲弾形を呈し、ロクロ不使用の長胴甕は県北地域では御駒堂遺跡第６号住居跡などにおいて７世紀末～８世紀初頭頃には出現している。但し、これらとＳＩ６出土の甕とでは口縁端部の形状等に違いが認められ、むしろ甕ＩＡ類の胴部形態や口縁端部のつくり出しはロクロ使用・不使用の違いはあるものの、８世紀末頃とされる築館町伊治城跡第４号住居跡住居跡(宮多研:1978)や、それよりも若干新しいとされる同遺跡第173号住居跡(菊地:1992)出土のロクロ使用の土師器甕に近似している(註１)。本遺跡のものにロクロ使用のものは含まれていないものの、以上のような坏、甕の検討からＳＩ６出土土器は国分寺下層式の中でも比較的新しく位置づけられ、年代的には８世紀後半でも、やや新しい時期のものと考えられるものである。

註１：口縁部形態のみをみれば有賀峰遺跡第１号住居跡や大境山第２号住居跡出土のロクロ不使用の土師器甕にも少量認められる。

④須恵器のあり方と特徴

本遺跡出土土器では土師器に比して須恵器の比率が極めて低く、組成の中に須恵器が認められる例は希である。出土土器全体をみても、須恵器は図示した９点以外は甕の胴部破片を中心に少量出土したのみであり、集落内において須恵器消費量が僅少であった状況が窺える。

須恵器は坏・蓋・鉢・甕が出土しているものの、床面など住居跡に確実に伴う状態で出土しているのは、ＳＩ６の須恵器坏蓋１点のみである。この蓋はリング状のつまみが付き、端部は下方に短く折れ曲がっている。坏はＳＩ50外周溝やＳＩ16堆積土、ＳＫ７底面直上などから出土している。ＳＩ50外周溝やＳＫ７出土のものは底部から体部下端にかけて回転ヘラケズリ調整されており、ＳＩ16堆積土出土のものは底部ヘラ切り後、無調整である。

須恵器の出土量が極めて少ないことは前述した通りであり、本遺跡において須恵器が希少な存在であったことは容易に推察できるものである。ＳＩ６床面出土の蓋やＳＩ50外周溝出土の坏にしても、類例を辿れば、色麻町日の出山窯跡群(吉川:1994)や田尻町木戸窯跡群(辻:1984)など８世紀前半頃の窯跡を中心に多くみられるもので、共伴する土師器の年代観と必ずしも合致しない。しかし、８世紀前半以降にＳＩ６・50が構築されたであろうことは言及できても、客体的に極少量共伴するこれらの須恵器により両住居跡の年代を遡らせて考えることは困難である。この坏・蓋がいつ集落内に持ち込まれたのかは不明であるが、その後、集落内に須恵器が供給されることは極めて少なく、破損を免れたものが長期間使用されたとみるのが妥当と考えられる。

尚、ＳＩ６出土土器の類例として挙げた有賀峰遺跡第１号住居跡、清水遺跡第58号住居跡、対馬遺跡第４号住居跡の各出土土器についても、須恵器の共伴が僅少であることは共通した特徴である(註１)。

註１：他に本遺跡と比較的近似した状況を示すものに、本遺跡と同じ小山田川沿いの東方約５kmにある大境山遺跡(阿部:1983)が挙げられる。出土土器全体では須恵器は土師器の８分の１程の出土量であり、国分寺下層式期とされる第２号住居跡床面には本遺跡ＳＩ６と同様、土器が多量に残されており、これらをみると土師器坏12点、須恵器坏４点と本遺跡ＳＩ６程ではないものの土師器が圧倒的に多い土器組成を示している。

⑤胴部下半を欠く土師器甕について

住居床面出土の土師器甕には、胴部下半を欠損し口縁部を上にした状態で出土しているものが存在する(ＳＩ６-34・37、ＳＩ21-３、ＳＩ40-11・13)。この内ＳＩ６-34やＳＩ21-３はカマド側壁脇の床面に胴部が３～４cm埋まった状態で出土しており、生活時の現位置を保った状態で出土している。明確な掘り方は確認できなかったが、胴部径とほぼ同じ大きさに床面を浅く掘り窪め、安定するような状態で置かれたものと考えられる。その他はカマド右側の床面上に直に置かれた状態で出土している(註１)。また、この他にＳＩ６-36は横倒し、ＳＩ40-16は14の球胴甕に潰され、床面に張り付くような破片の状態で出土しているものの、土器の残存状況は上記の甕と同様である。

以上のような土師器甕については、何らかの用途に転用されたものと考えられるが現在のところ県内において類例となるような同時期の資料は報告されておらず、明確な答えを導き出すことはできない。但し、大形の球胴甕の下敷きとなって出土したＳＩ40-16のような状況を考慮すれば、大形の甕を置く“器台”のような用途に用いられたのではないかと推定されるものであり、今後の資料の増加を待ちたい(註２)。

註１：ＳＩ６-37は床面から若干浮いた状態で、ＳＩ40-11は貯蔵穴に落ち込むような状態で出土していることから、これらについては現位置から若干動いているものと考えられる。

註２：今年度調査され現在整理中の宮崎町壇の越遺跡においても同様の出土状況を呈する甕があることが調査担当者から教示された。時期は奈良時代前半頃のもので類例の一つとなる可能性があると考えられる。

２　遺構について

土器の検討により、今回調査された住居跡の内ＳＩ６・14・15・21・40・50は奈良時代後半頃のものと考えられ、その中のＳＩ６については８世紀後半でも、やや新しい時期に廃絶したと考えられた。土器様相からみるとＳＩ21・40もＳＩ６とほぼ同時期の住居跡であり、ＳＩ14・15・50はそれらよりも若干古い時期のものと考えられる。その他のＳＩ16・35・36については出土遺物が乏しいため厳密な比較は出来ないが、出土遺物に大きな差異は認められず、概ね奈良時代後半頃のものと考えられる。ＳＩ26は煙道部分のみの調査であり、ＳＩ55・57は床面の大部分が削平により失われていることから、時期は不明である。

①大型住居跡について

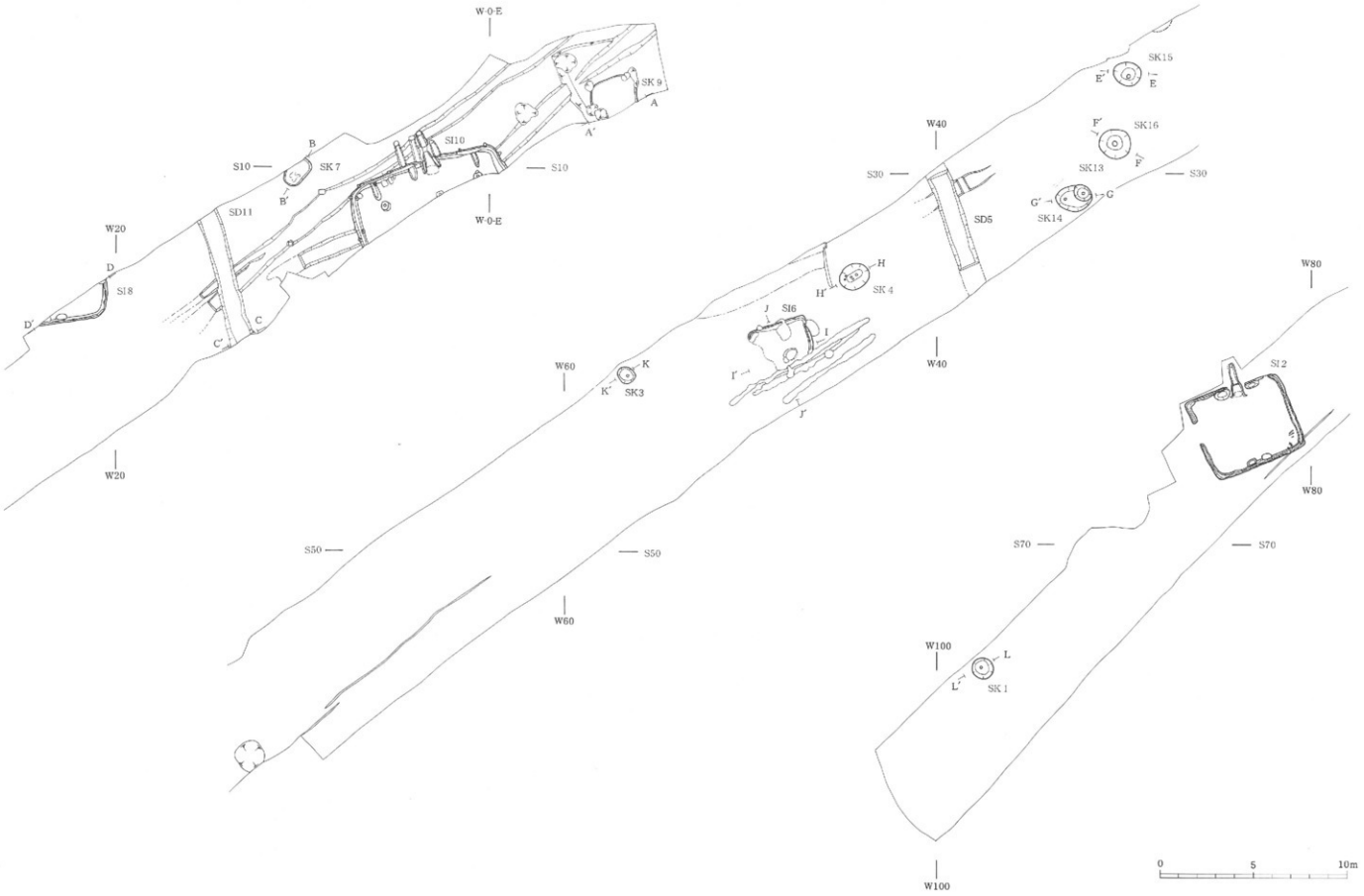
今回調査されたＳＩ６・40ｂ住居跡は一辺10m前後の規模の大きなものである。こうした大型住居跡の類例は古墳時代に多く、古墳時代前期の蔵王町大橋遺跡(太田:1980)や後期の山元町合戦原遺跡(岩見:1991)において一辺10m以上の住居跡が確認されている。古代の住居跡としては田尻町新田柵跡推定地（三好：1998）第201号住居跡(9.1m×7.0m以上)、志波姫町糠塚遺跡（小井川・手塚：1978）第２号住居跡(8.1m×8.3m)、27号住居跡(8.7m×7.2m)が比較的大きいものの、ＳＩ６・40ｂ住居跡は同時期のものとしては県内でも最大規模のものと言えよう。(註１)

住居内にはカマド・貯蔵穴があり、出土遺物も土器や紡錘車、砥石などがあるのみで、何らかの作業をする為の工房や倉庫といった特殊な使用目的を持った施設とは考えにくい。また、本遺跡における他の住居跡の規模は、ＳＩ15ｂの一辺6.4mが最も大きく、土器様相からほぼ同時期と考えられるＳＩ21は一辺６.0mである。このようにＳＩ６・40は突出した規模を誇っており、こうした広範囲なスペースを日常生活に占拠できたのは、集落内のある限られた人々であろうことは少なからず推測されるものである。但し、この２つの住居跡は約１km程離れた場所にあって、土器様相からほぼ同時期に存在していたと考えられることから、集落内の首長的な権力者の住居といった性格のものとは考えにくく、今回調査されなかった集落全体を含めると、他に数軒の大型住居跡の存在が推測されるものである。

註１：新田柵跡推定地第201号住居跡については確認のみの調査であり、詳細な年代は不明である。しかし、堆積上上位で灰白色火山灰が堆積しており、住居跡はそれ以前に機能していたとされている。

②集落の構成について

今回確認された住居跡12軒は、距離約1.5km、幅約15mの細長い調査区内に２・３軒のまとまりを持ち、約200m前後の間隔をあけて点在して確認された。住居跡相互の重複関係が認められるものはＳＩ15とＳＩ16、ＳＩ35とＳＩ36の２例のみである。これらはＳＩ15とＳＩ36の各外周溝がそれぞれＳＩ16・35と重複するもので、ＳＩ15・35が古く、ＳＩ16・36がそれぞれ新しい。したがって、発見された住居跡12軒は必ずしも同時期にこれらのすべてが存在したものではない。また、今回の調査は道路の拡幅工事に伴う調査の為、集落の面的な広がりを把握することは困難である。しかし、ＳＩ６・21・40ｂのようにほぼ同時期に存在したと考えられる住居跡も認められることや、上記のような遺構の確認状況からみて本遺跡はＳＩ６・40ｂのような大型住居跡を中心に、数軒ずつの小規模なまとまりを持つ住居跡群が点在する形で集落が構成されていたことが想定されるものである。



第40図　観音沢遺跡遺構全体図

第Ⅲ章　観音沢遺跡

A　調査に至る経緯と調査の方法

今回の調査は町道経ヶ崎－台町線の改良拡幅工事に伴うものである。工事は平成８年に計画された。町道経ヶ崎－台町線は周知の遺跡である観音沢遺跡の範囲内であることから高清水町と宮城県教育庁文化財保護課とが対応について協議を行い、平成９年９月に遺構の存在の有無や遺跡の広がりを把握する為、確認調査を行った。

工事計画区域の東端に任意にトレンチを設定し、重機による表土の除去を行った結果、竪穴住居跡の存在が確認され、周辺の地形などから工事対象範囲の全域について遺構の存在が予想された。そこで、再度各事業者と取り扱いの協議を行ったが現状保存は難しく、工事に先立ち、現道と拡幅部分合わせて約830㎡を対象に発掘調査を実施することとなった。

発掘調査は７月１日～21日にかけて実施した。その方法と経過は以下の通りである。

調査は迂回道路を設定し、現道および道路拡幅部分を一括して調査した。重機による表土の除去後、地山面で遺構確認を行い、竪穴住居跡、溝跡、土壙などが検出された。遺構精査に際しては、任意の調査原点を調査区東端に設け、南北軸を座標北に合わせて組んだ直角座標をもとに３m単位のグリットを設定し、調査の状況に応じて、20分の１の平面図・断面図を作成した。原点の国家座標はＸ＝－150554.711　Ｙ＝15486.949である。また、35㎜カラースライド・白黒および60㎜のカラー・白黒写真による記録も合わせて行った。７月21日にすべての調査を終了した。

B　発見された遺構と遺物

今回の調査では竪穴住居跡４軒の他、溝跡１条、土壙９基が検出された。遺物は土師器を中心に須恵器や、極少量の縄文土器などが出土している。

1　竪穴住居跡

【ＳＩ10住居跡】

[重複]　重複は認められなかった。

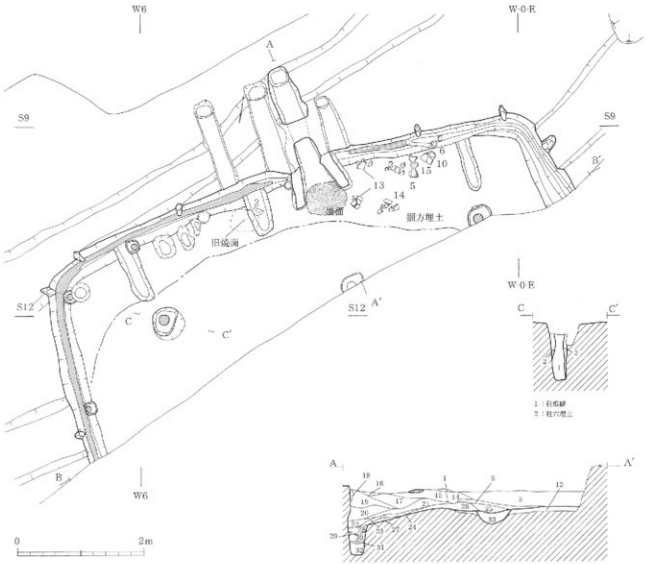
[規模・平面形]　一辺8.3mの隅丸方形と考えられるが、南東側は調査区外に延びており、詳細は不明である。

[堆積土]　暗・黒褐色の自然堆積のシルト層等で、第２層には灰白色火山灰の堆積が認められる。

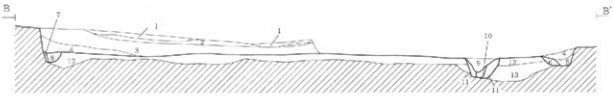
[床面]　暗・黒褐色シルトを含む明黄褐色粘土の掘り方埋土を床面としており、ほぼ平坦で中央部は堅くしまっている。

[壁]　最も残りの良い部分で高さ40cm程が残存し、ほぼ直立する。

[主柱穴]　２ヶ所検出し、どちらにも柱を抜き取った痕跡が認められた。掘り方は一辺40cm前後の不整形で、深さは35cm・90cmとばらつきがある。柱痕跡は直径約18cmの円形である。柱間寸法は約5.2mである。



No.	土色	土性	備考	No.	土色	土性	備考
1	黒褐 10YR2/2	シルト	[自然流入土]	9	黒褐 10YR2/2	シルト	[主柱穴抜取穴]
2	灰白色火山灰層		[自然流入土]	10	暗褐 10YR3/3	シルト	[主柱穴柱痕跡] 地山砕含
3	黒褐 10YR2/3	シルト	[自然流入土] 地土粉少量含	11	明黄褐 10YR6/8	粘土	[主柱穴埋土] 暗褐シルト少量含
4	暗褐 10YR3/3	シルト	[自然流入土] 地土粉含	12	明黄褐 10YR6/8	粘土	[掘り方埋土] 暗褐 黒褐シルト少量含
5	暗褐 10YR3/3	シルト	[焼き取り] 地山ブロック含	13	暗褐 10YR3/3	シルト	[掘り方埋土] 黒褐シルト地山ブロック
6	暗褐 10YR3/3	シルト	[湧盛埋土] 地山ブロック多量含	14	灰黄 2.5Y7/2	粘土	[天井崩落土] 灰褐色粘土含
7	黒褐 10YR2/2	シルト	焼き痕跡	15	暗褐 10YR3/3	シルト	[カマド内埋土] 地土粒 地山粒多量含
8	暗褐 10YR3/3	シルト	[湧盛埋土] 地山ブロック多量含	16	灰黄 2.5Y6/2	粘土質シルト	[カマド内埋土] 粘土粒 暗褐シルト粒含



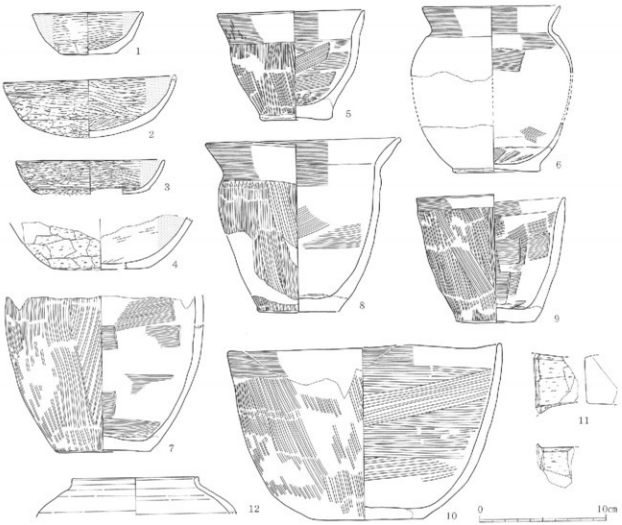
No.	土色	土性	備考	No.	土色	土性	備考
17	黒褐 10YR2/2	シルト	[カマド内埋土] 粘土粒 黄褐シルトブロック含	26	黒褐 7.5YR3/2	シルト	[カマド内埋土] 粘土 灰粒 多少含
18	黒褐 10YR2/2	シルト	[カマド内埋土] 粘土粒 黄褐シルトブロック含	27	黒褐 10YR3/6		[カマド内埋土] 黒褐シルト粒含
19	灰黄 2.5Y6/2	粘土粒シルト	[カマド内埋土] 粘土粒 黄褐シルトブロック含	28	黒褐 10YR2/2	シルト	[カマド内埋土] 粘土粒少量含
20	黒褐 10YR2/2	シルト	[カマド内埋土] 粘土粒 黄褐シルト粒多量含	29	灰黄 2.5Y6/2	粘土質シルト	[カマド内埋土] 粘土粒少量含
21	黒褐 10YR2/2	シルト	[カマド内埋土] 黄褐シルトブロック 多量含	30	黒褐 10YR2/2	シルト	[カマド内埋土]
22	灰黄 2.5Y6/2	粘土質シルト	[カマド内埋土] 焼土ブロック多量に混る	31	灰黄 2.5Y6/2	粘土質シルト	[カマド内埋土] 粘土粒少量含
23	黒灰 7.5Y4/1	シルト	[カマド内埋土] 粘土粒 黄褐シルト粒多量含	32	黒褐 10YR2/2	シルト	[カマド内埋土] 粘土粒少量含
24	暗褐 10YR3/3	シルト	[カマド内埋土] 粘土粒 黄褐シルト粒多量含	33	黒褐 10YR2/2	シルト	[カマド内埋土] 地山粒多量含 上面粒が下がる
25	黒褐 7.5YR3/2	シルト	[カマド内埋土] 粘土粒 黄褐シルト粒多量含				

第41図　ＳＩ10住居跡

［壁柱穴］北西隅の周溝上面で３個のピットが検出された。掘り方の平面形は一辺20cm前後の隅丸方形を呈し、深さ14～25cmである。柱痕跡は直径10cm前後の円形である。

［その他のピット］壁際からやや張り出すような位置で、打ち込み杭と考えられる痕跡が７ヶ所検出された。0.7～2.3mの間隔で配されており、直径８cm前後の円形で、深さは８～17cmである。

［カマド］北辺のほぼ中央部に付設されており、少しずつ場所をずらしながら３度の移築がなされている。本体は灰黄色粘土を積み上げて構築されており、幅約60cm、側壁は長さ65cmで内側には燃焼室の焼面が残存する。煙道は幅35～45cmで奥壁に向かって傾斜しており、深さは30～50cmである。先端は一辺30cmの隅丸方形を呈するピット状となっている。堆積土は地山や焼土粒を含む、自然堆積の暗・黒褐色シルト等である。また、古い方の煙道は長さ90～150cm、幅30～36cm、深さ約５～28cmである。先端は一辺20～35cmの隅丸方形を呈するピット状となっている。堆積土は地山や焼土ブロックを含む黒褐色シル



No.	種類	出土層位	残存	No.	種類	出土層位	残存	No.	種類	出土層位	残存	備考
1	土師器・所	床面直上	2/5	5	土師器・裏	床　面	¼定D	9	土師器・裏	堆積D層土	4/5	
2	土師器・所	床　面	4/5	6	土師器・裏	床　面	1/2	10	土師器・所	床　面	4/5	
3	土師器・所	掘り方埋土	1/6	7	土師器・裏	カマド底面	1/2	11	土師器	堆積土３層	一部	紀手？
4	土師器・裏	堆積A層土	一部	8	土師器・裏	カマド底面	4/5	12	黒褐器・裏	堆積土１層	一部	

第42図　ＳＩ10住居跡出土遺物（１）

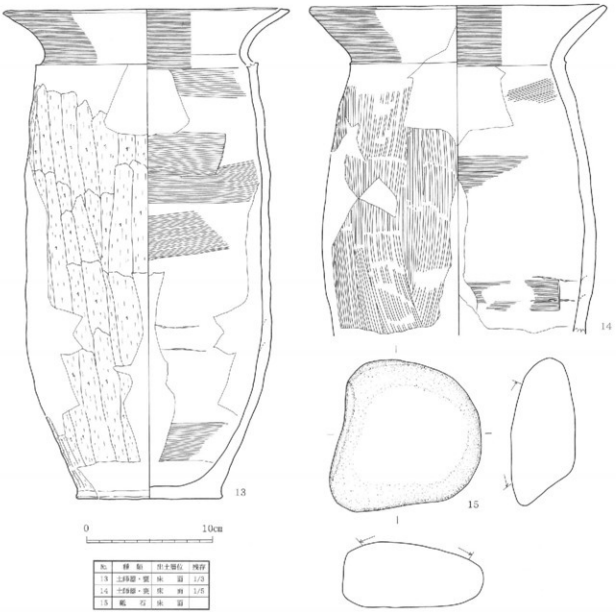
ト等で人為的に埋め戻されている。

[周溝] 調査範囲内の全辺で確認された。幅20～30cm、深さ約15cmで、溝は埋め戻されており、壁側に沿って壁材の痕跡と思われる幅５～12cm、深さ約15cmの黒褐色シルトの堆積土が認められる。また、北西隅付近では抜き取りの痕跡も認められた。

[貯蔵穴] 検出されなかった。

[出土遺物] 非ロクロ調整の土師器坏・椀・鉢・甕・器種不明の把手、須恵器坏蓋・甕・短頸壺、縄文土器、砥石が出土している。

土師器坏には平底(１)と、丸底のもの(２・３)があり、後者には外面に軽い稜を有するもの(２)、段を有するもの(３)とがある。椀は平底で底部から口縁部にかけて内湾して立ち上がっている(４)。鉢は体部



No.	種 別	出土場所	残存
13	土師器・甕	床	1/3
14	土師器・甕	床	1/6
15	砥 石	床	

第43図　ＳＩ10住居跡出土遺物（２）

下半が内湾、上半は直線的に外傾して立ち上がっている(10)。甕は鉢形を呈するもの(5・8・9)、長胴形を呈するもの(13・14)、球胴形を呈するもの(6)とがある。長胴形を呈するものは胴部と口縁部の境に段を有し、胴部の張りが弱く円筒形に近い形のものである。器面調整は、坏や椀は1が内外面ヘラミガキ後、黒色処理、2～4は外面ヘラケズリ、内面ヘラミガキ後、黒色処理で、2・3の外面には更にヘラミガキがなされている。鉢や甕は口縁部はヨコナデで、胴部外面は13のみヘラケズリで、他はハケメである。6は磨滅により不明である。内面は9はハケメ後、ヘラナデ、10はハケメで、他はヘラナデである。6の底面には木葉痕が認められる。

須恵器短頸壺は肩部に張りを有するもので、口縁端部は斜めに面取りがなされている(12)。

【ＳＩ2住居跡】

[重複] 重複は認められなかった。

[規模・平面形] 東西5.2m、南北4.5mの隅丸長方形である。

[堆積土] にぶい黄褐色シルトを含む明黄褐色シルト質粘土で人為的に埋め戻されている。

[床面] 黒褐色シルトブロック等を含む明黄褐色シルト質粘土の掘り方埋土を床面としており、南東隅の床面上には炭化材や焼土が分布している。

[壁] 最も残りの良い部分で高さ5cm程が残存し、ほぼ直立する。

[主柱穴] 検出されなかった。

[カマド] 北辺の中央部に付設されており、削平により地山の基部のみが残存する。幅約50cm、側壁は長さ約70cmで内側には燃焼室の焼面が残存する。煙道は幅30～40cmで奥壁に向かって傾斜しており、深さは3～15cmである。先端は16×24cmの隅丸長方形を呈するピット状となっている。堆積土は地山や焼土、炭化物粒を含む、自然堆積のにぶい黄褐色や黄橙色等のシルト質粘土である。

[周溝] 全辺で確認された。幅12～26cm、深さは9～20cm程で、溝は埋め戻されており、所々途切れるものの壁側に沿って壁材の痕跡と思われる幅3～8cm、深さ6cm前後の黒色シルトの堆積土が認められる。

[貯蔵穴] カマドの両脇に2ヶ所検出した。西脇のものは長径80cm、短径50cm、ほぼ楕円形を呈しており、深さは9cm程である。東脇のものは長辺72cm、短辺34cmの隅丸長方形で、深さは8cm程である。

[その他のピット] 南辺ほぼ中央部に2ヶ所検出した(P.1、P.2)。ともに長辺約50cm、短辺約30cmの隅丸方形で深さは16～21cmである。壁はほぼ直立し、P.1の西壁はオーバーハング気味に立ち上がっている。

[出土遺物] 非ロクロ調整の土師器甕が少量出土している。

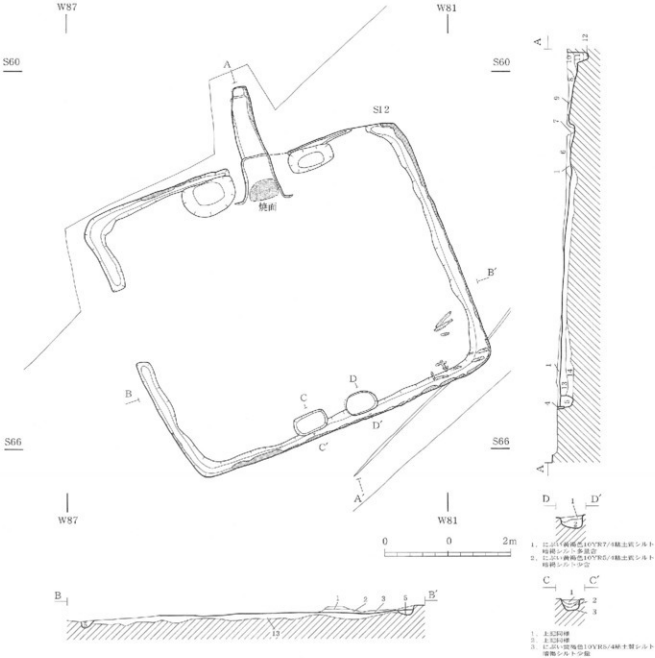
【ＳＩ8住居跡】

[重複] 重複は認められなかった。

[規模・平面形] 南東隅が調査区内にかかったもので、規模等は不明である。

[堆積土] 黒褐色の自然堆積のシルト層等で第2・3層には灰白色火山灰の堆積が認められる。

[床面] 黒色シルトを含む黄褐色粘土の掘り方埋土を床面としており、ほぼ平坦で中央部堅くしまっている。



No.	土色	土性	備考	No.	土色	土性	備考
1	明黄褐 10YR7/6	シルト質粘土	[自然流入土] 地山粒含	8	灰黄褐 10YR4/2	シルト	[建築内堆積土] 地山 粒土 木炭 多量含
2	黒褐 10YR3/1	シルト	[自然流入土] 地山粒含	9	にぶい黄褐 10YR5/3	シルト質粘土	[建築内堆積土] 地山 粒土 多量含
3	にぶい黄橙 10YR7/4	シルト質粘土	[自然流入土] 暗褐色シルト含	10	にぶい黄橙 10YR6/4	シルト質粘土	[建築内堆積土] 地山粒含
4	黒褐 10YR6/6	シルト質粘土	[柱材痕跡] 木炭 焼土粒含	11	灰黄 7.5Y4/2	シルト質粘土	[建築内堆積土] 焼土 木炭 粒多量含
5	明黄褐 10YR6/6	シルト質粘土	[周溝埋土] 地山 黒褐色シルトブロック含	12	黒褐 7.5Y3/1	シルト質粘土	[建築内堆積土] 地土 木炭 粒多量含
6	褐 7.5YR4/3	シルト	[カマド内堆積土] 焼土粒	13	明黄褐 10YR6/8	シルト質粘土	[掘り方埋土] 黒褐色シルトブロック少量含
7	にぶい褐 YR5/4	シルト質粘土	[カマド内堆積土]	14	明黄褐 10YR6/8	シルト質粘土	[掘り方埋土] 地山 黒褐色シルトブロック多量含

第44図　ＳＩ２住居跡

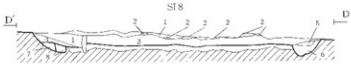
［壁］最も残りの良い部分で高さ８cm程が残存し、ほぼ直立する。

［主柱穴・カマド・貯蔵穴］検出されなかった。

［周溝］調査範囲内の全辺で確認された。幅約20cm、深さ６～８cmで、溝は埋め戻されており、壁側に沿って壁材の痕跡と思われる幅５～８cm、深さ５cm前後の黒褐色シルトの堆積土が認められる。

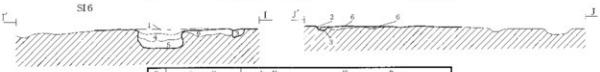
［出土遺物］遺物は出土していない

SI 8



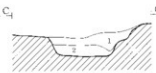
No.	土色	土性	備考
1	黒 10YR2/1	シルト	[自然流入土] 灰白色火山灰粒含
2	灰白色火山灰層	シルト	[自然流入土]
3	黒褐 10YR3/2	シルト	[自然流入土] 地山粒 炭土粒多量 炭化粒少量含
4	黒褐 10YR3/2	シルト	[自然流入土] 地山粒多量含
5	黒褐 10YR3/2	シルト	[掘き取り] 地山粒 多量含
6	黒褐 10YR3/2	シルト	[掘き取り] 地山粒少量含
7	黒褐 10YR3/2	シルト	[壁材崩落] 地山粒 多量含
8	黒褐 10YR5/5	シルト	[両側壁土] 地山土体に土色粒 多量含

SI6



No.	土色	土性	備考
1	にぶい黄褐 10YR4/3	砂質シルト	[自然流入土] 地山粒 炭粒少量含
2	黒褐 10YR3/3	シルト	[壁材崩落] 暗小地山粒含
3	にぶい黄褐 10YR5/3	シルト質粘土	[黒褐塩土] 地山粒多量含
4	にぶい黄橙 10YR6/4	シルト質粘土	[貯蔵穴堆積土] 暗褐色シルトと混合
5	灰黄褐 10YR4/2	シルト質粘土	[貯蔵穴堆積土] 地山粒と混合
6	明黄褐 10YR6/6	シルト質粘土	[調り方壁土] 暗褐色シルト粒 砂粒含

SD11

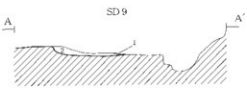


No.	土色	土性	備考
1	黒褐 10YR2/2	シルト	粘土 地山粒 少量含
2	黒褐 10YR2/2	シルト	地山粒 多量含

SK 7

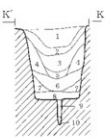
No.	土色	土性	備考
1	黒褐 10YR2/2	シルト	粘土 灰 地山 暗粒少量含
2	黒褐 10YR2/3	シルト	灰 地山 細粒多量含
3	暗褐 10YR3/4	シルト	地山 細粒多量含
4	黒褐 10YR2/3	シルト	粘土 炭 多量含
5	黒褐 10YR2/3	シルト	炭粒 地山粒少量含

SD 9

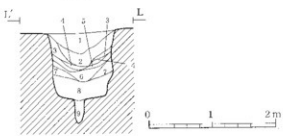


No.	土色	土性	備考
1	灰白 2.5Y8/2		灰白色火山灰
2	黒褐 10YR3/1	シルト	地山ブロック含

SK 3



SK 1



No.	土色	土性	備考
1	黒褐 10YR2/2	シルト	地山粒少量含
2	黒褐 10YR2/2	シルト	地山粒多量含
3	暗褐 10YR3/3	シルト	地山粒多量含
4	黒褐 10YR3/3	シルト	暗褐色シルト多量含
5	暗褐 10YR3/3	シルト	暗褐色シルト黒色シルト多量含
6	暗褐 10YR3/3	シルト	地山粒多量含
7	灰黄 2.5Y7/3	粘土	
8	黒褐 2.5Y3/2	シルト	地山粒多量含
9	にぶい黄褐 10YR4/3	シルト	
10	灰白 2.5Y8/1	粘土	灰白色火山灰

No.	土色	土性	備考
1	黒褐 10YR2/3	シルト	地山粒 砂 少量含
2	黒褐 10YR2/2	シルト	地山粒少量含
3	黄褐 10YR5/6	砂質シルト	黒褐シルト少量含
4	黒褐 10YR2/3	シルト	地山粒 砂 少量含
5	黒褐 10YR5/6	粘質シルト	黒褐シルト少量含
6	黒褐 10YR2/3	シルト	地山粒 砂 少量含
7	黄褐 10YR5/6	粘質シルト	黒褐シルト少量含
8	にぶい黄褐 10YR4/3	砂質シルト	黒褐色地山粒少量含
9	にぶい黄褐 YR6/3	砂質シルト	地山粒多量含

第45図　ＳＩ６・８住居跡断面図　土壙断面図（１）

【ＳＩ６住居跡】

削平により北・東辺の周溝と床面の一部が残存するのみである。

[規模・平面形] 東西約3.2mの隅丸方形と考えられる。南北の規模については削平により不明である。

[床面] 暗褐色シルトを含む明黄褐色シルト質粘土の掘り方埋土を床面としており、ほぼ平坦で中央部は堅くしまっている。

[カマド・主柱穴] 検出されていない。

[周溝] 幅約20cm、深さ５cm程が残存している。溝は埋め戻されており、壁側に沿って一部に壁材の痕跡と思われる幅、深さ約５cmの暗褐色シルトの堆積土が認められる。

[焼け面] 住居のほぼ中央部と推定される場所に１ヶ所、その南側に焼け面そのものは残存しないものの、２ヶ所受熱により地山が赤色に変化した部分を検出した。範囲は中央部の焼け面が最も大きく長径70cm、短径60cmの楕円形を呈しており、南側の２ヶ所は径40～60cmの不整円形を呈している。

[土壙] 中央部の焼け面の南東端を切るような状態で長径80cm、短径55cm、深さ30cmの楕円形の土壙を検出した。堆積土は人為的に埋め戻されたにぶい黄橙色や灰黄褐色のシルト質粘土で、壁は急に立ち上がっており、南東側はややオーバーハング気味に立ち上がっている。底面はほぼ平坦である。

[出土遺物] 非ロクロ調整の土師器甕が出土している。無底式で器面調整は内外面ハケメである。

第46図　ＳＩ６住居跡出土遺物

2　溝跡

【ＳＤ11溝跡】

北から南に傾斜する溝跡である。検出長は約6.9mで、南北両側は調査区外に延びている。上幅70～150cm、下幅40～100cm、深さ47cmである。堆積土は焼土粒や地山ブロックを含む自然堆積の黒褐色シルトである。遺物は非ロクロ調整の土師器甕、須恵器甕が極少量出土している。

3　土壙

９基検出された。ＳＫ７・９を除く７基は底面に１～４個のピットを有するもので、陥し穴と考えられる。これらは円形で１個のピットを有するもの(ＳＫ１・３・13)と、楕円形で１～４個のピットを有するもの(ＳＫ４・14～16)とに分けられる。以下、それぞれについて説明する。

【ＳＫ９土壙】

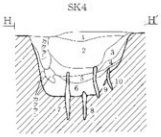
東西約2.5m、南北2.0m以上、深さ16cmの隅丸方形を呈すると考えられる土壙である。南側は調査区外に延びる。底面は比較的平坦で、壁は緩やかに立ち上がっている。堆積土は地山ブロックを含む自然堆積の黒褐色シルトで、上面にはかすかに灰白色火山灰も認められる。遺物は非ロクロ調整の土師器坏・甕、須恵器坏・甕が少量出土している。

【ＳＫ７土壙】

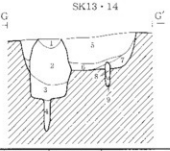
長辺1.6m、短辺約1.1mの隅丸長方形の土壙である。深さは約15cmで、堆積土は自然堆積の黒褐色シルトであり、南西側の底面には炭や焼土が厚く堆積しており、底面や側壁は熱を受けて赤変し硬化している。壁は北東側は急に、南西側は緩やかに立ち上がっている。底面はほぼ平坦である。遺物は非ロクロ調整の土師器坏・甕が少量出土している。

【ＳＫ１・３・13土壙】

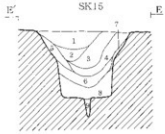
直径1.0m前後、深さ1.0～1.2mの円形の土壙である。底面は比較的平坦で、壁は底面からほぼ垂直に立ち上がっている。また、底面には直径８～15cm、深さ40～52cmの円形のピットが１個所認められる。堆積土は地山粒を含む自然堆積の暗・黒褐色シルトやにぶい黄褐色砂質シルト等である。遺物は出土していない。



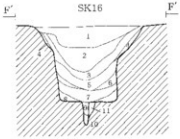
No.	土色	土性	備考
1	黒褐 10YR3/1	シルト	
2	暗褐 10YR3/4	シルト	地山粒含
3	黒褐 10YR3/1	シルト	地山粒多量含
4	暗褐 10YR3/4	シルト	地山粒含
5	にぶい黒褐 10YR5/3	粘質シルト	黒褐シルトブロック少量含
6	黄褐 10YR5/6	砂質シルト	黒褐シルト含
7	黒灰 10YR4/1	シルト	
8	褐灰 10YR4/12	シルト	
9	黒灰 10YR4/1	シルト	
10	褐灰 10YR4/1	シルト	



No.	土色	土性	備考
1	暗褐 10YR3/3	砂質シルト	
2	黒褐 10YR2/2	シルト	地山粒多含
3	黒褐 10YR2/2	シルト	地山粒 灰白粘土ブロック含
4	黒褐 10YR2/3	シルト	地山粒多含
5	黒 10YR 2/1	シルト	地山粒粒少量含
6	黒褐 10YR 2/2	シルト	
7	にぶい黄褐 10YR4/3	砂質シルト	地山ブロック 多含
8	黒褐 10YR 3/2	砂質シルト	正さ未確認
9	にぶい黄褐 10YR 3/4	粘土	



No.	土色	土性	備考
1	黒褐 10YR2/2	シルト	
2	黒褐 10YR2/2	シルト	地山粒少量含
3	暗褐 10YR2/3	シルト	地山粒多量含
4	黒褐 10YR2/2	シルト	地山粒多量含
5	黒 10YR2/1シルト		
6	暗褐 10YR3/3	シルト	地山粒多量含
7	黄褐 10YR5/8	シルト	地黒色シルト含
8	暗褐 10YR3/3	粘土	地山ブロック多量含
9	黒褐 10YR3/2	シルト	地山粒多含



No.	土色	土性	備考
1	黒褐 10YR2/2	シルト	
2	黒褐 10YR3/2	シルト	地山粒多量含
3	黒 10YR2/1	シルト	黒褐シルト含
4	にぶい黄褐 10YR4/3	粘質シルト	地山ブロック多量含
5	暗褐 10YR3/4	シルト	地山粒多量含
6	黒褐 10YR3/3	シルト	
7	黒褐 10YR3/4	シルト	地山粒少量含
8	暗褐 10YR3/4	シルト	地山粒多量含
9	暗褐 10YR3/3	シルト	地山粒少量含
10	黒褐 10YR 2/2	シルト	
11	黒褐 10YR3/3	シルト	地山粒ブロック多含

第47図　土壙断面図（２）

【ＳＫ４・14～16土壙】

長径1.5～1.9m、短径1.3～1.5m、深さ0.6～1.2mの楕円形の土壙である。底面は比較的平坦で、壁は底面からほぼ垂直に立ち上がっており、ＳＫ15・16は上部でやや開き気味となっている。ＳＫ14～16の底面には直径８～12cm、深さ30～38cmの円形のピットが１個所認められる。また、ＳＫ４の底面には直径４～８cm、深さ８～37cmの円形のピットが４個所認められ、ＳＫ４・14の断面観察では上部への立ち上がりも認められる。堆積土は地山粒を含む自然堆積の暗・黒褐色シルト等である。遺物は出土していない。

その他の出土遺物：ＳＩ10堆積土や現道とほぼ平行する近代の道路側溝と考えられる溝跡から縄文土器が数片出土している。

2・3：結束羽状縄文（LR・RL）

第48図　その他の遺物（縄文土器）

C　考察

1　遺物の年代

土器がまとまって出土しているのはＳＩ10のみであり、ここではＳＩ10出土土器の特徴と年代について検討する。

【ＳＩ10出土土器の特徴】

住居に伴うと考えられる遺物は、床面やカマド底面、煙道埋土から出土した土師器坏２点、甕７点、鉢１点である。坏は平底で、底部から内湾気味に立ち上がり、口縁部で直線的に外傾して立ち上がっているもの(１)と、丸底で外面に稜が付き、稜から上が内湾するもの(２)がある。調整は１が内外面ヘラミガキ後、黒色処理、２が外面ヘラケズリ後、ヘラミガキ、内面はヘラミガキ後、黒色処理されている。甕は小形で鉢形を呈するもの(５・８・９)と球胴形を呈するもの(６)、大形で長胴形を呈するもの(13・14)がある。また、底部に木葉痕を残すものもある(６・13)。長胴形の甕は胴部の張りが弱く、ほぼ直線的な円筒形を呈している。頸部外面に段を有し、口縁部は強く外反する。口縁端部は隅丸方形のもの(14)と、上面を強くナデつけて平坦に仕上げるもの(13)とがある。調整は口縁部ヨコナデで、胴部は外面ハケメ調整が多く、他にヘラケズリされるものもある。内面はヘラナデである。鉢は平底で底部から内湾気味に立ち上がり、体部から口縁部にかけてはほぼ直線的に外傾して立ち上がっている(10)。調整は口縁部ヨコナデ、体部内外面ハケメである。

【年代】

観音沢遺跡は以前にも宮城県教育委員会によって調査されており、８世紀前半頃の土師器の良好な資

料が発見されている(加藤・阿部:1980)。これらとＳＩ10出土土器を比較してみると、長胴形を呈する土師器甕の口縁端部のつくり出しや胴部の器形、ハケメが主となる調整技法などには共通する点が数多く認められる。土師器坏は前回のものが外面に段や沈線が付き、ヨコナデとヘラケズリ調整されるものが主体を占めるのに対し、ＳＩ10出土のものは掘り方埋土出土のものを除き、外面に段や沈線を有するものはなく、外面調整はいずれもヘラミガキされている点に違いが認められる。但し、今回は住居跡の一部を調査したのみであり、土器組成全体が捉えられているわけではない。また、少数ながら前回出土土器の中にも外面に段や沈線が付かないものやヘラミガキされるものもあるなど、ＳＩ10出土土器についても、概ね前回と同様の特徴を有する土器として捉えることが可能と考えられる。したがって、年代も前回と同様、８世紀前半頃に位置づけられるものと考えられる。

第Ⅳ章　ま と め

1．経ヶ崎・観音沢遺跡は奥羽山脈から東に派生する陸前丘陵の一部である築館丘陵の東端部に位置する。

2．調査の結果、経ヶ崎遺跡は従来、丘陵の東端にのみ確認されていた遺跡の範囲が西に大きく広がることが判明した。

3．今回の調査では、経ケ崎遺跡が竪穴住居跡12軒、溝跡８条、土壙18基、観音沢遺跡が竪穴住居跡４軒、溝跡１条、土壙９基などの遺構を検出した。

4．出土遺物は縄文土器、土師器、須恵器、砥石、近世の銭貨等が出土しており、経ヶ崎遺跡は奈良時代後半、観音沢遺跡は奈良時代前半頃の土師器が各々９割以上を占める。

5．竪穴住居跡や溝跡、土壙等で年代が判明するものは経ヶ崎遺跡が８世紀後半、観音沢遺跡は８世紀前半頃のものである。

6．経ヶ崎遺跡では発見された竪穴住居跡の内、外周溝を伴うものが５軒確認された。いずれも住居が立地する緩やかな南西斜面の住居上方を「コ」の字状に取り囲んでおり、幅34～98㎝、深さは10～56㎝で底面は一部を除き住居床面よりも低い。これらは主に住居内への雨水等の進入を防ぐためのものと考えられる。また、住居跡の中には、これらに接続する外延溝が掘られたものも２軒確認された。ともにカマドのある住居北辺の西隅から住居外に延びるもので、出口付近はトンネル状となっている。ＳＩ21の外延溝はカマド東脇からカマド前を通り住居外に延びており、出口天井部には白色粘土が貼られている。

7．経ヶ崎遺跡ＳＩ６・40ｂは一辺が10m前後の隅丸方形で、同時期のものとしては県内でも最大級の規模を呈する。

引用・参考文献抄録

阿部・赤沢　1983　「大境山遺跡」『瀬峰町文化財調査報告書』第4集瀬峰町教育委員会

氏家和典　1957　「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』第14輯東北史学会

氏家和典　1967　「陸奥国分寺跡出土の丸底坏をめぐって」『柏倉亮吉教授還暦記念論文集』

岡田・工藤・桑原・佐々木・遠藤　1970　「日の出山窯跡群」『宮城県文化財調査報告書』第22集　宮城県教育委員会

岡田茂弘・桑原滋郎　1974　「多賀城周辺における古代坏形土器の変遷」『研究紀要』宮城県多賀城跡調査研究所

加藤・伊藤　1955　「宮城県登米郡新田村字対馬竪穴住居址群」『登米郡新田村史』

加藤・阿部　1980　「観音沢遺跡」『東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅳ－宮城県文化財調査報告書』第72集

加藤道男　1989　「宮城県における土師器研究の現状」『考古学論叢Ⅱ』芹沢長介先生還暦記念論文集刊行会

加藤道男　1993　「宮城県の土器様相」『北日本における律令期の土器様相』古代城柵官衙遺跡検討会

菊地逸夫　1992　「伊治城跡」『平成3年度発掘調査概報－築館町文化財調査報告書』第5集

熊谷幹男　1980　「有賀峰遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅲ－宮城県文化財調査報告書』第67集

桑原滋郎　1976　「東北地方北部および北海道の所謂第1型式の土師器について」『考古学雑誌』第61巻4号

小井川・高橋　1977　「宮城県対馬遺跡出土の土器」『宮城史学』第5号

小井川・手塚　1978　「糠塚遺跡」『宮城県文化財調査略報(昭和52年度分)宮城県文化財調査報告書』第53集

小井川・小川　1982　「御駕堂遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅵ－宮城県文化財調査報告書』第83集

小村田達也　1992　「金鋳神遺跡」『金鋳神遺跡ほか－宮城県文化財調査報告書』第150集

斉藤・高橋・真山　1980　「宮沢遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅲ－宮城県文化財調査報告書』第69集

斉藤・後藤　1985　「古川市宮沢遺跡－化女沼ダム建設関係1」『宮城県文化財調査報告書』第105集

佐藤・手塚　1978　「天狗堂遺跡」『田尻町文化財調査報告書』第1集　田尻町教育委員会

辻秀人　1984　「宮城の横穴と須恵器」『宮城の研究1　考古学篇』

丹羽茂　1981　「清水遺跡－東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅴ」『宮城県文化財調査報告書』第77集　宮城県教育委員会・日本国有鉄道仙台新幹線工事局

古川一明　1983　「色麻古墳群」『昭和57年度宮城県営圃場整備等関連遺跡詳細分布調査報告書

古川一明　1984　「色麻古墳群」『昭和58年度宮城県営圃場整備等関連遺跡詳細分布調査報告書－宮城県文化財調査報告書』第100集

古川一明　1985　「色麻古墳群」『香ノ木遺跡・色麻古墳群－宮城県文化財調査報告書』第103集

古川一明　1987　「色麻古墳群の再検討」『北奥古代文化』第18号　北奥古代文化研究会

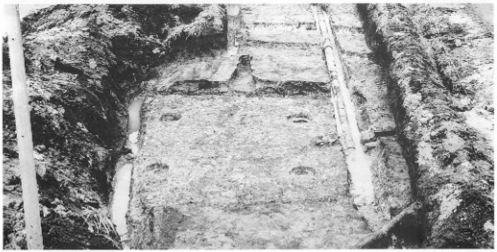
古川一明　1993　「日の出山窯跡群」『色麻町文化財調査報告書』第1集

三好秀樹　1998　「新田柵跡推定地」『田尻町文化財調査報告書』第3集

宮城県多賀城跡調査研究所　1978　「伊治城跡Ⅰ－昭和52年度発掘調査報告」『多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書』第3冊

写　真　図　版

遺跡遠景（南から）

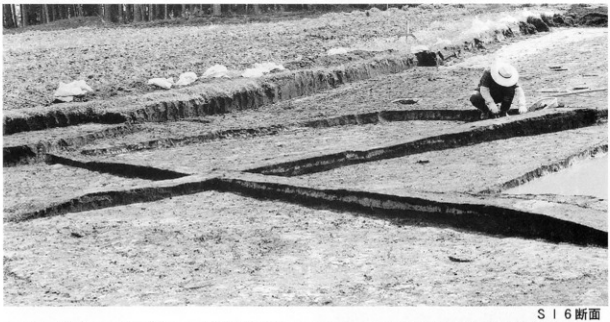


ＳＩ50

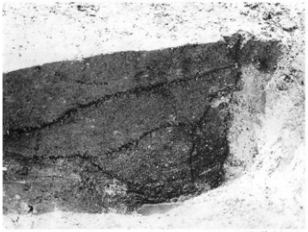
ＳＤ２・５断面

ＳＩ50カマド

ＳＩ６



ＳＩ６断面

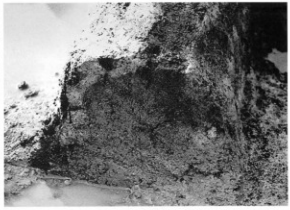


ＳＩ６周溝断面

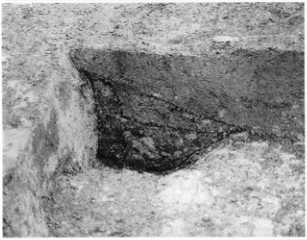
ＳＩ６主柱穴断面

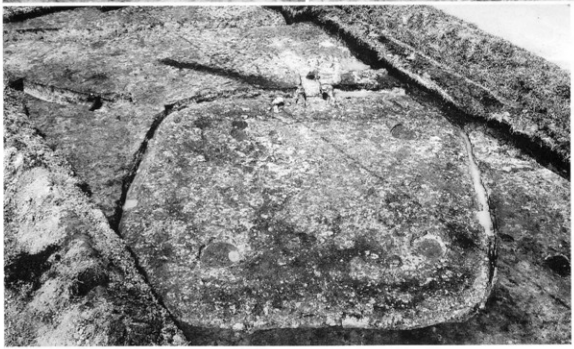
上　：Ｓ１６カマド
中・下：遺物出土状況

写真図版３（経ヶ崎）

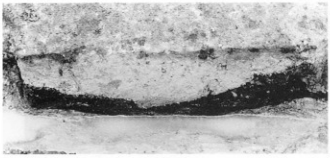


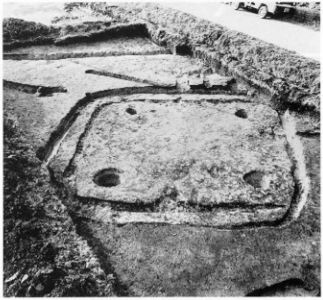
上左：ＳＩ14
上右：〃　カマド断面
中左：〃　周溝断面
中左：〃　主柱穴断面



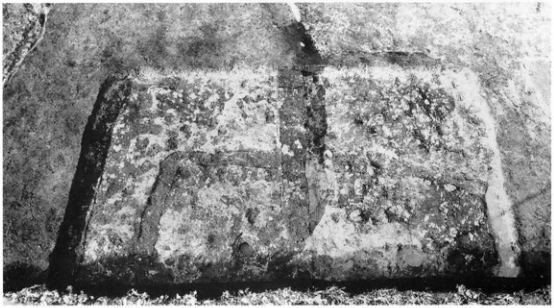


ＳＩ15

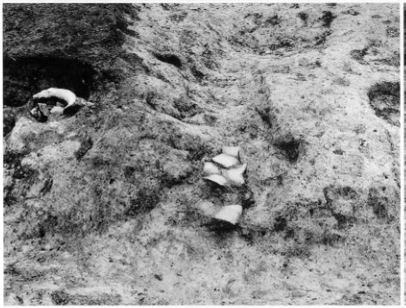




上：ＳＩ15ｂカマド
中左：〃　外延溝断面
中右：ＳＩ15ａ
下：ＳＩ16

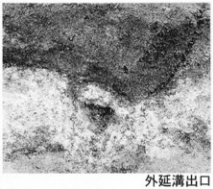


ＳＩ21



中左：ＳＩ21カマド
中右：　〃　外延溝

外延溝出口付近



外延溝出口

SI35・36

SI36 Pit3

SI36 Pit2

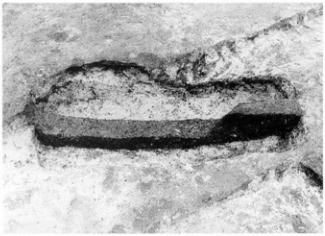
SI57

S I 40（道路拡幅部分）

S I 40 遺物出土状況

S I 40 カマド

S×52



S×58

第6図1

第6図3

第6図11

第6図12

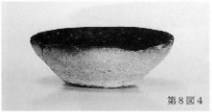
第6図13

第6図14

第8図1

第8図2

第8図3


第8図4

第8図5

第8図6

第8図7

第8図8

第8図9

第8図10

第8図11

第8図12

第8図14

第8図15

写真図版9（経ヶ崎）

第8図13

第8図16

第8図17

第8図18

第8図25

第8図26

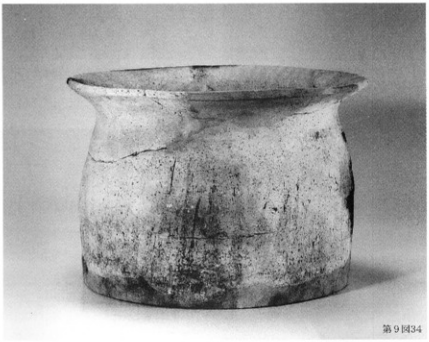
第8図28

第8図29

第8図30

第10図36

第９図31



第９図34

第10図37

第13図1

第13図2

第13図3

第13図4

第13図5

第13図7

第15図4

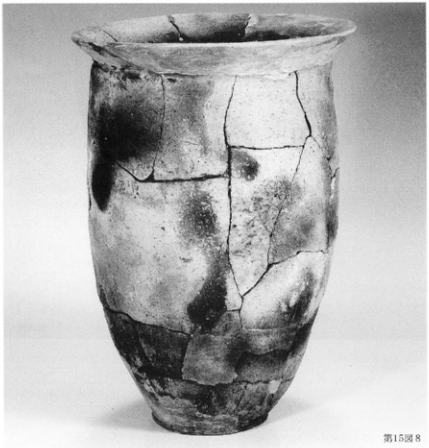
第15図1

第15図2

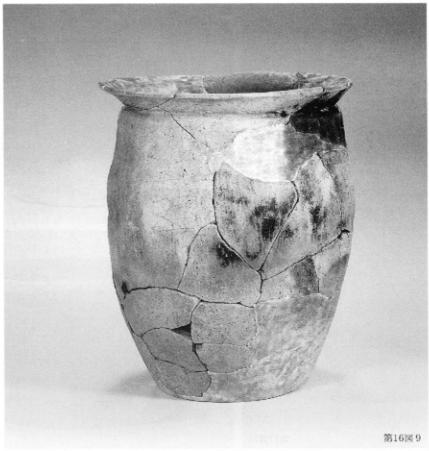
第16図10

第15図6

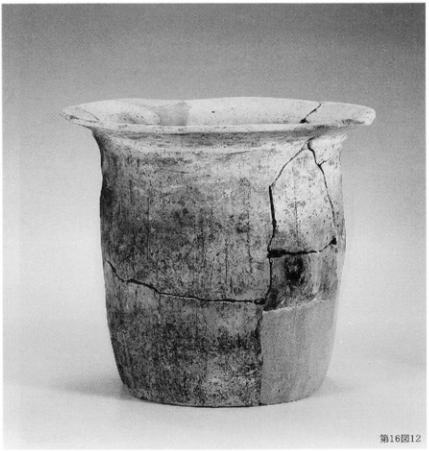
第15図7



第15図8



第16図9



第16図12

第17図15

第18図19

第18図21

第18図22

第19図1

第19図4

第19図5

第18図20

第22図1

第22図2

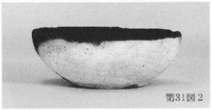
第22図3

第22図4

第26図2

第26図1

第31図1



第31図2

第31図3

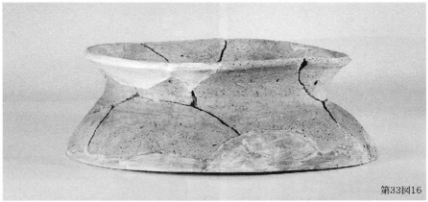
第31図4

第31図5

第31図8

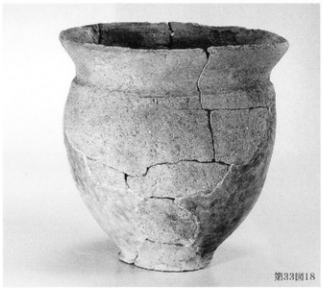
第31図11

第31図12



第33図16

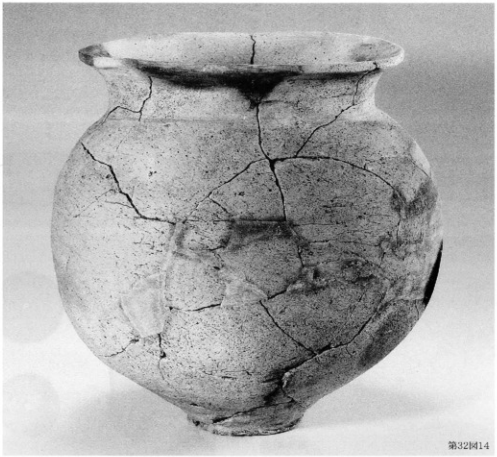
第31図13



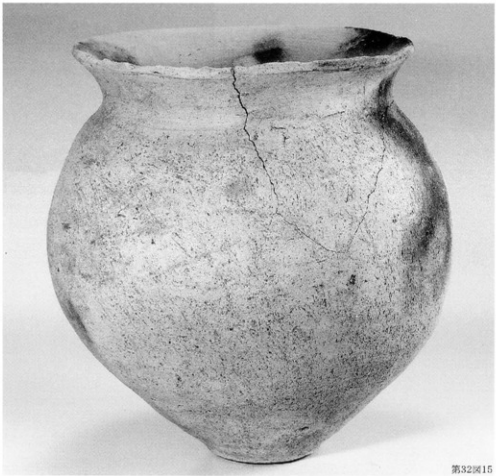
第33図18

第34図2

第34図3



第32図14



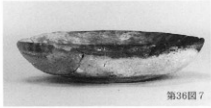
第32図15

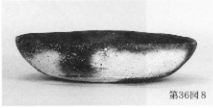
第36図1

第36図2

第36図4

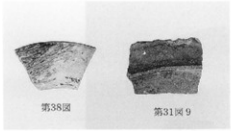
第36図6

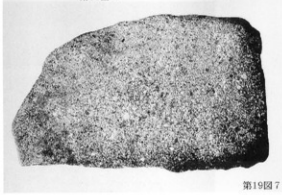

第36図7


第36図8

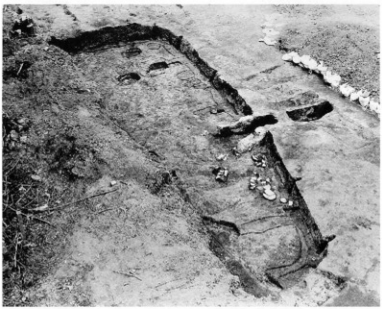
第36図12

第33図22
第33図21
第19図6


第38図
第31図9

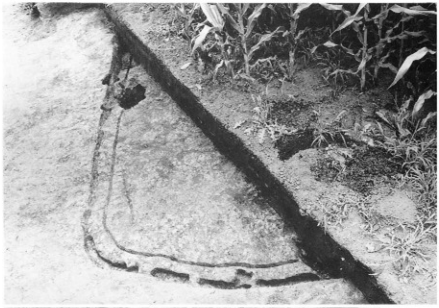

第19図7

調査区全景（東から）

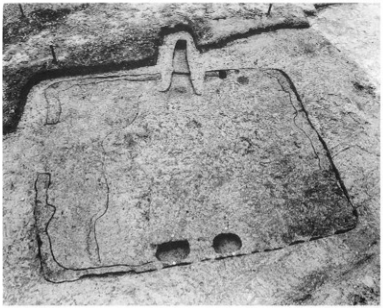


ＳＩ10

ＳＩ10　カマド

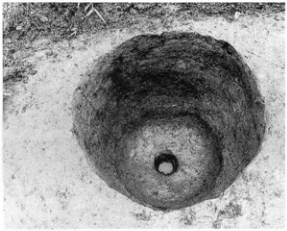


SI8

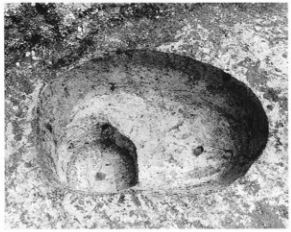


SI2

SK7



SK1



上左：ＳＫ３
上右：ＳＫ４
中左：ＳＫ１３・１４
中右：ＳＫ１５
下　：ＳＫ１６

第42図1

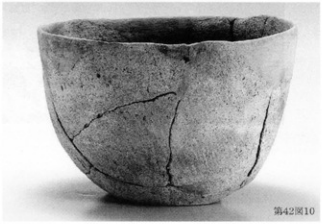
第42図2

第42図5

第42図6

第42図8

第42図9


第42図10

第48図3　第48図1　第48図2

第43図13

報告書抄録

ふりがな	きょうがさきいせき・かんのんざわいせき
書名	経ケ崎遺跡・観音沢遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	高清水町文化財調査報告書
シリーズ番号	第2集
編著者名	佐藤憲幸・後藤秀一
編集機関	宮城県教育委員会
所在地	〒980-8423　宮城県仙台市青葉区本町3-8-1 TEL022-211-3682
発行年月日	西暦1999年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
きょうがさきいせき 経ケ崎遺跡	みやぎけん 宮城県 くりはらぐん 栗原郡 たかしみずちょう 高清水町 あざかみさとうがさき 字上経ケ崎他	045241	44003	38度 39分 10秒	141度 00分 00秒	19980408～0629	約6,200	町道改良 拡幅工事
かんのんざわいせき 観音沢遺跡	たかしみずちょう 高清水町 あざだいまち 字台町	045241	44019	38度 38分 36秒	141度 00分 39秒	19980701～0721	約830	町道改良 拡幅工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
経ケ崎遺跡	集落跡	奈良	竪穴住居跡 土壙・溝跡	土師器・須恵器 砥石	一辺約10mの大型住居跡が2軒発見された。
観音沢遺跡	集落跡	縄文	Tピット	縄文土器	
		奈良	竪穴住居跡 土壙・溝跡	土師器・須恵器	

高清水町文化財調査報告書　第２集

経ヶ崎遺跡
観音沢遺跡

印　刷　平成12年３月20日
発　行　平成12年３月31日

発　行　高清水町教育委員会
宮城県栗原郡高清水町桜丁５

印　刷　南部屋印刷株式会社
宮城県栗原郡築館町高田一丁目7-36